
魔王は六課の食堂長

犬養犬彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王は六課の食堂長

【Nコード】

N5781J

【作者名】

犬養犬彦

【あらすじ】

かつて世界の調停者として君臨した魔王の血筋。

彼らは自分たちを「緋乃神」と名乗り、世界のあらゆる現象に干渉し、これをおさめてきた。

しかし、ネバーランド歴1111年、闘神との戦いでそのほとんどが死に、世界の50%が滅んでしまう。そしてその罪を着せられた「緋乃神」は存在そのものを否定されてしまうのだった。

生き残った「緋乃神」たちは、住处を求め、別世界へと旅立った。もう調停者などではなく人並みの幸せを求めて…

しかし、その世界も彼らをそつとしておいてはくれなかった。
その世界で生まれ、その世界で育った青年は、今その世界の大切な人達のために剣と鍋を振るう。

プロローグ（前書き）

初投稿です・注） このネバーランド史は、作者の頭の中で出来上がったもので、本編とは全く異なります。その他にも独自設定やあり得ない設定など、多々登場する可能性があります。ですので、そういった傾向が許せない方は、読むのをお控えください・
それでもお付き合いいただけるといっているのであれば恐悦至極です。なにぶん、初の試みでして、誤字脱字、不鮮明な解釈など多いと思いますので、そういった部分をご指摘頂けたら幸いです。

ブローグ

世界が紅く染まっている。

街のあちこちが壊れてるのに人が叫ぶ声も燃え崩れる音も聞こえない。

ただ静かに燃えてる。

「待ってくれ！せめて僕も一緒に行かせろ！」

そんな世界にも異端はいるようだ。

一人の青年が前を歩く二人の青年に向かってそう叫んでいる。

青年の身体は見るからにボロボロ、立っているのもやっとなよう
だ。

「駄目だね、お前はここに残れ。」

二人のうちの一人、赤い髪の男が振り返りながら言った。
顔はよく見えないが二つの赤い点が見える。

あれが目なんだろうか？

…目だけ見えるって何でだよ、光ってんのか？

「何でだよ！今までだってずっと一緒にやってきたじゃないか。二人だけなんて危険すぎる！」

…どうやら青年は必死だな、決して行かせまいと、決して置いていかれまいとボロボロの身体に鞭を打っている。

…熱意は買うが駄々をこねる子供みたいだな。

「何でって？俺とコイツで済むんだ。わざわざ死人を増やす必要はないだろ。」

…さっきから「何で」ばかりだ。

飄々と赤い男が返してくる。実にやれやれといった感じだ。

…スカした奴だ。コイツとはソリが合わないだろうなあ。

「というか、正直お前にも残ってほしいんですけど？」

赤髪の隣に立つ青年は細身で眼鏡をかけてる。整った顔立ちはしているがいかにも堅物といった印象でそこはかとな冷たさを感じ

る。

「フン、僕は保険のようなものだよ。君を信用してない訳じゃあないが、楯ぐらい必要になるんだろっ?」

赤い髪はチツと舌打ちするとおもしろくなさそうにふてくされた。

……堅物の他に皮肉屋も追加した方が良さそうだ。

「とにかく今のお前じゃ足手まといだ。後はまかせとけよ」

シッシツと、犬でも追ひ払うように赤髪は手を降るがボロボロも引き下がない。

「彼女はどうするつもりだ？」

ボロボロの一言に赤髪の顔色はみるみる変わっていった。

「……………」

…何て言うか、よくわからないが非常に悔しそうだ。泣きそうになっ
てんじゃないか、あれ。

「あの人を泣かせることになるんだぞ！」

…いやお前も泣かしたよ、コイツをだけど。

「それはお前が一番許せなかったことじゃ…」

「紅^{くれは}葉あ」

その時、初めて赤髪がボロボロの名前を呼んだ。

…なんでだろう、引つ掛かる、今の名前。

「それ以上言つなよお、行きたくなくなるだろお」

先刻までの飄々とした態度はどこへ言ったのやら。なんとも情けない声を出している。

……コイツに対しての認識を改めないとな。

「何か、他に手はあるはずだ！今からでも遅くない」

ボロボロ改め紅葉は、なんとか止めようとここぞとばかりに肩を掴んで揺さぶるように畳み掛ける。

「でもな」

その瞬間に赤髪の一撃が彼のみぞおちに炸裂する。

「今は俺にしかできないみたいなんだ。あんまり時間も無いだろ。」

崩れ落ちる紅葉から離れると、赤髪はまた先程までの飄々としていて、余裕たつぷりの男に戻っていた。

…切り替えの速い奴だ

「そろそろいいかな？」

堅物眼鏡は少し呆れたような口調で赤髪に問いかける。しかしその顔が優しいと感じるのは俺の気のせいなんだろうか？

「ワリイ、待たせたな。」

肩をすくめながら赤髪は歩き出した。

「待…て…」

「待つて…くれ…ゆだや綬蛇矢…みぶ壬生…」

…ッ！

紅葉が呼んだ名前にドキリとする。最初に呼んだ方の名前、あれは……

「ああ最後に」

振り替えたその顔は今度はちゃんと見えた。

そこで全て思い出す。

この光景がなんだったか。

コイツ達が誰だったか。

コイツの顔がどんなだったのかを。

同時に何故か激しい自己嫌悪に陥る理由も。

……もう何回目だろうな、これ。幾らなんでも似過ぎてんだよ。

母さんの遺伝子どこ行っただ？てか、同じ名前つけんなよ！

そいつは俺と同じ顔を満面の笑みに変え、

「あの人に手えだしたら死ぬよりヒドイ目に遭わせてやる。じゃあな、兄貴。」

「俺^{ちち}」は「叔父^{あに}」に別れを告げたのだった。

プロローグ（後書き）

乱文、御拝読ありがとうございます>m(_____)m<というか、プロローグ二次創作なのはほオリキャラだけってのも…。ちなみに、主人公の綬蛇矢（ゆだや）という名前はM A O A O Aに出てくるキャラクターから頂いたのですがそのキャラとは全く関係ありません。見た目も全くの別物です。別の名前にすればいいじゃん。と思うのですが、作者、この漫画と名前をいたく気に入ってましてどうしても使わせて頂きました。読んだことがある方、もしくはあのキャラのファンの方には紛らわしさと、ご迷惑をおかけすることをここでお詫び申し上げます。M A O A O A関連のネタはおそらくこれだけになると思いますのでどうかご容赦ください。読んだことない人にはさっぱりでしたね^^;

第一話（前書き）

第一話です。書くのってやっぱり難しい（汗）

第一話

「……堂長………食堂長………桧上食堂長」

何だ？誰だよ俺を呼ぶのは？

「おい。聞こえてますか、食堂長」

聞こえてるって、あんまり耳元で怒鳴るな。疲れてんだから少し

休ませてくれよ。

「ねえ、起きてくださいよ。しょくどちよ。」

うつとおしいことの上ねえ。うつなったら意地でも起きねえぞ。

「何もたまたやってんだよ。ってなるほどな、ゆっくりお休み中って訳だ。」

「あッ！副隊長。そうなんですよぉーもう全然起きてくれなくつて。」

なんだろう、この背筋が凍るような感覚は…

「コイツは一回寝るとなかなか起きねえんかな。まあ、そういつときは……………」

「ちよっ、こんなところでデバイスなんて使っちゃマズッ……………」

マズい、今すぐ起きろ俺ッ！

「こっつやってえッ……………起こすんだよおおおおおおオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「……あの……大丈夫ですか食堂長……?」

声をかけていた少女、ショートヘアで快活な印象を与えるスバル・ナカジマが心配そうに……というより恐る恐るといった感じで尋ねる。

「心配ねーよ。ちゃんと非殺傷だしそいつはそんなヤワじゃねーから」

チビっこのなのに口の悪い少女、ヴィータは手に持ったハンマー「グラーファイゼン」を肩に担ぎ、ウンウンと頷いている。

「でも……」

ピクリとも動かない事にスバルは不安を抱く。いくら非殺傷とはいえあんな一撃を貰ったのだ。確実に昏倒してるハズ。

「だから大丈夫だって。なんたってコイツもアタシが鍛えたんだからな。………ほんのちよつとの間だったけど………」

それでも楽観的なヴィータに、じゃあ今まさにみっちり仕込まれてる自分はいずれどういった扱いを受けるのだろうと思うと、寒気が止まらないスバルだった。

「やあヴィータ、ナカジマ、おはよう。おかげですっきり目が覚めたよ。」

いつの間に起き上ったのか、馬鹿な男、桧上綬蛇矢（ゆだや）が

にこやかに挨拶した。もちろん目は笑っていない。仮眠を邪魔された上に謂われなき一撃を貰ったものの怒りの笑顔は、スバルの背筋をさらに凍りつかせる。

「馬鹿かテメーは。今何時だよ？頭おかしくなってんじゃねえか？」

ワザとなのかそれとも素で言ってるのか、ヴィータの言動で場の温度は下がる下がる。何とかこの空気を改善しようとしていたスバルにはあまりにも酷なセリフだ。

「ハハハ、相変わらずヴィータは厳しいなあ。」

まだ笑顔だ。逆に不気味すぎる…

(……………アタシ……………何か悪いことしたっけ……………)

彼女の心情を気遣える者など、この場には居なかった…

「それで、お前達の目的は？この俺にここまでする程の目的とはなんなんだ？」

現実逃避を始めたスバルをよそに、綬蛇矢はなおも笑顔だ。もはや、貼りついた笑顔は曇らない。完璧な作り笑顔だ。普段は物静かな男だけに珍しいと言えはそうなのだがその顔からは恐怖以外感じられない。

「…わかってんだろ？早くいつものよこせよ。まさか忘れたとか言わねえよな？」

流石に不快感を抱いたのか、はたまた、見慣れない顔が気持ち悪くなってきたのか、ヴィータも警戒し始めたようだ。無意識の内にデバイスを握りしめている。だがそんなこと知らないといった様な

口ぶりで、

「ちゃんと作ってあるって、ほら。」

二人の目の前に、数人分のアイスクリームが置かれた。ヴィータとスバルは汗を流した後のコレをいつも楽しみにしていた。

「……………」

だが二人とも手を出そうとしない。今だ警戒したままで、何か細工があると読んでいるようだ。それもそのはず、彼は一度も怒りを露わにしていない、自分たちに報復するのであればここが絶好の機会となる。

そう思っていたのだが、

「おいおい、顔が怖いぞお前ら。さてはさっきの仕返しに俺が何か

仕込んでると思ってんだろ？」

このセリフの後から二人の警戒は解かれ始める。なぜなら…

「俺はれっきとした料理人だぞ。食べ物を粗末にしたりするかよ、んな時間もなかったしな。ヴィータのあれも、昔からずっとだろ？今更文句は言わないよ。」

綏蛇矢は、笑顔で、今度はちゃんとした笑顔でそういった。その顔は誇りに満ち、どこか懐かしい宝物でも見つけた風なそんな顔だった。

「…あー…なんだ、その、悪かったよ。」

「私も、もっとちゃんと起こすべきでした…」

バツが悪そうに謝る二人。スバルは今まで、この男のことを無愛想でとっつきにくいと思っていたが見る目が変わったようだ。

「ほらほら、溶けちまう前にさっさと持ってきたな。」

綬蛇矢の言葉に、おう、とかすいません、とか答えながら持つていこうとする二人に思い出したような声がかかる。

「ああ、そうだ。ナカジマ、このソースを試してみてくれないか？」

手渡されるのは小さなプラスチックの容器。光に透かしてみると綺麗な緑色で香りは甘い。

「これ何のソースですか？メロン？」

「まあウリ科には違いないな。」

そんなやり取りにかまけたスバルの手から、ひょいと取り上げる約一名。

「こいつはアタシが貰ってってやるよ」

そう言い残し、ヴィータは去って行った。

「あゝッ!!それアタシが貰ったのに」

心底がっかりしたという風なスバルの肩に綬蛇矢は手を置く。

「ナカジマ」

「うっ、食堂ちょ……う？」

振り返ったスバルが目にしたのはあの笑顔だった。あの邪惡な笑みだった。

「計算通りだ、よかったな。お前はこれで見逃してやる。」

スバルは恐怖で動けなかった。完全に信頼を置いてしまっていたのでその反動は大きい。今までの事は全て嘘だったのかと思うと目眩すらしてくる。

「言っとくが俺は何一つ嘘は言っていないぞ。さっきのだって素直にそう思うし、食い物を粗末に扱ったりしない。ソースだってほんとに上手く出来てる。」

そんな綬蛇矢の言葉にスバルの頭の中では今度は逆に疑問が浮かび上がってくる。ならあれはどんなソースなのかと、

「ただ、本来使う濃度の十倍くらいってだけだ。アイツの事だからたっぷりかけるだろうし。文句は言わないが怒りはすんだよ、俺は。」

クツクツクツ、と笑う綬蛇矢はもはや悪魔に見えてくる。

「……………何のソースでしたっけ？」

「言っただろ、ウリ科だって。香りはメロンだな。」

スバルは思った、この人は怒らせてはいけないと、自隊の隊長と

どっちが怖いだろうか。また見る目を変えることになったこの男に、スバルは自分の頭の中にあるものを言葉にした。

「……………キュウリ？」

「残念はずれ。今度作ってみるのもいいかもな。」

彼は今この時が楽しくて仕方ないらしい。

「
ゴーヤだよ。」

その言葉の直後、六課隊社にヴィータの絶叫が響き渡った……

第一話（後書き）

夢から覚めたら一撃、という展開です。というかグダグダっすね（汗）

第二話（前書き）

第二話、前回の続きです。

第二話

「ほらほら、いつまでもここに居ると面倒なことになるぞ。さっさと部屋に戻って休みな。」

ヴィータの絶叫にしばし放心していたスバルだったが、声をかけられ我に変えると、

「そ、それじゃ失礼します。」

と一礼してあわてて出ていく。それはそうだろう。彼女の性格を考えれば必ず文句を言いに来る。となると、巻き添えを喰うのは必然だ。

「ああ、猛獣に出くわさないようにな。」

と、にこやかに手を振る緩蛇矢。彼はこれからやって来るヴィータをどうにかおつかと思うと楽しくてしょうがないようだ。

「楽しそうだね、緩蛇矢。今度は何をやったの？」

「どうせまたヴィータの事いじめてたんやろ？仲が良いのはエエんやけどやり過ぎると怒るよ、ゆー君。」

不意にかけられた二つの声に彼は驚いた。あまりに愉快で背後の気配に気づけなかったらしい。

（そういえば二人で本局に行くとか言ってたっけ。熱くなると廻りが見えなくなるのはいい加減に直した方が良さそうだな。）

そんな自分に苦笑いすると、

「お帰り。ずいぶん遅くなったんだな。言っとくが俺は被害者だぞ。」

いつものぶっきらぼうな態度で振り返ると、そこには六課部隊長の八神はやてと、六課フォワード部隊のライトニング分隊長のフエイト・テストロッサ・ハラオウンが苦笑いをして立っていた。

「はあ、やっと帰ってこれた。本局のお偉いさん達も意外とタフやで。」

「確かにちよつと疲れたかな。」

今朝方から今まで、ずっと会議やなんやで休憩もとれなかったの
だろう。二人の顔には疲労の色がありありと浮かんでいる。

「ちょっと待ってな、立ち話も何だからお茶入れてくるよ。食事は
入りそうか？」

「うん、申し訳ないけど今はお茶だけでええな。」
「私も。今からだとちょっと、ね。」

了解、と言って綾蛇矢が厨房に引っ込むもうとした時、もう一人
客が現れた。

「綾蛇矢君厨房貸してー…ってあれ？二人共帰ってたの？」

「うん、ついさっきな。」

「ただいま、なのは。」

やって来たサイドポニーの女性、スターズ分隊長兼フォワード
部隊指導教官、高町なのは、に各々声をかけると厨房から、

「なのは、またキャラメルミルクだろ？一緒に持ってつてやるから座つてな。」

と、声がかかる。

「うん、ありがと、じゃあお願いするね。」

と返事を返すと、なのはははやて達に今日の出来事を話始めるのだった。

ちなみに

（にしても、毎度寝る前に良くこんなの飲むな）
という彼の思いは、今日も言葉にはされなかった。

.....

「それでどうなんだ？今後の活動方針。」

「やっぱりまだ現状維持やね。相手の目的はわからんし、レリックに関してはまだ見つかってない。」

溜め息をつきつつお茶を受け取るはやて。その表情はさえない。

「でも進展はあったよ。」

今回の事件にはあのジェイル・スカリエッティが関わってるみたいなんや。」

その名を聞き、綬蛇矢となのはは顔を曇らせフェイトを見やる。

「そう、前々から私が追っていた男。そして、プロジェクト「F」の基を作った研究者だよ。」

プロジェクト「F」。

生命操作技術の1つであり、その技術を使って娘を蘇らせようとした一人の女によって、フェイトは産み出された。しかし、女にとってフェイトは娘に良く似たコピーにすぎず、別離のその時までも愛情を注がれることはなかった。

事情を知る三人は表情が暗い。

だが……

「ほらほら、んな恐え顔すんな。お前にゃ似合わねーよ。」

「せやな、フェイトちゃんには笑顔やさかい。」

「私達がいつだって力になるから……ねっ。」

フェイト一人に背負わせはしない、けっして同じ悲劇を繰り返させないという確固たる決意がそこにはあった。

フェイトは少し驚いたような顔をした後に

「ありがとう…みんな」

と、はにかんだ笑顔を浮かべてくれるのだった。

……

「まあ固い話はここまでやな。ゆー君以外は明日会議するから後は
そんな時やな。」

言ったとたんぐにゃ〜とだらけるはやて。そこには部隊長としての威厳などあったものではない。守護騎士達（主にシグナム）が見たらどんな顔をするか見てみたい気もするが。

「も〜、だらけすぎだよ。はやて」

「ゆっくりできるのこの時間くらいだからね〜。」

「……………とても他のヤツラにゃ見せらんねーな……………」

何だかんだでまったりしてしまった空間で和みまくってる三人に呆れる一人。

「それにしても、こうしていると昔に戻ったみたいやな〜。」

「そう言われると確かにそうだね。」

「アリサちゃんやすずかちゃんともよくこんな風にお茶したよね。
たまにユーノ君もいたりね。」

今は離れた場所にいる友人達。彼女達にとってかけがえのない物
で大切な人達。

（俺の立ち位置はあんまり変わんねーけどな……でもまあ……）

「懐かしいなあ。あの頃はまだ漠然としたものやったけど、自分の
部隊を持つゆー夢がまさかこんな早くに形になるなんてな。ほん
まに、皆とうちの子達には感謝しとるよ。」

「だから、前にも言ったよ、水くさいって。」

「小学三年生からの友達、でしょ。」

そう言って笑いあう三人。そんな彼女達を見るのが、綬蛇矢は好
きだった。

しかし、

「ゆー君もおおきにな。ついて来て貰った上にこないな役職にまで就かせてしもて。」

「まあ、確かに家事が出来るとは言っても食堂長とはな。正直周りに申し訳ないんだが、ついてきた以上しっかり勉強させて貰うしちやんと働くさ。それに、おれは「保険」だからな。」

彼には、彼女達の為の「保険」にしかねないという負い目が、いざという時にしか駆けつけられないという憤りがあった。

しかし、当の彼女達かというと何を今更という風に、

「保険はあくまで保険や。ゆー君に期待しとるのはそんなんやあらへん。こうなるとゆーか、頼れるとゆーか。」

「背中を任せられるってゆーか。」

「そこに居ると安心できるんだよね、なんか。心強い。」

とか言ってくれる。

それを聞いた瞬間、綬蛇矢は急に立ち上がり、「ほらほら、そろそろお開きだ」とか言って、そっぽを向きながらカップを片づけ始めた。しかも、なぜか鼻声になっている。

「あれあれ、綬蛇矢君。どうしちゃったのかな？ どうしてこっち向いてくれないの？」

「ほんま、涙もろいな。」

「照れ屋で泣き虫なんだから。」

三人にからかわれ、止まらない涙に苦笑いを浮かべつつも彼は思う。彼女達にはいつも笑顔でいてほしいと。

「ほらほら、さっさと部屋に帰れ。はやても、早めに休んどけよ。」

その為に支え続ける事が彼女達へのせめてもの恩返しなのだ。

そうして六課のある1日は終わるのだった。

余談だが、この後一人になったところをヴィータに襲いかかられ、激しいバトルの末に隊舎からの苦情が殺到。二人は喧嘩両成敗ではやてとシグナムにこっぴどく怒られるのだった。

第二話（後書き）

何かまだプロローグって感じで話進みませんね（汗）時間軸としては初出勤が終わった所になってます。次回はホテル・アグスタの予定です。正直、自分にバトルなんて書けるんだろうか…

第三話（前書き）

三話です。ってかバトルを書こうと息巻いていたのにそこまでたどりつけず……………無念……………（涙）

第三話

「ホテル・アグスタ？」

「そや。今度そこで行われるオークションの警備を任されてなあ。そこにレリックはあらへんのやけど、似たようなもんにもガジエツトは寄ってくるみたいなんや。」

「ガジエツト」 スカリエツティが作り出した自立型の戦闘機械で、レリックの絡む事件には必ずと言っていいほど姿を見せる、機動六課の主な敵である。

「ふーん、まあ行ってきたな。土産話に料理の感想でも頼むよ。」

何とも興味無さげに言う綬蛇矢ゆだやに、はやてがぼかーんとする。なんだかくだらないシャレを聞いて固まったような、そんな呆けぶりだ。

「何言つとるのん？ ゆー君も行くんやで。」

その言葉に、今度は綬蛇矢が呆れてしまう。こつちの場合は、くだらないシャレにどうツツコミをいれたものかと思案するような表情だ。

「警備なら危険も少ないだろうし俺が行く理由が何処にある？ 守護騎士も全員行くんだったら安心だろ？ むしろ邪魔になりそうだぞ。」

確かに近くに居ないのは心配だが、彼女達は最早歴戦の猛者だ。お供もバッチリというのであれば、あの程度のガラクタに後れをとることなどまずあり得まい。綏蛇矢は自分に出来る事をして待ってしようと思っていたのだ。

しかし、はやてには別の思惑があるようだった。

「いやな、どうもその場には密輸品やら盗掘品やらも紛れ込んでるらしいんや。保管場所は地下なんやけど狙ってる盗賊もおるらしいし、裏取引も行われるとか。」

「そんなの、誰か一人そっちにまわせば済むんじゃないのか？」

もつともな意見だがはやては首を横に振る。

「普通ならそれでもエエんやけどな、問題はガジェットが現れてからや。シグナム達は最前線やろうしシャマルは指揮せなあかん。新人達は一人でも抜けるとまだまだ頼りない。アタシらは会場内から動けへん。となるともう一人、ある程度自由に、かつ単独で動ける人が必要になる。」

確かに筋は通っている。通っているのだが大事なことを見落としているのではないか？

「相手に手練れが居たらどうするんだ？そんな場所じゃ俺にはどうしようもないぞ？」

そう、確かに綬蛇矢にも特殊な力はある。が、それも許可がなければほとんど使えない。今の彼はちよつと運動神経がいいだけで取

り柄と言えば特殊体質？って感じのただの魔導士に過ぎないのだ。

「だから、あくまで保険。もし現場を抑えたらすぐに連絡、場合によつては時間稼ぎ。これが頼みたいことなんやけど。」

「…なるほど、今の俺には適任だったようだ。」

説明を受けてしまえば確かにそうだと了承する辺りがこの男らしい。納得するのもどうかと思うが。

「決まりやね。シグナム達と一緒に、前日の夜から現地入りしてもらうから下見しといてな。」

当日の行動については、向こうの厨房の臨時シェフってことで話っているから、事情を説明すれば自由に動けるよ。」

そして最後に、

「ほんまにいざうちゅう時にはアタシが許可出すから。」

とつけ加える。その表情は真剣そのもので、はやてがこんな顔をする時は何か決意した時に他ならない。

そして彼には、その表情の意味がわかっていた。しかし、だからこそ、

「ほらほら顔が怖いっての。まあ、大船に乗った気にいるよ。ちょっとした社会見学だしな。」

、と、あえて笑い飛ばすのだった。

.....

そして前日の夜。

夜ももう遅い時間。世界は黒く染まり、今日一日の終わりを連想させ、生き物達に一時の安らぎを与えてくれる筈の静かな夜……

だと言つのに……

六課隊舎にはギヤーギヤーと怒声が響き渡っている。近所迷惑も
いいところだろう。

「ハア…ハア…ギリギリ…セーフ？」

「アウトに決まってるだろこの馬鹿！！」

「遅いぞ、桧神。」

それと言つのも、薄い赤髪をポニーテールにした背の高い女性、
ライトニング隊の副隊長シグナムと、スターズ隊の副隊長であるヴ
イータが、遅刻してきた馬鹿に対して怒りを露にしていたからだっ
た。

しかも、その理由と言うのが、

「ハア…ハア…すまねえ…ハア…よく考えたら俺…ツハア…任務
つて…ハア…初めてでさ…ンツ…何か緊張しちゃってさ…ゲホツ…
昨日から…ハア…全ツ然…ハア…眠れなくてさ…昼寝…ツ…して
たら…ハア…こんなになっちまった…フウ…」

…小学生かこいつは……

「ハアハアハアハア鬱陶しいんだよ。もういいからさっさと行くぞ。」

「そつえばお前は、昔からそついう男だったな……」

最早二人共、呆れ返ってしまったのか何処か疲れた顔をしている。
本当に迷惑な奴だった。

.....

六課部隊長室……

「そろそろですね、シグナム達の出発時間。」

はやての隣に居るのはリンフォース・ツヴァイ。彼女ははやての融合騎でその姿は妖精のそれと酷似している、が、ふと呟くと、

「せやなあ。見送りに行ければ良かったんやけど…」

とはやてが残念そうにこぼす。彼女の目の前には大量の書類が山のように積んであって、それを見るたびにため息が出そうだ。

「明日は出張ですからね。」

今のうちに終わらせないとです。」

リンが息巻いているがはやてはもはやウンザリといった感じだ。

「しかし、いくらなんでも多すぎやな……」

それもその筈、

「はやて、この書類はこれで良いかな？」

「はやてちゃん。こないだの戦闘記録も持ってきたんだけど……」

隊長達も同じことを考えていたからだった…

「あのーちょっとは加減してくれへんか二人共？」

「だって、ヴィータちゃんとシグナムさんは今から出発だし……」

「そのぶんがこっちにも回ってくるわけで…」

「こうして残業ってわけですね。」

その一言を聞いた瞬間、はやてはプシュー、という音と共に
「あかん、もう無理や」。ちよつと休憩しよ。」と、机に突っ伏し
てしまうのだった。

.....

「なあ、なのはちゃん、フェイトちゃん？」

「ん？何？」

「どうしたの？」

ふつと切り出したはやてに、二人は手を止めて返事を返す。古い
付き合いからか、声に違和感を感じたからだ。

ちなみにリインはお茶を貰いに行った。

「ゆー君の事なんやけど…やっぱり任務に参加させるのまずかったかなあ？」

すまなそうにはやては洩らす。その顔には覇気がなく何処か思い詰めているようだ。

「確かに、食堂長を警備任務に参加させるのはどうかとは思っけど…」

「ちゃんと魔導士なんだし本人が良いなら問題無いんじゃないかな。」

と二人は言うがやはり何処か浮かない顔をしている。

「…何かこう…危なっかしいというか…まるで自分なんかどうなっても良い…みたいなところあるやん、アイツ。」

はやての言葉は次第に暗く重くなっていく…

「なのはちゃんやフェイトちゃんと会ったばかりの時やって相当無茶したみたいやし、夜天の書…一般には闇の書事件か。あの時かて私の為に凄く辛い思いをしてくれた…そして…そのあとすぐ…あの事件が…」

「ストップ」

という一言と共に、はやての口をなのはが押さえた。

「そこから先はダメだよ、はやて。」

と、フェイトが語りかける。その顔には厳しさと共に、親友に対する優しさがあった。

「でも…やっぱり心配なんよ…アイツは自分の事、いつも二の次やし…なあ…二人とも心配やないんか？」

解放してもらったはやてはそれでもまだ不安そうで、思わず聞き返してしまっていた。

「心配だよ、私達だつて。」

なのはの言葉に顔をあげるはやて。見上げたなのはの顔はフェイトのそれと同じで厳しくも優しかった。

「でも緩蛇矢は、それ以上にずっと私達の事心配してると思う。うん、私達だけじゃない。自分に関わった全ての人達の事を気にかけちゃうような人だから…」

「だから、過去に捕われて今も傷ついているようなら、綏蛇矢君またきつと前みたいに無茶すると思うんだ…ってあれ？」

二人の言葉は真っ直ぐで、あまりにも真っ直ぐ過ぎて、はやては完全に呆けてしまっていた。かと思うと、今度は急に笑い出した。

「…なんか…恥ずかしくなってきた…」

「うーん…決まった！…と思ったんだけどなあ…」

自分が言ったセリフを思い返してか、フェイトの顔は真っ赤になった。日頃から言い慣れてるからか、なのはの方はケロッとしていたが…

「いやいや、ごめん。なんか急に自分がちっぽけに思えてな…せやね、ゆー君はしょうもないお人好しやから、アタシらがしっかりしとらんな。」

はやての顔からは、もう先程のような不安は消えていて、憑き物が落ちたように晴々とした表情を浮かべている。
そして、お互いに顔を見合せて笑いあうのだった…

「さて…そろそろ再開しようか。」

「そうだね、さっさと終わらせちゃおう。ほら、はやてちゃんも。」

「はい。さて、と。」

はやては書類に目を通そうとする、が、ふと窓の外に目を向けた。気付けば、他の二人も同じことをしている。

そして、皆一様に、お人好しで馬鹿な幼なじみの顔を思い浮かべるのだった。

.....

そして、その件くだんの人物はというと……

「
××××××××××（あまりにもビドイので御想像にお任せします）
」

…吐いていた…

「しっかりしろっての、馬鹿。ほれ酔い止め。」

「……………」

サンキュ、と伝えたいのだろうが喋れず、なんとか身振り手振りで伝えようとするが余計に酷くなったのか青ざめた顔が更に青くなっていく。

「そつえばお前は、昔から乗り物が駄目だったな…」

「一応空は飛べんのかな。器用な奴だ。」

「……………」

反論したいようだが最早動くのも億劫なので諦めて吐くことに専念する馬鹿。

こうして馬鹿は、初めての任務に向かうのだった……

第三話（後書き）

いやあ何か話の展開って難しいっすね（汗）話をぼかしつつ必要な情報は出さないといけない。もし辻褄が合わない…なんてことになったら読んでくださった皆さんに申し訳ない。なので、一話一話しっかり書いていこうと思います。

第四話（前書き）

第四話です。今回からやっとバトルっぽくなりました（汗）

第四話

（なるほどね。部隊長と副隊長達の事はある程度わかったわ。）

（どういたしまして。私も詳しくは知らなくてゴメンね。）

念話でスバルに、はやてやシグナム達の経歴を聞いていたティアナ・ランスターは、六課の異常な戦力と自分の存在について疑問を持っていた。

隊長は二人共魔導士ランクがオーバーS、副隊長もニアSランクで部隊長に至ってはSS。新人とはいえ優秀なオペレーター陣がバツクを固め、そこに将来性抜群のメンバー達…

……やっぱり。この部隊の凡人は私だけ……

射撃コントロールと多少の幻術しか使えない自分が六課むくに呼ばれた理由が、ティアナにはわからない。

わからないが、これはチャンスだった。

…でも、そんなの関係ない……いつだって自分の力で証明してきた。ランスターの弾丸に撃ち抜けないモノは無い、と。私はこんな所で立ち止まってなんかいられないんだから…

彼女は決意を新たにするが、その張りつめた表情はどこか危うかった。

その時ふと、さっきの自分の言葉に引っかかる部分がある。

……凡人と言えば……前から気にはなってたのよね……

と思い出したようにスバルに念話を送る。以前から聞こうと思っていたが、訓練やら仕事やらで今まで忘れていたことがあった。

（ゴメン、スバル。さっきの今でなんなんだけど、まだ大丈夫？）

（ティア？うん、平気だよ。まだ聞きたいことでもあった？）

案の定、暇だったようでスバルの答えは明るい。警備にも飽き始

めてきているのだろう。しかし、

（あの食堂長っていったい何者なの？）

と言う一言を聞いた瞬間、ビクッと痙攣すると、そのまま固まってしまう。

（隊長達と仲良いみたいだけど、無愛想だし、食堂長らしい仕事もあんまりしてないみたいだし、今回みたいな任務には参加してるしで何かちよつと変じゃない？……って！聞いている？）

（え！ああ、うん、聞いている聞いている、ちゃんと聞いているよ。）

（どうかしたの？様子がおかしいわね……？）

（いやあなんでもないよゝハハッ…ハハハハハ…）

この間の一件でトラウマになったようで、今のスバルの脳裏には
綬蛇矢の邪悪な笑みが写し出されていた。

気を取り直して考えてみると、確におかしい。普段は無愛想だが、面倒見がよく、さりげない気遣いもできる人（料理関係のみ）なのに、ギャップの激しさ故か、人間像をイマイチ掴みきれない。そのうえ、予備人員とはいえ警備任務にも出てこれるということは魔導士なのだろう。

（まさか……六課の秘密兵器だったりして！？）

（…バカね…んな訳無いでしょ…まあ仮に、
そうだとしたって何で私達に秘密にすんのよ？）

いくら非公式とはいえ、六課の戦力になる人物なのだから隠しておく必要はないはず。となると何か理由があるのだろうか……？

（だから秘密兵器なんだってば。秘密兵器が秘密兵器じゃなかったら只の兵器だよ？）

スバルのアホな物言いに軽い頭痛を覚え始めるティアナ。その顔からは

（コイツに聞いた私が馬鹿だった。）
と傍目から読み取れるほど寒い目をしている。

そんな彼女の心情を察してしまったのか、他に何かなかったかと慌てて思い出し始めるスバル。

(……あ……そういえば、前に一度聞いたんだけどさ、食堂長つてなのはさん達の幼なじみなんだって。だからそれでじゃないかな?)

その事を聞いた瞬間、ティアナの態度が明らかに不機嫌になる。

(じゃあ何?、そのよしみで働かせてもらってるってこと?……ずいぶん虫の良い話じゃない)

その攻撃的な発言にスバルはビビってしまう。

……なんかアタシのせいでヤバイことになってない?……マ……マズい……

(あ……あのさティア……まだそうと決まった訳じゃないし、もしかしたらちゃんと理由だってあるかも……)

(どっちにしろ、ロクなもんじゃないわよ。他人のコネで生きてる人なんてね。)

(あ、エリオとキャラ口ならアタシ達より付き合いが長いから何か知ってる……)

「聞くまでもないわ。子供がそんなこと知ってるとも思えないし。」

なんとかフォローをいれようと躍起にはなるが、ティアナに一蹴され、空回るだけである。

（うつゝすいません、食堂長）

いつの間にか自分のせいで更に印象が悪くなった食堂長に対して、ひたすら申し訳無さを感じるスバルだった。

ホテル厨房内

「……何か寒気がすんなあ……風邪でもひいたか？」

自分の知らない場所で言いたい放題言われてる馬鹿が一人でブツブツ言っていた。

「コルアー！！新入り！！さっさと野菜持ってこんかい」

「……へい……」

（で、はやて。これはどういうことなんだ？）

そう、自分は雇われ臨時シェフとして来たはずなのに、何故か今日からここで働くことになった新入りということになっている。

（いや、かにんなあ。どうも手違いがあつたみたいで。せやけど、どうせやることは変わらへんのやし問題あれへんやろ？）

念話で答えるはやては、言葉とは裏腹にどこか愉快さと底意地の悪さを感じられる。

正直想像するのが怖い……

（……無駄だと思うが一応文句でも言わせてくれ。下っぱ扱いはまだ良いんだが先輩が恐すぎるぞ……）

そう言つと、チラリと先程の男に視線を送る。

坊主頭に眉無しの男がコック帽をかぶりウンウン唸っている。コックコートに包まれた身体は今にもはち切れそうだ。

(どこのヤク。さんだよ……)

(ちょうどええやん。ゆー君もここらで社会の厳しさってのを味おうてみいや)

……狸の皮被った鬼め……俺の周りはこんなヤツらばっかだな……

「オルア！！新入り！！サボつとらんで手え動かさんかい！」

「……へい……」

（ほら、先輩が呼んどるよ。じゃあ、しっかりな）

そう言い残し、念話は切られた……

（……………）

綬蛇矢は一度肩をすくめ大きな溜め息をつく、急いで先輩の下へ駆けて行くのだった。

……………

ホテル屋上

「……クラールヴィントのセンサーに反応！？……シャーリー！！」

「はい！！……来た来た！！来ましたよ！！陸戦一型、30……35……
陸戦三型、2……3……4……まだ来ます！！」

「すぐに部隊長に連絡を。前線にはこちらから伝えます。」

「了解！！」

（シグナム、ヴィータちゃん、聞こえる？こちらシャル）

（あいよ、こちらヴィータ。今ロビーだ。どした？）

（こちらシグナム、いま地下だがザフィーラも一緒だ……来たのか？）

（ええ、一型と三型の陸戦編隊。数は恐らく100以上…）

（問題無い、今からヴィータと合流して討つて出る。新人達には正面の防衛を、指揮は任せたぞ）

（了解、三人とも気をつけてね）

（心配すんなって、そっちにゃ一機足りとも通さねーよ）

.....

（綬蛇矢さん、聞こえますか？エリオです。）

（あい、こちら綬蛇矢。交代か？）

溜まっていた洗い物を片付けている所にエリオ・モンディアルから念話があったので手を休めず受け答える綬蛇矢。どうやら先輩に見張られているようだ。

（ええ、僕達は今から上に上がりますから地下をお願いします。）

（了解、しっかりな。キャラの事、ちゃんと守ってやるんだぞ。）

その言葉に、はい！！と元気の良い返事が返ってきて、念話は終了した。

（さつとと……どうすっかなあ……）

今の自分は手違いで新人って事になってるから事情を説明しても多分一蹴される。洗い物はまだまだあるし、先輩の眼が見張って居るから隠れて逃げ出すのも無理。となると、古典的ではあるがあの方法しか無さそうだ。

「ぐわあー！！痛たたた！！！！！」

「何だ、どうした!？」

「きゅ、急に腹が……」

「ンだよ、さっさと行ってきやがれ。」

「す、すいません…あ…何処にありましたっけ!？」

「その通路を曲がってまっ直ぐだ。さっさと行ってきな。」

それを聞いた瞬間、綬蛇矢は脱兎の如く駆け出す。

（クックック、あの手のタイプって案外察しがいんだよなあ。道が解らないような振りもしといたから、いざとなったら迷ったで誤魔化せるだろうし。全て計算通りだ！！）

正直、はたから見ると穴だらけの気もするが…とりあえず脱出成功。一路地下へ…

（しかし、さすがに「ぐわぁー」は無かったな）

.....

ホテル・アグスタ郊外

大量の虫のような機械に囲まれ、一人の少女がガジェットを次々と転送させている。

「…この位で…いいかな」

少女、ルーテシアは一通りガジェットを転送させ終わると、自身の召喚獣に思いを巡らせる。

「ん、どうした。」

長身で体格が良く、歴戦の猛者という表現がやたらしくりくる男、ゼストは、ルーテシアの異変に気付くと、預かっていたマントを返しながらそう問いかける。

「……ドクターの頼みだったから……行かせては見たんだけど……」

どうも嫌な予感がするのだ、と目で語るルーテシアに、ゼストは表情を崩さず、

「心配無い。アレは強い。」

と、簡潔に言っただけ。とはいえ、やはり不安なものは不安なのだ。

ルーテシアは祈るように目を閉じる。

「何もなければ良いのだけど……ガリユー……」

……

ホテル地下

黒服の一団が何者かと戦っている。魔力弾が飛び交うなか、黒服は一人、また一人と倒れていく。

「……………」

黒服と戦うもの、黒い鎧をまとった召喚獣、ガリユーは煩わしさを感じていた。

「……………」

向かって来なければ痛い目を見ずに済むというのに、さっきからコイツら意味が解らない。というか気合いが入っている。

黒服達は死に物狂いで向かってくる。口々に何か叫んでいるようだが良く聞き取れない。

「……………」

なんとか一人一人気絶させ、辺りを見渡してみるとようやく終わったようだ。

それにしても、コイツらは何だったのだろうか？窃盗団のようだがコチラと同じ物を狙っていた。

その瞬間、背中に悪寒が走る。

「……………!？」

咄嗟に飛び退いた後には無数の魔力弾が炸裂していた。後少し気付くのが遅ければ、自分はアレの餌食となっていただろう。

「!？オイオイ…それ避けれんのかよ…困ったなあ。」

放たれた場所からは一人の男が現れた。黒いバリアジャケットを纏い、何故か左手だけ袖捲りして、何とも言えない表情を浮かべながら六課の馬鹿は左手を突き出す。

「正直アンタが相手なら逃げ出したい所なんだが…そういう訳にもいなくなつてな。悪いけど、しばらくこっちに付き合ってもらわあ!…」

その言葉と共に、無数の魔力弾が発射されるのだった。

（フェイトすぐ来てくれ。多分もって2〜3分だな…）

（もう！！何で手を出したの！！）

走りながら念話で怒鳴るフェイト。かなり焦っているらしくセツトするのを忘れているようだ
着ているドレスがヒラヒラと危なっかしい。

「一応足止めのつもりだったんだが、まさか避けられるとはなあ。
とんでもないバケモノだよコイツ。」

綬蛇矢の緊張感の無い物言いは、念話の向こうからハッハッハ、と聞こえてくるようだ。もはや呆れて言葉を失ってしまう。

「まあ俺なりに足止めしてっからさっさと来てくれ。多分、次外したら五体バラバラにされるから。」

「はあ…解ったから目の前に集中して…死んじやったら許さないんだから…」

「俺がそう簡単に死ぬかよ……うおっ！！あぶねえ……じゃ、またな！」

そう言っただけで話を終える緩蛇矢。地下まで行くにはまだ2〜3分はかかる。

（ギリギリだな……はやて聞こえる？）

（ああ、聞いたよ……そう簡単に殺られる奴とちゃうけど、一応いつでも許可は出せるからな…そっちは頼むで、フェイトちゃん。）

（うん、任せて）

（…ってゆーか、バリアジャケット着いへんの？）

（……！？……っっ）

（ま…まあ焦らんな…）

はやてとの念話を終え、急いでバリアジャケットを着るフェイト。
気付くと地下に居た。

（…何かドジっばいなあ…）

なんて思いつつも急いで辺りを見渡す。といっても地下は広く、
近くにはいないようだ……

そこで、魔力反応をもとに探そうと思ったところであることに気が
付く。

（大きいのが一つ……その近くに六つ……）

動悸が速くなる。大きいのは一つだけ……そう一つだけなのだ。

フェイトは自身の持てる最高の速さで現場まで飛ぶ。他の六つの
ことなど気にも留められない。

そうしてたどり着いたフェイトが目にしたものは…

黒い鎧をまとった異形に胸を貫かれ、自分の血で紅く染まった
幼なじみだった。

第四話（後書き）

いやゝ何とか5日に一回更新出来てますが大分キツくなってきました（汗）

何か段々書くことが多くなったみたいで気付けば第一話の倍くらいなってる！？っていうように更にグダグダに…もっと精進しようと思います……

第五話（前書き）

第五話です。なんだかんだ大分時間が掛ってしまいましたm（
|）m
夢見すぎな展開ですがお付き合い頂けたら幸いです。

第五話

話しは少し遡る……

……

ホテル地下

「……………」

目の前の男に、ガリユーは疑問を感じていた。

さっきから魔力弾を連発しているが、その何れにも先程の殺気はなく、格闘戦を仕掛けても避けに徹している。

…典型的な時間稼ぎのはず…しかし、何故か違和感を感じる…

「オイオイどうした？バテてきたんじゃないのか？」

…この男の減らず口もそうだが、まったく勢いが落ちる気配がない。ほとんどずっと撃っているというのに息一つ切らさない、かなりタフな奴だ…

「……………」

ガリユーは動き回るのをやめてその場に留まり魔力弾をはじく。そして真っ直ぐに綬蛇矢ゆうだやを見据えた。

「仲間が来るまであと一分。それまで俺を殺せたらお前の勝ちだ。止まってる暇はないぞ？」

そう言いつつも綬蛇矢も手を止め、ガリユーを見返してくる。

…あからさまな挑発だ。しかし、もたもたしていれば仲間が来

てしまう。敵の真意は未だ読めないが、状況的にそうも言っていないが、
れなくなった…

「……………」

…気絶などと温いことは言わない。一撃で仕留める…!!

ガリユーは真正面から突進して敵を突き飛ばすと、そこを自身の持てる全ての力で貫く……!!

綬蛇矢は心臓を貫かれ、血ヘッドをぶち撒けると、「ぐほあっ…」
と残してなすすべもなく息絶えた……

…終わってみれば呆気ない。自分はいつたいコイツの何を気にしていたのだろうか…

…とんだ時間の無駄だったようだ……

ガリユーは、今しがた刺し殺した敵を投げ捨てると、新たにやってくる敵を見据える。

…今度の奴はとんでもないバケモノだ。先程のようにはいかな
いだろう…

そこには、怒りをあらわにした「金色の閃光」が立ちはだかっ
ていた……

……

「…私は管理局の魔導士、フェイト・T・ハラOWNです。貴方の目的は何ですか？」

丁寧な口調で質問するフェイトだが、その態度とは裏腹に険しい表情で、全身がワナワナと震えている。

凄まじい威圧感に圧倒されそうになるガリユー！。

……しかし……これは好機だ……

……抑えきれない怒りに身を焦がし、冷静さを失っている今ならば、何とか裏をかけるかもしれない……

「……言葉は通じているのかも知れないけれど……こうしたほうが

「早そうだね……」

フェイトはそう言い放つと、自身のデバイス「バルディッシュ」を構える。

… おそらく初手から全力で来るだろう… 勝負は一瞬… 相手の一撃を受け流し… 返す刀で奴を… 切る…!!

ガリユーも覚悟を決め、フェイトに対して全神経を集中させる。

ふと、彼の頭の中を何かがよぎった。それはほんの些細なこと。このような状況下では、とるに足らない些末な思考。ある種の違和感。

……またこれか……だが、そんなまやかに惑わされはしない……

ガリユーがそんな思考を振り払うのとほぼ同時に、フェイトが動いた！！

しかし、その行動はガリユーを大きく失望させる。

周囲から自分を捕捉するための魔力が集ってくる。

「バインドスペル」だ。

しかし、自分を完全に動けなくするためなのか、強力すぎて発動が遅いうえに容易に視認出来る。要するに見え見えなのだ。

……こういった魔法は本来相手の意識の外で使うもの……これならば先程の男の方がまだマシと言うものだ……

そしてガリユーは、隙だらけの敵を一蹴しようとして……

……出来なかった……

「……………!？」

……何故だ!？何故身体が動かない!？

気付けば、自分の身体はすでに鎖に捕われていた。

……いつの間に!？……目の前の女には、ずっと注意を払っていたはず……一体何処から!？……

「チェックメイトだな。」

突然の背後からの声に、ガリユーは己が耳を疑う。

……バカな！？確かに心臓を貫いたはず…生きていられるはずがない！？…

ガリユーは驚き振り替えると、そこには今しがた刺し殺した筈の男が立っている。

……わけがわからない…我は幻術をかけられていたのか…？

「表情はよくわかんねーが、何で生きてる！？って顔だな。」

そう言うつと綬蛇矢が勝ち誇った笑みを浮かべる。そのしたり顔はまさに外道。

自己再生…この男が許可なく使える唯一の特殊能力。たとえ致命傷をもらったとしても、ものの数分で再生してしまう。ただし魔力消費が激しく、魔力が尽きると使えなくなる。しかしこの男、かなりのタフネスなのでゴキ。リ並みにしぶとい。

「確かにお前は俺の心臓を潰した。でもな、そんなんじゃあ全然足りない…あの程度じゃあ俺は死なないんだよ！」

……くっ…なんという失態！！これではお嬢に顔向けできぬ……

綬蛇矢は狂ったように高笑い。馬鹿はもう完全に調子に乗ってしまっただけで、正常な精神を持つものでも皆、殺意を抱いてくれる程ムカつく面になっている…

「ふん…そうなんだ？…じゃあ…多少無茶しても…問題ないよね？」

その言葉が発せられた瞬間、途端に場の温度が一気に下がる。背筋が凍るとかそんな生易しいものではなかった。まさに絶対零度…

それは馬鹿の耳にもハッキリと届いたらしく、声のした方向へ恐る恐る振り向くと……

「この馬鹿っ！..」

「へぼっ！..?」

いきなり鉄拳が飛んできた……

「私があ（ごふっ）…どれだけえ（ぐえっ）…心配したとお（がはっ）…思ってるの！！（ふべばっ）」
喋りながら殴ってます

そして……いつしか彼女の目には涙が溢れていた……

「…もうあんなのは見たくないよ……」

フェイトが泣きながらすがってくる。普通ならここで野郎がビシッと決めるのだがこの馬鹿にそれを期待するのは酷というもの…

てみると、辺りに異様な気配が漂っていることに気付く。

最初はおそこの二人のなんとも微妙な空気だと思っていたが、二人も訝しげな表情を浮かべながら辺りを警戒しているのでどうやら違うらしい。

…この気配…いつたい何処から…？それにこれは…紛れもない敵意…いや！殺気だ…！！

ガリユーがその結論に至った瞬間、彼に無数の刃が襲いかかった

……

……

「うん…わかった…ありがとうな、シャマル。」

地上の報告を受け、ほっ、と胸を撫で下ろすはやて。召喚士の介入などイレギュラーはあったが事態は收拾がつきつつあった。

（なのはちゃん…？あっちの二人からは何か連絡あったか？）

（うん…犯人は捕まえたみたいなんだけど…ちょっと説教中みたい…）

（そうか…？…どうしたのん？何かあった？）

はやてからの念話を受けたなのは、素直に事態の收拾を喜んではいるが、その表情は何処か冴えない。

(…もしかして…ティアナの事ちゃうか?)

(うん……ミスしたこと…随分気にしてるみたいだね…)

なのはの声は暗い。それは普段の明るさからは想像しづらいもので、聞いているこっちまで暗くなってしまいそうだった。

(…そうかあ…まあ確かに…間違って味方撃つてもうた…では洒落にならんからなあ…)

(それにね…訓練の成果が目に見えて出ないから、イマイチ自分に自信が持ててないみたいで…)

彼女は更に落ち込んで行く。部下のミスを自分のミスのように思えることが彼女の美德であり欠点でもあった。

そんななのはを見て、はやては微妙に心配しつつも意地の悪い笑みを浮かべる。

(…なるほど…それで教官としても落ち込んだるいうわけやねえ。
こんな時まで大変やなあ。)

はやての含みのある言葉に今の状況を思い出したのか、顔を赤く
して更に小さくなるのは。

(面目ないです…任務中にすいません…)

そんななのははやては吹き出してしまい、ついで表情も柔らか
くなる。

(水くさいなあ…ウチラの前でくらいなら気にせんでエエのに…ま
あ、本人の前では教官らしくビシッとしたってな)

(あはは…了解しました部隊長殿……………あれ?……………どうした
のフェイトちゃん?)

なのはの声にも少しだが明るさが戻ったというところでどうやらフェイトからも念話が入ったようだ。

恐らく経過報告だろう。そう思っていたはやてだったがなのはの様子がおかしい事に気付く。先程から此方に聞こえてくる声には緊張感がひしひしと感じられたからだ。

（おかしい…あの二人の会話の甘ったるさときたらそらもう聞いてるこっちが恥ずかしくなってくるもんのはずや…それがこんな殺伐としたもんになってるっちゅーことは…）

（ウチか！？ウチがここに居るからか？……いや…ちやうな…いつもそんなお構い無しやし…となると…また馬鹿がなんかやらかしたかな？……一番ありそうなんやけど何かイマイチ感じがちやうなあ…となると後は…！？……ま…まさか…夫婦喧嘩か！？……あの二人も人間や…しかももう子供やない…男と女の関係なんて…いやこの場合はどうなるんやろ？…女と女？…そもそもこっちの法律はどうなっとるんやろ？……）

（はやてちゃん……たいへん……）

（二人とも……！一夜の間違いくらいでお互いを見失ったらあかんよ……！）

はやての妄想は止まるところを知らず、派手に加速して周りの空気をぶち壊したうえに場違いな方向に持って行ってしまっ……

（……え……何？……何の話？それよりも大変なの……！）

（もっとお互いよう話あ………どうしたんや！？いったい何が……？）

当然、理解不能なのはだったがその態度にはやてもようやく自

分の勘違いに気付いたようで強引に筋道を入れ替える。まさに力技！半ば逆ギレだが……

（地下で危険な未確認生物が複数現れたって…第一級警戒体制だよ！…幸い二人でもなんとかかなりそうだけど会場の方お願いって。）

（未確認生物……わかった…すぐ前線と本部に連絡や！…私がオーナードとこ行ってくるさかい。）

（うん、お願い！……ところでさっきの何？）

（…む…うぐっ…今はそんな場合やないってば…）

大マジで動いているのにイマイチ緊張感に欠ける二人だった…

「っ痛てえ……なんなんだこいつら？お前の仲間か？……なわけないよな……」

目の前に立つ異形。刺々しいラインや身長の三分の二程もありそうな腕。鬼のような顔と鋭い爪。そしてまるで全身に白い鎧を纏ったような骨格。白い悪魔と言う表現は実際はこういうヤツに似合いそうである。

ガリユーは今の状況に遂に混乱していた。

まずコイツラが黒服の中身だったと言うこと。人間にしてはおかしいとは思っていたがまさかこんな奴等だったとは…

次にいきなり服をぶち破って現れたコイツラは先程とは比べ物に

ならないほど危険だと言うこと。もはや化け物の本能全開のようで今も爪でやられそうになった。

そして一番わからない理由がこの男だった。

先程まで殺しあいをしていたと言うのに、たった今自分の身を呈して我を救ったのだ。確かにコイツの再生能力ならばあの程度なんということはないだろうが、我を助ける理由にはならない…何故…？

そんなガリユーの視線に気づいた綬蛇矢は、一度頭に手をやると誇らしげに言う。

「俺は気に入った奴は助けてやりたくなるんだよ。ましてや、力を出しきれねえで死なすなんてのはどうしても納得以下ねえ。やつぱどうせ死ぬなら笑って死にてえしな……あ痛っ!？」

「縁起でもないこと言っちゃダメだよ。」

一人でウンウン頷いてる馬鹿の頬をフェイトがつねる。

……だからなぜだ！……そんなもの理由にならないぞ……

軽い頭痛を覚えそうな程ガリユーは困惑してしまう。今まで永いこと生きてきたがこんな奴は初めてだ。しかもこの後、彼を更なる衝撃が襲った。

「それに1…2…6匹か…こんだけ居るなら人手も多い方がいいだろう。」

その言葉と共にガリユーのバインドが解かれる。もはやぼーぜんとするのみ。何度も言うが永いこと生きてきたがこんな奴は初めてだった。

「ち、ちよつと！？ダメだよ！ああもう！！」

フェイトにとつてもこれは予想外だったらしく、さすがに頭を抱えてしまう。

「はあ……今更だけど事態の重大さがわかってるの？彼（彼女）は事件の重要参考人なんだよ…敵に回っちゃったらスゴい使い手だし…」

「まあまあ。どうせ後から解放すんだし遅いか早いかの違いだってそれに手伝ってくんなくたって二人でもなんとかなるって。」

「……はあ…仕方ないなあ」

フェイトの不安を完璧に無視してあっけらかんと言つてのける綾蛇矢。彼女も諦めはついていたのか、溜め息をつきつつも合わせてくれる。

…コイツらの意図は未だに読めない。だがわかったことがある
…それは…

「……おっ！」

そうこうしているうちに異形の一人が二人に襲いかかってくる。
敵が迫りくる中、相手に対して身構えたところで異変に気付く。

敵が止まっているのだ。

「……………」

コイツはバカだが、我を助けてくれたということ。

そして借りというものは返さねばならんということだ……

二人に迫っていた異形は背後からガリユーに脳天を貫かれ絶命した。

そして漆黒の召喚獣は二人を守るように前線に立つ…

「手伝ってくれるの?」

「期待してもいいのかな?」

ガリユーもそれに答えるように振り向き頷く。

…頼もしい用心棒もついたり、一匹殺って動揺してる今がチャンスだな……一気に叩いちまおう。

「よし！じゃあ俺が牽制すつから止めは任すぞ。」

「了解！」 ……………

それと同時に綬蛇矢が魔力弾の掃射を始める。一つ一つは小さいがその数は膨大でさながら機関銃のようだ。

「ギシャアアア！？」

異形達は鎧のような甲殻のおかげでたいした被害はないが、視界が塞がれているうえに動けない。ましてや半ば混乱状態の彼らに連携などとれようはずもない。

「まず一匹!」

その一言と共に異形の首が宙を舞う。

フェイトのバルディッシュのサイズフォーム大鎌による斬撃魔法、ハーケンセイバーが叩き込まれたからだ。

「……………」

「ギョゲアアア!」

ガリユーも綬蛇矢の銃弾を掻い潜りつつ一匹仕留める。

「やるなあ二人とも……うおわっ!？」

そんな折、一匹が銃弾をもつとせす綬蛇矢に突っ込んでいき
そのまま体当たりを喰らわせる。

「ガハッ………ってーなオイ。」

派手に壁に叩きつけられ思わず咳き込む綬蛇矢。そこに更なる
敵の追撃が迫る。

「まったく…意外と速ええ…」

なんとかかわすも防戦一方。しかも自分の魔力弾だけでは致命的なダメージは難しい。

（さてどうしたもんか…他の二人は残りに向かってもらいたいからなあ…となると……）

「ギシエエエア！」

雄叫びをあげ、右手を振りかぶる異形。そこには渾身の力が込められている。

「やっぱ俺が殺んなきゃな！！」

その拳をなんとかやり過ぎ、逆に自分の右手をその口に突っ込んだ。

「緩蛇矢！」

「大丈夫だから余所見すんな…」

フェイトの動揺をなだめつつ腕は決して引き抜かない。異形も当然噛み千切ろうとするが…

「顎の力が足りねーよ」

体内で魔力弾を乱射され一気に爆発させられる。

「ああゝ痛てえ。まあ…残ってるだけマシだな…完治まで2ゝ3分
つてところか…」

引っこ抜いた彼の右手はグシャグシャに潰れたうえに所々千切れていて、人によっては吐き気すら覚えるほど凄まじいモノになっている。しかも、それがウニョウニョと蠢きながら再生していく様はトラウマものだ。

「…やっぱり無茶するんだから………」

馬鹿の無謀さを心配しつつも敵の攻撃はしっかりかわし、一撃を加えるフェイト。倒しきれなかったものの敵に怯えの様子が見て取れる。

これで残るは後二匹。一気に畳み掛けるために三人が踏み出そうとしたその瞬間、

「き、貴様らあ！何をしている！」

予想外の事態が起こった…

その場の視線が一斉に声の方向に向かう。

おそらく連絡が行き渡っていなかったのだろう、巡回していたと思われる警備員が、異形の背後から怯え混じりの怒声をあげる。
……そして更に…

「オ…オイ！？ちょっと待て！？早まるな！？」

「ば…化け物共め！このホテルで…か…勝手なこと出来ると…お…
思っなよお！こ…このホテルは！…俺が護るんだあああああ！！」

そうやって自分を鼓舞するように敵に突撃していく。

「ダメ！！すぐ逃げて！！」

フェイトの叫びも彼の耳には届かない。あまりの恐怖と持ち前の正義感とが暴走し、完全にイッてしまっている。

（最悪だ…正気じゃねえうえに射線上に居やがる…しかも敵の向こう側かよ！フェイトなら間に合うか！？）

フェイトに向けて叫ぼうとした瞬間、一匹がこちらに爪を飛ばして牽制し、そしてもう一匹が警備員に対して襲い掛かる！

「ゲヒヤアアア！」

「うおおおおっ……！？……ゴフッ……」

飛んできた爪はなんなく回避出来たが、その間に警備員は爪で腹を貫かれてしまった。

「野郎!!」

綬蛇矢が助けようと飛び出すが、異形は宙にぶら下げられていた警備員を一度反動をつけるように振りかぶり、そして次の瞬間……

「何イ!?!」

彼らに向けて投げつける!!

三人を巻き込むように飛んできた警備員を避ける訳にもいかず、受け止める綬蛇矢達。

そうしている間に敵は逃げて行く。

「逃がさない!!」

すぐに追跡しようとするフェイトだが、その背中を綬蛇矢が呼び止める。

「待てフェイト!!お前はこいつを見てやってくれ。まだ微かだが息がある!!」

見ると、先程の警備員が奇跡的にも生きていた。しかし、すぐに治療を受けなければその命は瞬く間に消えてしまうことになる。この中で僅かではあるが治癒魔法を使えるのはフェイトだけだった。

「わかった、何とか応急手当てしてみる。二人はアイツらを追って！」

フェイトが引き受けるとすぐに二人とも走り出す。

が、綬蛇矢は急に振り返らないまま、

「すまねえ……でも頼む……なんかそいつのせいで逃がしちゃったけどさ……どうみても無謀だったのにさ……何か……何かカッコよかったんだよ……コイツ……だから……頼む……」

と震える声で告げる。その声音だけで今の綬蛇矢の表情が読めてしまったフェイトは、呆れはしたものの一度目を閉じると、

「出来る限りのことはやってみる…だから後を頼むね…」

と笑顔を返し、そこで二人は別れる。

「…もう…ほんとに泣き虫なんだから…」

彼女の呟きを残して……

第五話（後書き）

駄文にお付き合い頂き有難うございました。ひっぱるなあアグスタ（汗）

今回の内容で、ガリユーをいずれ逃がすといった内容がありました。たが、召喚獣って呼んだ本人次第でいつでも帰らせられるんじゃない？という作者の見方からの判断ですので間違ってたらすいません。ちなみに彼らの頭の中ではガリユーを殺すっていう選択肢もアリエマセンでした（笑）

それと、フェイトが治癒魔法使えるってのも第一話でなのはが使用ってたってだけでたぶん使えるんだろぅなあと思っただけっすm（――）m

最後に、全然関係ない話ですが新型インフルにはお気を付けを。作者は死にかけました（爆）

第六話（前書き）

第六話です。今回はホテル編のラストになります。

第六話

…ホテル内VIPルーム

「……ん？……これは……」

「どうかしたのかい？」

白いスーツに緑の長髪の男、ヴェロッサ・アコースは自分の向かい側の男に尋ねる。

男、ゼオン・グランガイツは、薄い金髪に長身、スーツ姿で穏やかな表情を浮かべている。

彼は少し考えるような素振りをした後に、はにかんだような顔をすると人差し指で頬を掻いて話し出した。

「いえ…少し友人の魔力の気配がしたものですから……………ここ警備は六課が来ているんでしたっけ？」

「そうですね……………気配でわかるんですか！？……………うーん、なのはやフェイトが来ているらしいけど、そういった気配は僕には何も感じられないなあ……………」

ゼオンの隣側でソファアに腰掛けている男、ユーノ・スクライアは苦笑いを浮かべると、ゼオンも少し照れたような表情になり疑問に答えるための言葉を探していた。

「うーん……………彼との付き合いは先生の方が長いはずなんですけどね。まあ俺とアイツとはちょっとした共通点みたいなものがあるからそのせいだと思いますよ。気持ち悪いことですが……………」

やっと見つかった答えにも納得はいつていないようでその表情は
なんとも微妙だ。

「共通点?……って、え!?!…彼ってことは綬蛇矢も来てるの? 珍しいなあ…というか何のために来たんだろ?」

ユーノの何気にヒドイ物言いも、事実だからしょうがないと納得せざるを得ない。彼の本業は何と言っても食堂長なのだから……

「確かにアイツは出不精ですが、実力は確かですよ…まあどうせ、はやてちゃんが丸め込んで連れ出したんでしょうけどね。」

「くくく…ククク…ハハハ…ハアッハハッハッハッハア…
…」

その一言で、抵抗虚しく引き摺られていく馬鹿を想像したようで、三人共顔を見合わせると激しく笑いだした。どうもかなりツボだったらしい。

というか笑いにされる哀れな主人公って一体……

「ハアハハハハッ……ンッ！……ところで、その魔力がどの辺りから発せられたかわかるかい？」

「多分地下からですけど、何か気になることでも？」

ヴェロツサはしばし考えるような素振りを見せると、急に真面目な表情になり口を開いた。

「実は僕の他にもう一人査察官が来ていて、地下の方を見てもらっていたんだけど……さっきから連絡がなくてね……」

「それが何か関係がある？…確かに綬蛇矢が魔力を使ったとなると、何かあったのかもしれませんが……」

彼が魔力を使うということは十中八九戦闘だからだ……ユーノも少し不安げな顔を見せる。

「……少し様子を見てきて構いませんか？外の戦闘は大分落ち着きましたから、警戒を緩めても大丈夫そうですし……」

「そうかい？わざわざ警護である君が行かなくとも、僕の獵犬に行かせれば済むことなんだが……」

ヴェロツサの能力、「無限の獵犬」ウンエントリヒ・ヤークトは古代ベルカから伝わるレア

スキルで、自身の魔力を使って産み出した獵犬に探查させられるという、まさに今の状況にうってつけの能力なのだが、ゼオンは首を横に振る。

「いえ…少し嫌な予感…というかある意味一種の期待感…というか…まあそんなものを感じるんですよ。騎士の直感…ってやつですかね。すいません…少しワガママを言わせて下さい。」

その時のゼオンの表情は緊張しているようで…何処か楽しそうで…いたずらをする前の子供のようだった。

「わかった、君達の邪魔になるのは御免だからねえ…先生も構いませんね？」

「フフツ…自分の身を守る位は心配要らないと最初から言ってるじゃないですか。ここは大丈夫ですから行ってきてください。」

「では行ってきますが、万が一にはすぐに駆けつけますのでご安心を。」

「そうならないように願うよ。多分このホテルの壁ごと切り刻んで向かってくるだろうからね…」

ヴェロッサの冗談に笑みを返すと彼は部屋を出るのだった…

「それにしても……どこ行ったのかなあ……ベンジャミンは……
彼は変なポリシー持ってるからなあ……」

……

「この先は……ホテルの裏の方か……」

怪物達の後を追ってきた綾蛇矢とガリユーは、長い登り坂の前で立ち止まっていた。

このホテルは地下に駐車場があり、それは裏からでも表からでも入ることができるのだが、怪物達は裏から出たようだ。

… 幸い前線は表側… フォワード陣に無用な苦労はかけずに済みそうだな…

綾蛇矢がホッと胸を撫で下ろしたのも束の間、はやてが慌ただしい様子で念話を送ってきた。

（ゆー君？聞こえるか？ゆー君！）

（聞こえてるから怒鳴らないでくれ……それでどうした？）

（怪物達は裏の方に逃げたんやな？現在の位置は掴めてる？）

（ん？ああそうだよ。今の所ヤツらは裏の玄関のあたりだが……何かあったのか？）

（……ヤバいな……今スバルから連絡がきたんやけど……ティアナが一人でそこに居るんやー！！）

（……何だと！？どういうことだ？）

（あの娘… ちょっとミスってもうてな…… 前線からも下がられて
…… 一人になりたかったんやと思うんやけど……）

（念話は？ 状況は伝わってるのか！？）

（それが… 通信もカットしてるみたいなんや……）

（クソっ！！）

…… はやての慌てようから嫌な予感はしてたが…… 最悪だ…… テ

イアナ一人じゃあの鎧は無理だ！！

しかも、事態は更に悪い方へと向かっていく……

綬蛇矢が駆け出そうとした瞬間、近くに破壊音が響く。既に始まっているのだ……

「（はやてっ！！）」

走りながら綬蛇矢は叫ぶ。自然と口からも発せられた彼の言葉は、決意となっではやてに届いた……

……許可をくれ……と……俺が助ける……と……

「……ごめんな……あの娘のこと……助けたってや……」

彼の決意がどんな意味を持つか知るはやては、表情を曇らせながらも覚悟を決め、彼に「許可」をだす。

「その為の保険だろ？大丈夫だよ……何があっても必ず助けるから……」

その言葉を言った瞬間、綬蛇矢の右手側に穴が空いたかと思うと、彼は手をつ突っ込んで「何か」を引きずり出す。

それは彼の背丈程もあろうかという「大鎌」だった。

しかしその様相には全く遊びがなく、バルディッシュの様に機械的なものでもなければ、何で出来ているのかも見当がつかない。

ただその全身は血に染まったように紅く染まっていた……

「……………」

声にこそ出さないが、ガリユーもその異様さを感じ取っていた。

……アレは何だ？武器というものは例外なき限り魔力は持たぬものだが……それにこの気配は………

「ワリイけどここからはちょっと離れてた方が良いぞ。巻き添え喰らうから……」

その言葉と同時に彼の「左手」もどんどん変化していく。その姿は人のそれではなく奴らと同じ「異形」のそれだった……

.....

「グオオオオオオツ!!」

「まったく…なんなのよ……こいつ……」

ティアナは目の前の光景が信じられなかった。

ついさっきまで戦闘機械と戦っていたと思えば、今度は化け物だ。しかも、いきなり襲いかかってきた上に奴らの白い鎧殻にはこちらの攻撃がまったく通用しない。

…カートリッジも残り少ない…私だけじゃどうにもならない…

…助けを呼ばないと…

その考えが頭に浮かんだ瞬間、ティアナは大きく首を振る。そして敵を真正面から見据えた…

…ミスして勝手な行動とつた挙げ句に助けてください…？そんなこと言えるわけじゃない…私は…私はっ…！！

彼女は追い詰められていた…体力的にも…状況的にも…精神的にも…自分の信念からさえも…

ティアナは自分のデバイス「クロスミラージュ」を構え、大きく深呼吸すると残り全てのカートリッジをロードした。

「こんな所じゃ終われないんだからっ！！」

そしてティアナは、一気にチャージすると怪物の顔面目掛けて
……撃つ！

「……………」

弾は正確に怪物の顔面に当たり、ボンッ！！という音と共に頭
ごと吹き飛ばした。

「ハアッ…ハアッ…ハア…ハッ……どうよ…ハアッ…見たか化け物
…ハア…」

明らかに限界を越えた一発にティアナは大きく肩で息をすると
そのまま座り込んでしまう。

しかし、その顔にはやり遂げたものの晴れやかさがあつた…

普通では勝てない相手を倒した喜びがあつた……

彼女は、全魔力を注ぎ込んで目の前の敵を打ち破つたのだ……

もう一匹敵がいるとも知らずに…

「ハッ!？」

気づいた時には既に手遅れだった…目の前の異形に、彼女の顔が絶望に染まる……

「ギヒヤアアアッ!!」

異形の爪が迫ってくるが、ティアナにはどうすることも出来ない。避けようにも体は動かず、シールドを張ろうにも魔力は空だ。

…死にたくない……

時間にしていくらも経たないであろうこの光景も、彼女の目にはスローで写し出されている。

…こんなところでなんて死にたくない…

徐々に迫ってくる爪に対しての対処法を必死に探す。

私にはまだやらなきゃいけないことがある……皆にまだ私の力を認めてもらってない……スバルに泣かれるなんて御免だし……兄さんの夢を叶えてもいない……お願い……私はまだ……

「死にたくない!!」

彼女は叫んだ……どんなに絶望しても、彼女は生きることが諦めなかった……

「死なせやしねえよ……」

その言葉と共に怪物の腕が消し飛ぶ……

それはまるで最初から存在しなかったかのように、彼女の目の前で黒い炎に包まれたかと思うと一瞬にして燃え尽きたのだ。

何が起こったのか彼女には理解出来なかったが、いつの間にか隣には気配があつた。

「ふう…間一髪だが間に合ったみてーだな…怪我はないか？」

横を見ると黒い外套に身を包んだ赤い髪の方が、ニンマリと笑っていた。

「しょ…食堂…長？」

「まったく心配かけやがって…念話位出るっての…」

…私は助かったの…？

ティアナは文字通り九死に一生を得た…というのに少しも安心出来なかった。むしろ寒くもないのにガタガタと震えだし、身体中を冷や汗が流れていく。

「まったく…無茶はいいが程々に…って聞いてんのかよ？」

その瞬間に彼の左腕が視界に入った…

「ヒイツ!？」

その左手は灰色で丸みをおびた形状だが爪は鋭く大型のナイフのようであり、手の甲には人の顔…髑髏が浮かんでいる。

「そ…それは…?」

震えながらもティアナが訪ねようとすると、不意に髑髏と目が合う。

その瞬間に頭の中で叫び声があがった…

倒れそうになったティアナを支え、近くの木により寄り掛からせる緩蛇矢だったが、その表情は重い。

…こうなることはわかっていたのに…やっぱりキツイもんだな……

そうやって沈んでいる彼の耳に、何やら騒がしい音が入ってきた。

「……そっついや忘れてたな……」

音の方向を見ると化け物とガリユーが戦っている。緩蛇矢は二人のことを完全に忘れていたようでガリユーの視線が痛い……

「あゝワリイワリイ…こっからはちゃんと俺がやるから……せつかく許可ももらったし…アンタもちよっと気になってるだろ？」

その言葉に、待っていましたと言わんばかりにガリユーが距離を空けて戻ってくる。

…そりゃそうだろうな…じやなきや今もコイツが生きてる訳ねーよ…

緩蛇矢は口元に笑みを浮かべると異形に対して手招きする。まるで「お前の相手はこっちだ」とでも言うかのように…

「ギャオアオオオオオオッ!!」

化け物も逆上したのか、それとも片腕の怨みからか、雄叫びをあげて突っ込んでくる。

綬蛇矢はその有り様にますます笑みを強めると、左手を前に突きだす。するとそこに魔力が集中していき禍々しい黒い炎が巻き起こると、球体となって圧縮されていく……

「……………!？」

ガリユーはその光景を静観していたが彼に対して驚きを隠せない。何故ならば、永い時を生きてきた自分ですら、こんな魔法は見たことが無かったからだ。

…そもそも魔力そのものが違っていたのだ…許可を得たその時からコイツの魔力はまったく別のものになっていた…恐らく…この世界の何処を探してもこんな魔力を持った奴は存在しない…!!

「我が手に集え魔界の黒楼…抗うものを焼き尽くせ…」

…そもそも…これは魔力なのか…!!

「ギャオアオオオ!!!!」

「喰らいな…魔召・煉獄!!」

その声と共に左手の炎が解放され、異形の巨体と森を直線状に
呑み込んでいった…

「……………」

後に残ったものは何もない…森も…異形も…放たれた炎すらも…

…

.....

「.....」

「ヤベえ……やり過ぎたな……まあ非常時だったということにしよう……」

馬鹿がブツブツ言っているのに対して、ガリユーは本気で警戒していた。

……威力もさることながら……他の部分がまったく燃えていない……触れたものだけ燃やしたのか？……いずれにせよこの男は危険すぎる……たとえばこの身が朽ちることになっても……敵ならば消さねばならな

い……

ガリユーは構え…そして狙いを定める…

…今なら完全に油断している…手足を切り離されれば身動きはとれまい…

そうして襲いかかろうとしたその瞬間、彼の脳裏にある光景が甦る……

それは彼が、自分を助けた光景…

…姿や魔力が変わったとしても、この男はこの男のままなのだな…

そしてガリユーは、刃を納めた…

……ガリユー？……どうかしたの？……随分遅いけど……
何かあった？……変な魔力も感じるし……

どうやらお嬢にも大分心配をかけたようで、念話まで寄越されてしまった……

「ホレッ……」

ガリユーがそんなことを思っていると、綬蛇矢が何か投げて寄越した。

…これは…

それは今回の自分のターゲットだったものだった…

「持つてきな。持つてかないと主^{マスター}に怒られんだろ？」

…この男は最初からこうするつもりだったのか？自分の立場すら危うくなるかもしれんのに…

ガリユーの考えをよそに、綬蛇矢は指を突きつけて言い放った。

「べ、別に、アンタの為じゃないんだからね…お、重かっただけ…
…無理があるか…かさばるだけ…おかしいな…邪魔になった…うん
…邪魔になっただけなんだから…！」

言った瞬間に冷たい風が吹いていく…野郎のツンデレほどぐで
もいいものはないな…

「あゝゴホン…頼むから持っけてくれよ。持っけて帰ったところで俺が怒られるだけだから。」

……やはりこの男はよくわからん……わからんが…また借りが出来てしまったな…

……ガリユー？どうしたの？……

……すいませんお嬢…今すぐ戻ります…

ルーテシアの念話に返事をする、ガリユーは綬蛇矢に深く一礼し、風のように去っていった…

「さってとはやてに報告して帰るとするかね……」

「相変わらず甘いなあ、オマエは…」

「なっ!？」

はやてに連絡しようとした矢先、異様な殺気が綬蛇矢を襲う。
それはあてられたもの全てに死を受け入れさせてしまうほど強く冷たい…

「この殺気は……!？それにさっきの声……!？チイツ!？」

警戒した瞬間、彼の元に衝撃波が飛んでくる。何とかシールドと回避でやり過ごしたがその間に敵に間合いを詰められ、喉元に黒い二本の剣を突きつけられた…

「まあこんなことしてもオマエには無駄なんだけどね…どうしたんだい？大分反応が悪いけど？」

声の主を見て綬蛇矢は目を丸くすると、大きく溜め息をついて呆れてしまう…

「オマエは久し振りに会った友人にいきなり斬りかかるのかよ………
っていうか何でここにいるんだ、ゼオン？」

「いやゝヴェロツサに警護を頼まれてね。おかげで久し振りに楽な任務だよ。」

綬蛇矢に剣を突きつけている男、ゼオン・グランガイツは双剣をさげると笑顔で言い放つ。その満面の笑みは、先程の殺気を放っていた人物だとは微塵も感じさせない程晴れやかだ。

「まったく、本当に死ぬかと思ったじゃねえか！只でさえお前に斬られると再生が遅いの…」

「いや、アレはお前が悪いよ。あんなもん見せられたら誰だってイラッとするし。」

「…アレ見てたのかよ…」

さっきのツンデレを見られていたことに激しく落ち込む綾蛇矢。その目には涙が溜まっていた…

「あれ？そっぴやもう一人見てたみたいなんだけど、もうどっか行ってみたんだな。それより連絡しなくていいの？」

「一回やってみたかったんだよ……ってああ、そうそう連絡連絡…」

…って他に誰か居たのか？ってか、いつから見えた！？」

「え？最初からだよ。いやゝティアナちゃん危なかったねゝ何かあの一撃は覚悟決めて打った！って感じだったし……っていふあいふあい！」

「目の前で女の子が困ってんだからさっさと助けてやれよ！？こんな薄情な騎士見たことねえぞ…」

ゼオンの頬をつねりながら綬蛇矢は怒りを露にするが、次の言葉聞いた瞬間に閉口してしまった。

「だって…この娘はあの人の妹だから…お前が来ないはず無いと思ってたよ…まあもちろん…こなかつときの為にこれ呼び出しておいたんだけどね…」

そう言つとゼオンの目の前に次元の裂け目が現れ、双剣は呑み込まれていく。綬蛇矢もなんだかドツと疲れたらしく、鎌をしまつと溜め息をつくが、不意に意地の悪い笑みを浮かべると唐突に口を開いた。

「ケツ…なんでもわかつてるって口ぶりだな、気持ち悪いんだよ…この「死兆星」」

ピキッ…

ゼオンのこめかみに青筋が走る。彼のひきつった笑顔は見るものを凍らせる迫力があつた…

「ハハッ…そりゃあわかるさ……だつて俺達…殺しあつた仲じゃないか？なあ「魔王」」

ギョイン！

今度は綬蛇矢の眉がつり上がる。それなのに口許は笑ったままなのでかなり不気味だ…

どうやら彼らにとっての禁句らしい……

「いい機会だ…ここらで決着つけとくか！！」

「上等だ！！粉微塵にしてやるよ！！！」

そうして同時に二人で構えるがお互い武器が無い…二人ともつくってしまった…

「…相変わらずだな…オマエは…」

そして顔を見合わせると、二人とも子供のように無邪気に笑い出すのだった…

………

「はい…ええ奴らです…ええ…わかりました…」

二人が去った後、ある人物がこの場に訪れていた…

男は念話を終えると、鰐蛇矢が燃やした木々のそばまでいって手をかざす。するとどうだろう…その木が急に成長をはじめ、一分も経たないうちに元に戻っていた！

「やれやれ…森は大切にしないとな…それにしても…あの力は何だ

…どの魔法系統にも属さない…古代ベルカのものとも違う…あれは
いったい…」

そこで男の思考は中断させられる…どうやら通信が入ったよう
だ…

「はい…はい…すいませんでした…すぐ戻ります…はい」

「…どうやら洗いものが溜まっているらしいな…」

彼のポリシーは自然を愛すること、仕事は完璧にこなすこと。
たとえ臨時の雇われシェフでもそれは変わらない…

坊主頭の査察官、ベンジャミン・D・ヤクマルは、己のそのは
ち切れんばかりの肉体を駆使し、闇夜を駆け抜けていった……

第六話（後書き）

駄文失礼しましたm（――）mいや、やっと終わりましたホテル編（まあまだ後始末はあるんですが……）今回は二人のオリキャラが出ましたが、ぶっちゃけた話、ゼオンの方はほぼグロー5の主人公です。なんであんな原作レイプキャラになったかという、それは作者のエゴ以外の何者でもありませんのでグローファンの方には頭が下がる一方ですm（――）mただ、彼は話の中心近くにいくことは確かです。次にヤクマルさんですが、彼はマジで最初から、あの設定と登場の仕方でした。モチーフはジャ。ーさんに出てきたヤク。さんです（名前はまんまですね（笑））今回やっと、スベクトラルっぽいのが出てきました。しかし解りづらい…（というかこの小説自体が力オス…）あれが今の作者の精一杯ですm（――）m

第七話（前書き）

第七話です。今回は白い異形の正体と前回の補足になっています。

第七話

「ここは……？」

ティアナは辺りを見回すが、暗闇に包まれた世界にいる自分の目には何も映らない。そもそも本当に見えるかどうかすら怪しかった。

「なんで私はこんな所に……」

「……ティアナ……」

いまだ混乱したままのティアナに声がかかった。誰も居ない筈の背後からの声なのだが、ティアナは恐怖と共に奇妙な懐かしさを覚えた。

…この声は…

「……どうしたんだティアナ？……こっちを向いてくれよ……」

……この声……この喋り方……忘れられる筈もない……

「……ハハッ……しばらく見ない内に大きくなって……反抗期ってやつなのかな……」

…間違いない……この声は兄さんだ……

ティアナには確信があった……しかし、振り返ることは出来なかった……

なぜならば……彼はもう死んでいるのだから……

「……あんだ……誰？……一体何のつもり？」

「オイオイ……いくらなんでもそれはないだろ……さすがにちょっと悲しくなってきたよ……」

「黙って！……兄さんに化けて何を企んでるの！？」

「？……本当にどうしたんだティアナ？化けるってなnn……」

「五月蠅い！！」

そう言つてティアナは走り出す。後ろで何か叫んでいたようだが今の彼女には理解する余裕などない…

…兄さんは死んだの！！あれは幻！私を惑わせる幻想！私は…私は…私は何も知らない…！

そしてティアナは、只々必死に、兄の幻想から逃げ続けるのだつた…

………

ホテル・客室

「……イア………ティアー!!」

…誰かが私を呼んでる………何か頭痛い…

「……ん………うん………あれ？私………つてうわぁ!!」

「あうちっ!?!」

ティアナは目を醒ますと目の前にいきなりスバルの顔があった
もので驚き、飛び起きようとしたのだが、頭を跳ね上げた瞬間にち
ようどスバルに頭突きをかましてしまう。

「…痛いよティア」

「痛っ…いやアンタ近いつて…」

お互いに顔を擦るが、スバルの顔をよく見ると目が充血していた。それも今しがたのモノではなさそうだ…状況はよくわからないが、大分心配させてしまったらしい。

「もう大丈夫なの？」

「…ええ…悪いわね…何か…心配かけたみたいじゃない…」

その言葉にスバルはちょっと焦ったような顔を見ると、照れ隠しのように矢継ぎ早に捲し立て始める。

「あ……いや……ほらその……なんてゆーか……心配はしたけど……
そ……それはそうと！スゴいじゃんティア！あんな化け物やつつけ
やうなんて！」

「……化け物？」

その言葉でティアナは今の自分の状況を理解する。それと同時に
今まで忘れていたあの時の記憶が戻ってきた。

「しょ……食堂長は！？あの人は何処！？」

「お……落ち着いてティア……急にどうしたの？確かに、倒れたティア
を食堂長が運んでくれてたけど……」

いきなりの豹変ぶりについていけないスバルだが、そんなこと

お構い無しにティアナは続ける。

「もう一匹はどうなったの？それに食堂長のあの姿は……そうだ！
アンタ…食堂長の左腕見た！？」

自分が意識を失う原因となったあの左腕…そこから感じられた
常軌を逸した殺意…彼女も見ているならば何か解るかもしれない…

そう考えたティアナだったが、

「左腕がどうかしたの？」

スバルの反応を見るに何も見てはいないようだ…仮に嘘をついているとしても、彼女の下手な嘘を見抜けない自分ではない。

「はぁ……いや見てないんじゃないのよ……そうよね……あんなゴツイの見たら何かリアクションあるわよね……」

ティアナはスバルの答えに気を落しながらも、彼女が無事だったことにホッとしたのか軽い溜め息を吐く。

「ゴツイっていえばカッコ良かったよね食堂長のデバイス！確かゴツドハンドクラッシャー……！……だっけ？よくわかんないけど強そうだったし……あれ！？そーいえばあれも左……」

「アンタしっかり見てんじゃないのー！」

そう言った瞬間、スバルの頬を真っ赤になったティアナが引張る。いい感じに伸びているのでかなり痛そうだ……

「どんだけボケボケなのよアンタは！！しかも何よそのふざけた名前は！？…何処の巨神兵よ……っていうかアンタ無事だったの！？」

「いひやいいひやいふあはひへふいあゝ」
痛い痛い離してティアゝ

かたや興奮から、かたや恐怖から、お互いハアハアと肩で息をつく。その様はまるでケダモノのようだ…

「食堂長が自分で言ってたんだよゝ。これが俺のデバイス！ゴッドハンドクラッシャーだ！！…って。それより無事ってどゆこと？」

「え……だってアンタ…あの声は……聞こえなかったの？」

「声？何のこと？さっきからどしたの？変だよティア？」

……あれがデバイス……？そんな訳無いじゃない！？……あの時の声は一体何なの？……何でスバルには聞こえなかったのかしら……？それに……

「敵は私が倒したヤツ以外にもう一匹いた筈なんだけど、それは食堂長が？」

「え！？そうなの？そんなこと言ってなかったなあ……それに死体は一体しか無かったよ。」

自分の武器は見せても戦ったということは教えていない……むしろ隠してる！？……これってどういう事なの？……意味がわからない……い……

ティアナは頭を抱えてしまった。彼には意味不明な行動と矛盾があるからだ…何故か自分を助けた時の事だけ隠そうとしている…

「ねえティア…何かまだ疲れてるみたいだし、もう少し休んだ方が良くない？まだ事後処理とか残ってるしさ。」

スバルの気遣いにティアナは薄く微笑むが、立ち上がり身だしなみを整え始める。その目には疑念と焦燥が浮かんでいた…

「ありがたいけど、ミスした挙げ句にこれ以上サボってらんないわよ。それに現場も見たいし。」

…あの人が何を隠そうとしているのかわからないけど…今は自分の事を考えないと…でないと私…馬鹿みたいじゃない…

自分の不甲斐なさを噛みしめ、部屋を出ていくティアナ。その背中をスバルは不安げな眼差しで見送るのだった……

.....

ホテル・外側

「どうしたのフェイトちゃん？何か浮かない顔だね？考え事？」

「えーう、ううん！なんでもない、なんでもないよなのは。それより、ティアナとユーノの事はもういいの？」

「え？うん、ティアナには軽く注意しといたけど……」

なのはが声をかけると、ハツとしたようにフェイトは振り向いた。何やら考え事をしていたらしく、かなり焦っていて、しどろもどろになっている。その様を見て生来のSであるなのは、いたずらな笑みを浮かべた。

「何？何？フェイトちゃん…私という者がありながら心此処にあらずじゃない…さては誰か別の女が居るのね！？」

「……ゴメンなのは……幾ら何でもちよつと痛いよ…それ…」

「えっ！！」

ガガンという効果音と共になのはが崩れる。

……いつものフェイトちゃんなら頼を染めながら「もう、そんな訳無いじゃない。私はなのは一筋だよ（誇張表現有り）」とか言ってくれるはずなのに……気分最低でもフォローの一つは入れてくれる筈……これは本当に誰か別の人を……

親友の成長に逆に戸惑うのはだったが、当の本人の悩みは全く別のものだった。

「ねえなのは……どんなに残虐な生き物でも……殺すのはやっぱり……キツイね」

その一言で、場の空気が一気に下がる。フェイトは先ほどの異形のことを考えていたのだ。

……ああそうか……

フェイトはやさしい心の持ち主だ。幾ら人を襲うからといって、生き物を殺して平気な顔をしていられるような娘じゃない。だが……

「確かにそうだね……でも誰かがやらなくちゃならなかった。私達の仕事は護ることだから……」

そう、彼女達の使命は人々を護ること……危険を取り払うことなのだから……

「それに、フェイトちゃんはしっかり護ったよ。あの警備員さん、一命を取り留めたって。」

「本当!?!」

その報せに、彼女の顔にも笑顔が戻る。それは、なのはが一番好きな顔だった。

「うん！意識も取り戻したらいいから、後で会いに行つてあげるといいよ。」

「そうと決まれば、さっさと仕事片付けないとね。現場検証、手伝つてくれる？」

先ほどまでの様相が嘘のように、フェイトの笑顔は明るい。しかし、彼女の調子も戻った所と同時に、こちらも調子を取り戻したらしい……

「うっんどっしよっかな、さっき振られちゃったしな」

などと言い出し、どうしてもフェイトの気を引きたいようだ。

「あ、あれはその…ほら…なんて言うんだっけ…ツンデレ？」

「全っ然違っよ。ってかデレて無いでしょ！ほら！デレてよ」

「えっっっっ！？」

結局、大幅に仕事は長引くのだった……

.....

ホテル・VIPルーム

...コン...コン...

「どうぞ。鍵は開いてますから...」

「失礼します。」

「よう！久しぶりだなカモ君！元気だったか？」

「ぶっ！？」

ユーノが何やら調べている所に綬蛇矢とゼオンが入ってきたのだが、綬蛇矢の一言にちょうど口をつけていた紅茶を吹き出してしま
う。

「僕をあんなオコジヨと一緒にするな！！」

「ぶっ…同じ淫獣のくせに……」

「！？ああもう！！自分だって涙脆いくせに……」

「ハッハッハ、何とでも言いな。冗談はさておき…あの化物について何かわかったか？」

急に真面目な顔になったもので、いささかユーノも戸惑うが、ゴホンと一つ咳払いをすると語り始める。

「…僕の調べによると奴らは（ユング）っていう名前で、古代ベルカ時代の化け物（ゲヴェル）の手下だ。」

「ゲヴェル？何だそいつは」

聞いたことの無い名に綬蛇矢は顔をしかめるが、ゼオンには思い当たる節があったらしい。古い記憶を思い出すように軽くなる。

「うーん……確か、魔法が使えなかった人達が産み出した生物兵器で長いこと封印されてただけど、15年位前に復活したとかリシャール様が言ってたような……でも、確か退治された筈ですよ？今度は完全に滅んだと聞きましたけど……」

「そう、当時のインペリアルナイツと救世の騎士、その妹とで倒したとあったけど……」

「ち、ちょっと待ってくれ！」

そこで今まで黙っていた綬蛇矢が口を挟む。その顔には軽い困惑が浮かんでいた。

「色々とわからない事だらけなんでもうちよつと砕いて説明してくれ……インペリアルナイツとかリシャール様とかさっぱりわからん。」

その発言に今度は二人が呆れだした。二人の綬蛇矢を見る目が微妙に冷たい。

「いくら君でもそこまで疎いとは思わなかったよ……いいかい？インペリアルナイトってのはインペリアルナイトという特別な称号を受けた騎士達で構成された騎士団で、一人一人が一騎当千の実力の持ち主なうえに品格や礼節まで兼ね添えなければならぬ為に騎士の最高位とも言われてるんだよ。そしてリシャール様はその団長、ナイツマスターって訳だね。」

「もちろん、そんな人達がゴロゴロと居る訳ないから当時もリシャール様を筆頭に、アーネスト・ライエル卿、オスカー・リーヴス卿、ジュリア・ダグラス卿の4人だけだったみたいだな。ちなみにライエル卿は俺の師匠で命の恩人だ。」

「お前の師匠って…どんな化物集団だよそれ……ところで救世の騎士ってのは？」

二人の説明に軽く引いてしまふ綬蛇矢だったが、今度の質問には二人も何やら難色を示してしまう。

「うーん、名前がカーマイン・フォルスマイヤーってことしか書いてなくって、それ以外の記録が残ってないんだ……」

「なんだそりゃ？ 英雄みたいなもんなんじゃないのか？」

「その筈なんだけどね……妹に関しては何も残ってないし……これ以上は無限書庫に帰らないと無理だね。」

無限書庫……この世界の知識が集う場所。ユーノはその司書を勤める。

「リシャル様も、あの時は口が滑ったみたいなこと言ってたから、もしかすると、当人達には何かあるのかもしれないね…」

「まあ、とりあえずはやて達に報せないとな。助かったよユーノ。」

綬蛇矢の感謝の言葉にユーノも軽く頷くが、急に心配したような顔になって口を開く。

「……綬蛇矢… 力を使っ たみたいけど… 身体の方は何ともないのかい？」

その問いに、綬蛇矢も困ったような表情を浮かべるが、軽く笑って立ち上がる。

「大丈夫だよ、あの程度なら。幾ら使っても俺は俺のままだ。」

彼の答えにユーノは顔を曇らせてしまう。その言葉の意味を理解してしまったからだ。

「そんな心配すんなって。俺の周りはすげえ奴ばかりだしな。こんな機会そうそう無えよ。仮に、俺が変わっちまったとしても、生きる世界が変わるだけだ。」

そう言って去っていくとする緩蛇矢の背に、

「なのはたちの前では間違っても言っなよ、そんなこと……」

というユーノの呟きが聞こえたが、彼は苦笑いを浮かべると出て

行ってしまった。

「アイツはもう覚悟してるんですよ…自分が魔族になることも…同じ時を生きられなくなることも…」

ゼオンの呟きにもユーノは俯いてしまう。そんなことはわかっていたからだ。わかっていても納得は出来ない…

「アイツは馬鹿だ…いつも自分だけ良いカッコして…人の言うことなんて聞きやしないんだから…」

ユーノの呟きにゼオンはゆっくり首を振ると、自身も部屋を出ようとした所で立ち止まり言う。

「確かにアイツは我儘で、人の忠告なんか聞きはしませんけど、そ

れでも、諦めたところは見たことがありますよ。」

その言葉にユーノも顔を上げる。ゼオンは軽く微笑むと、

「俺もアイツの足搔きに付き合ってやろうと思いましてね。先生もどうですか？」

と残り、部屋から出て行くのだった……

後に残されたユーノも、一度苦笑いを浮かべると立ち上がり、荷物をもとめ始める。

……友人が頑張ってるんだ、僕も出来ることをしないと……

そこにある彼の表情は晴れやかなものだった……

……

ホテル内・廊下

「で、何でついてくんだよ？護衛はいいのか？」

「久しぶりにはやてちゃんに会おうと思ってね。護衛なんてもういないだろうし。」

「チッ……まったく……て、あれ？」

綏蛇矢とゼオンが歩いていると前から誰かがやってくる。ティアナとスバルだ……

「あ……食堂長とゼオンさん！」

向こうもこちらに気付いたようで、スバルは駆け寄ってくるのだがティアナの表情は堅い。どうも警戒しているようだ。

…さすがに覚えてるみたいだな…

懸念通り、自分のことを警戒しているティアナに対して綏蛇矢は

肩を竦めて自嘲気味に笑った。

「どうかしたんですか？」

「空想癖があるんだよコイツ。」

スバルが不審げに見るのでギクリとなる綾蛇矢だが、ゼオンの微妙なフォローにより助かったのかそうでもなかったのか、とりあえず話は進む…。

「そんなことより彼女に自己紹介がまだだったね、俺はゼオン・گرانガイツ。教会で騎士をやっているんだけど、六課には知り合いが多くてね、仲良くしてもらってるんだよ。」

「…ご丁寧にも…初めまして、ティアナ・ランスター二等陸士です。」

その言葉に苦笑いを浮かべるゼオン。名乗りあつたのは初めてだったが、初めまして、ではないからだ。

…まあ無理もないか…あの時はまだ10歳だったし心の整理もついてなかったろうからな……

感慨にふけるゼオンの様子をティアナは訝しげに見やるが、視線を綬蛇矢の方に戻すと重々しく口を開く。

「あの…食堂長…さっきは有り難う御座いました…」

「あ…ああ……とりあえず大丈夫そうで良かった…」

「それで……さっきのアレはなんだったんですか？」

その瞬間、綬蛇矢の背中を冷や汗が流れる。まさかこんな直球で来るとは思っていなかった為、何も考えていなかったのだ。

「ああと…あれは…その…」

…何でそんな焦ってたんだよ？別に隠すことじゃないだろ？…

そんな綬蛇矢の元にゼオンが念話を寄越すが、綬蛇矢は渋る渋る。

…お前と一般人を一緒にすんなよ！！何でかナカジマは無事だったけど、かなりの抗魔力が無いと呪い殺されんだぞ……

…それこそ知らない方が危ないだろ…それに俺には抗魔力なんて無いぞ？…

…お前のはただの天然だ！…いや…被害者の彼女には全部説明するつもりだったんだけどこんな急に來るとは思ってた…

……だから普通に言えっの！…それとも何か？…まさか嫌われるのが嫌とか自分の古傷見せたくないとかそんなセンチメンタルなこと考えてんじゃないだろうな？…お前いつからコメディアンになったんだ？…

……上等じゃねえか…表出る陰険騎士が！！…

…ごたくはいいいからさっさとかかって来な…この三流コメディアン！！……

何か知らんうちに二人の念話は、もはや念話の意味無くねえ？というほどにバレバレな様子で、残された二人は呆れてしまってい

た。

「とにかく…隠すのは構いませんけどもうちよっとうまく隠して下さいー！」

そう言って去って行こうとするティアナに、綏蛇矢は溜め息をつくとヤレヤレといった風に肩を竦める。

「わかったよ…危険だしな…今度ちゃんと話してやる…あの時お前が何を聞いたのか…あの左腕が何なのか…全然面白くないけどな…」

その言葉に一度立ち止まるが、ティアナはそのまま行ってしまう、後からスバルも追いかけていった。

「まったく…どんだけ面倒なヤツなんだよお前は…」

隣で呆れたようにゼオンが言うが、どことなくその顔は優しく
つた…

「けっ…所詮、お前の言った通りだよ…遅かれ早かれ…ちゃんと
話しとかないといけなかったことだしな…」

綬蛇矢は悪態をつきながらも大きく伸びをする。その顔からは
疲労の色がありありと見てとれたが、どこか充実した顔だった。

「さて、さっさと報告に行って休もうぜ。」

「そうだな…ところでお前…警備任務でここに来たのか？」

「……あっ……」

…やべえ忘れてた…

「まあ、いいか…どうせ皿洗いだし…あのゴツい人がやってくれんだろ…むしろやれや……」

…
そう呟くと、馬鹿はやてのもとへと報告に向かうのだった…

第七話（後書き）

駄文失礼しましたm（――）mいや何か必死に向かえども進まぬ一方で大分思考錯誤してます（汗）今回はグローランサーのナイツと主人公が名前だけ出ましたが、もうオリジナル入り過ぎて跡形も残らない設定っすね（汗）申し訳ないと思いつつも何とかあの方を活躍させたい！！そんな理由でこんな感じです（本当に原作ファンには申し訳ないm（――）m）後、最近気付いたんですがちびっこ二人は何処だ！？（キャラ口に至っては名前しか出てない（涙））…もつと頑張ります…頑張らせてください……

第八話（前書き）

第八話です。大分…本当に大分時間がかかりましたが何とかあがり
ました（^^;）

第八話

「ん…あれは…」

明日の仕込みを終え、一服しようと外に出た綾蛇矢の目が、見慣れない人物を見つけた。

機動六課のヘリパイロット・ヴァイス・グランセニックである。

「こんな時間に何やってんだろ？」

今、彼がいるのは隊舎の近くの林の中……正直彼がそんなところに好んで行くとは思えない……となると……

「……これから覗きか……あるいは密会か……」

前者は可能性はかなり低いだろうが無いとは言いつれず、後者は口も顔も達者なアイツの事だ……一人や二人手込めになっているかもしれない。

……まあ……俺には関係ない事だな……

そう思い、踵を返して立ち去ろうとしたのだが、ふと、その足が止まった……

…もし…あの三人の内の誰かを待ってるんだとしたら………

そう思った途端、彼の顔色はみるみる青ざめていき、落ち着かない様子で辺りを見回すと、サッと物陰に隠れる……

「…これって…よ…弱みを握るチャンスだ…よな…そうだよな…しっかり確認しないとな…」

気持ちとはまったく別の言葉が口から出たが、自分の浅ましさを認めたくない彼は、無理矢理そう自分に言い聞かせたかと思うと、密かにヴァイスの監視を始める……

「……………?……………」

しかし、観察してみると何かおかしい…彼はじつと林の方を向いている。待ち合わせなら隊舎の方から相手が来るはずだ…あれではまるで待っているのではなくて……

気になって彼の視線の先を追いかけるとなるほど、オレンジ色のツインテールが一人、特訓に励むのが見えた……

.....

「おーおーあんな汗だくになったって……いつからやってんのアレ？」

「おわっ！？……ってアンタか……いきなり隣に現れんなよ心臓に悪いじゃねえか……そろそろ二時間になるな……」

突然の綬蛇矢の出現に驚くヴァイスだったが、直ぐに視線を戻すと、律儀に質問に答えた。

「訓練終わってからずっとかよ……」

「……………やっぱりこないだのミスがきいてんだろっな……」

二人の視線の先ではティアナが複数の球体相手に射撃の訓練に勤しんでいる。

「……真面目なのはいいがあれじゃその内倒れちまうな……止めて
やった方が良くないんじゃないか？」

彼女の顔からは疲労が見てとれ、動きも良くないうえに確実にオ
ーバーワークだ……練習としてあまり効果も見込めないだろう。

綾蛇矢はヴァイスに目配せしてその意を確認するが返ってきた答
えは彼の予想とは違ったものだった。

「それなんだが食堂長……アイツの好きにさせてやってくんねえか
な？」

ヴァイスの言葉に綬蛇矢は怪訝な表情を浮かべる。彼とてわかっているはずだ、今のまま続けるのは危険だっただけくらい。

「多分、不安なんだろうよ……元々責任感の塊みたいな奴で……どんなに周りがフォローしたってミスした事実は消えない……身体を苛めてないと余計なことばっか考えちまうんだ……今のアイツは……」

「……ただの悪循環だ。」

ヴァイスの言葉はバツサリ切られてしまいがそれも承知の上だったのだろう。軽く苦笑を浮かべると言葉を続けた。

「だとしても、自分に満足いくまでやらねーとこっちの言うことなんざ聞きゃしねーよ……満足することなんざねーだろうし、その先には更にデカいミスが待ってんだろうけどな……」

そう言うヴァイスの顔はどこか懐かしいものでも見るかのようになり寂しげだ。

「……経験者は語る、ってヤツかね……何かやらしてからじゃ遅いんだぜ？」

「隊長達にはもう伝えてある。副隊長は黙認するみたいだった。隊長二人は良い顔しなかったよ……だが……」

「それでも止めさせられない……か。必死に頑張られてるから、アイツらも葛藤してんだろうな……まったく……損得勘定じゃ動けないやつらだ。」

そう言つと綬蛇矢は立ち上がり帰ろうとするが足を止めると、

「……まあどっちにしろ、後は本人と指導者の問題だ……心配いらねー……俺達に出る幕はねーよ……」

と言に残していく。

ヴァイスはそれを黙って見送るが、彼が座っていた場所に何か置いていったことに気付いた。

「クッ…ハハッ…」

手にした瞬間ヴァイスは思わず吹き出してしまふ。

「……なんだよ……最初から止める気ねえんじゃねえか……」

彼の手にはスポーツドリンクと軽い食事が丁寧に二人分握られていた……

……

???
研究室

室内で一人研究に勤しむ男…ジェイル・スカリエッティの元に一人の女性がやって来た。

「ドクター、先日の一件での能力解析が終了しました。」

「ご苦労だったねウーノ…結果はいつも通りかい？」

「はい…全て解析不能でした。」

ウーノ…スカリエッティが産み出した戦闘機人「ナンバーズ」の

最初の一人…はさして表情を変えずにありのままを報告した。断ると、彼女は別に感情に乏しい訳ではなく、この場合はいつも通りのつまらない結果に、一喜一憂するなど面倒だったからだと考えられる。

「やはり良いねえ…彼女の周りには本当に良い素材が集まっているよ。個人情報は？」

「その事なのですが…彼の親族の情報も殆どが不明なのです…」

「ほう………どういうことだい？」

「はい…… 桧神綬蛇矢… 男、19歳、出身は第97管理外世界で、その血縁は母と叔父、叔母の3人ですが母は既に死去… 高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、八神はやてらとは古くからの友人であり、PT事件、闇の書事件にも関わっていたようですが詳細不明、データの改竄が行われた模様。その後の4年間も足取りが不明。13歳の時にミッドチルダの上級士官学校に通っていたようですが、実習任務中に上官に暴行を加え退学になっています。また、この時の理由も不明。その後、一般の中学、高校と通い直し、卒業後に大衆食堂で働いていましたが彼女らの要望で、機動六課の食堂長として赴任し、現在に至っています。」

「…… ふむ…… 彼女の近くに昔から居たと言うのに謎だらけ… そのうえ何者かが彼を隠している… という訳か！…… 結構じゃないか！それでこそ解剖しがいがあると言つものだよ！！」

両手を広げ、スカリエッティは高笑いを挙げる。その様はまさにマッドサイエンティスト… 表情は愉快に笑う子供の様だ。

ウーノもそんなスカリエッティと共に冷笑を浮かべるが、すぐに辺りを見渡し始めた。明らかに誰かの気配を感じたからだ……

「随分と楽しそうだな……」

その言葉と共にウーノはその場から飛び退のくと、彼女のいた場所に一人の人物が現れる。

体格からすると男のようだが、その身体には白い鎧を身に付け、顔には仮面を着けている……ちょうど、あの白い異形（ユング）を連想させる出で立ちだった。

「やあ君か…ここに来るとは珍しいね？どうかしたのかい？」

珍しい客人に更に気分を良くしたのかスカリエツティはかなりご機嫌だがウーノの表情は険しい。

「アナタ……いつからここにいたのですか！？」

キツと仮面の男を睨み付けるが、睨まれた当人には何も動じた様子は無く、寧ろ口元を歪ませている。

「何も聞かれてはマズイものでもないだろう？それにここまで近づいてからでないと気付かないようでは、戦闘機人とやらもたかが知れているな。」

「貴様アッ！！」

男の言葉にウーノは激昂するがそれをスカリエッティが制する。

「彼女は戦闘用ではないのでね。それに君の所の化け物と違って繊細に出来ている。」

すかさずフォローをいれはするのだがそれでもスカリエッティは愉快そうで、男はその態度に顔をしかめるとそれも鼻で笑った。

「あんなものはただの捨てゴマだ、俺だけでは手が足りないからな。それよりも……あの茶番は何だ？」

「アグスタでの一件のことかい？私の友人に保険をかけて貰っただけだよ。実際私の思惑通りに事は進んだだろう？」

「フン、まあ良い……お前の玩具がどうなると奴等がどうなろうとどうでもいいことだ。ここからが本題なんだが、この間のサンプルがどうなっているか……それを見せて貰いたい。」

「あの二体なら損傷が激しくてまだ修復中だね。誰が作ったものかは知らないが私達の技術では考えられない程不明な点があり、幼稚すぎて呆れる部分もある。とても弄り甲斐があるよ。」

「お前の嗜好を聞いた覚えはない…使えるのか？使えないのか？」

スカリエッティに対しての態度にまたもウーノがキレそうになるが、それも抑えると彼はやはり楽しそうに口を開く。

「つれないね……正直、現状では稼働できない。ただ、構造解析は済んでいるから完全修復して元通りにすることも改良することも出来る。つまりは時間次第。」

「……わかった。クライアントにはそう伝えておく。」

そう言つと、男は扉に向けて歩き出したがその背中に声がかかる。

「私としては、早く君の望みを叶えてあげたいんだけどねえ……彼女
の能力には興味もあるしね……」

そう言つた瞬間、スカリエッティの首もとに剣が突きつけられる……

「ドクター!？」

「動くな!!」

男の一喝でウーノの身体は竦み上がり、身動きすらとれなくなってしまう。それでも、スカリエッティはまったく動じた気配はなかったが。

「一つ忠告しておいてやる……俺が必要なのはプロジェクト・Fの技術と扱える頭脳だけだ。代わりが見つければ、お前達には用がなくなる。それを忘れるなよ……」

そう言つて剣をしまつと部屋から出ていってしまう。スカリエッティはそれを笑みを浮かべながら見送ると、ウーノを助け起こす。

「フフッ、大丈夫かいウーノ？」

ウーノはまだ落ち着かないらしく、肩で息をしていたが暫くすると口を開いた。

「ドクター…何故あのような者達とも手を組むのですか？確かに彼らもたらすものには目を見張るものがあります……ですが危険過ぎます……」

「そうかい？老人達にぐらべれば余程話がわかると思うけれど？」

「しかし……」

それでも食い下がるウーノだったがスカリエッティは愉快そうに話し出す。

「彼らが私を殺す事など簡単だろう…ならば何故殺さないのか？…私に利用価値があつて私以外にいないからだよ。ならば私も彼らを利用すればいい。私達の利害が一致するから手を組んでいる。そういうものだろう？」

ウーノはその言葉に複雑な表情を浮かべる。薄々感じていたことだがそれでもやはり精神的に宜しくないのだろう。だが、彼はそれを承知の上で行動していたというのだ。

「それに、彼も哀れな男さ…死した者は生き返りはしないというのにね…」

「？しかし、騎士ゼストは……」

「彼は然るべき処置が出来た…魂が離れる前だったからね…」

「……………」

「ん？どつかしたかい？」

「……………（ええええ！？）」

ウーノは開いた口が塞がらなかった…よもやこの男の口からそんな言葉が出ようとは……

「それほど意外だったかい？確かに非科学的かもしれないけど、物には命が宿るものさ。だからこそ……私は君達を心から愛している。」

それを聞いたウーノは顔を悲痛に歪めた。その眼差しにはいよいよ憐れみが見え始める……

「……ドクター？……少しお疲れではありませんか？食事もうくにと取っていませんし……」

「ん……そういえば珍しく小腹が空いたね……少し休憩にしようか……」

と、取り出した携帯食を口にしようとしたところでウーノが取り上げた。

「そんなものだけでは身体によくありません！…少しの間お待ちください、私何か持ってきますから。」

「え…いや…ちゃんと栄養はとれてるから…そもそも料理なんて出来るのかい？」

「ドクター…！栄養などよりも大事な物があるとネットのデータにありました…それに私を産み出したのは貴方です。ですから私達に不可能はございません…！」

もはやウーノの目には炎が宿っている…その炎は論理的思考など焼き付くし、周りを巻き込んで大火事になろうとしていた……

「それでは少し待っていて下さい!..!」

「あ...ああ...頑張りたまえ...」

もはや圧倒されてしまって、まともに返事も出来ない内にウーノは行ってしまった...

残されたスカリエッティは彼女の行動理由を必死に考えるがよく解らず、「そんなデータ入れたっけ? まあ最近バージョンアップしてなかったしな」と一人で納得し、深く考えないようにした...

恐らく降りかかるであろう災厄を一時でも忘れるために.....

.....

数日後……六課隊舎内食堂にて……

「おいおい聞いたか？今日の訓練中に高町一尉がマジでキレたらしいぞ。」

「あんだと！？あのなのは隊長が本気でキレるなんて……」

「何だ？そんなに驚くことか？あんな可愛い顔で怒られたら……萌えるじゃねーか……グフフ」

「バカかオメー！？あの人の恐ろしさ何も知らねーだろ！？管理局には白い悪魔伝説ってのがあってな……」

「……ランスターのヤツ……再起不能だつてよ……」

「何でもぼろぼろになった所でトドメ刺されたんだつて……」

「一緒にいたナカジマは睨まれただけで何も出来なくなつたらしい……」

「……………（ワイワイガヤガヤ）」

「何か……スゴいことになってるみたいですね……」

六課フォワードのチビッコの一人、キャロ・ル・ルシエは周りのあまりの騒がしさに小さくなってしまう。気の弱い彼女には大変なだろう。

「あの〜綾蛇矢さん…？それであの……これは？」

もう一人のチビッコ、エリオ・モンディアルは目の前の男、綾神綾蛇矢と自分達の前に置かれた牛乳を困惑気に見比べている。

「ああ、そりゃ俺の奢りだ。グッとやってくれよ。」

「じ……じゃあ……」

「いただきます……」

二人は顔を一度見合わせると、コクコクと飲み始める。それを見てとるや彼の顔に笑みが浮かんだ。

「よし飲んだな。じゃあちよつとやってもらいたいことあるんだが……」

その瞬間に二人同時にこう思ったと言う……

（しまった……ハメられた……）

「心配すんな、大したことじゃない。まあ飲んでも飲まなくてもやつてもらつ予定だったけど……」

じゃあ何で牛乳用意したんだよ…どうせならもつと良いモンにするよ……と二人揃って思っているよ、

「まあこれで俺の良心も痛まないしな。それに、やっぱり成長期には牛乳だろ？」

まったく悪びれない馬鹿に対して二人は怒るよりも困惑し、同時に呆れてしまう。

「ハア……僕らに一体何をさせるつもりなんですか？」

「あんまり酷いことはちょっと……」

「だから、そんな大したことじゃ無いって。ただちょっと説明して欲しいんだよ…出来れば身振り手振り加えて……な？」

そう言って二人を休憩室に引っ張って行く…

この時二人の口から盛大なため息が出たのは言っまでもない………

………

「…え……えーっと確か…「私はもう、誰も亡くしたくないから失いたくないから…だから……っ、強くなりたいんです!？」」

「少し……頭冷やそうか……クロスファイヤー……」

「「う、うわああああ……………何だっけ？…………ファントムブレイ
…………？」」

「そこはもつと「ウアアアアアアッ！！」ってヤケクソ気味だったよエリオ君！……………シュート……………」

「ゴメン、キャラ……………」

「黙ってて！…」

「ひいっ！？……………」

「ここでスバルさんが叫ぶんですけどなのはさんがバインドかけるんです。そして「よく見ておきなさい……」って言うって……」

「2発目撃ったって訳か……」

一部始終を見終えた綬蛇矢が感慨深そうに頷く。

そう、彼がやって欲しかった事とはティアナがなのはに撃墜されたシーンの再現だった。自分はこの時仕事で見れなかったので、どうしても詳細が知りたかったようだ。（因みにキャロがなのはでエリオがティアナ）

「ふむ……なるほど……にしても上手いなキャロ。目の前にアイツらがいるのかと思うほどだったぞ。意外な才能だな。」

そう言つて頭を撫でてやると、彼女は恥ずかしそうに頭を押さえるが表情は明るい。彼もその姿に満足したのかニカツと笑いあう。

ポツーン

周りの空気から完璧に置いてきぼりを喰らつたエリオ…その背中
は10歳にしてはあまりに淋しかった……

「……あの……僕には劣いの言葉は無いんですか？」

「この大根があああ!!」

「（ガーン）……ひ…非道い……あんまりですよ……」

その様子を見て鬼畜野郎は更に気分を良くする。

「まあまあ大根だつて良いじゃねーか、それにこんな社会に出たつてあんまり使わねーし。それよりも二人共、この場合どっちが間違つてたと思う？」

「……えっ!？」

予想外の展開に二人は困つたような顔になつた。10歳の二人には意地が悪かつたかと鰐蛇矢は苦笑いを浮かべるが意外にもちゃんと答えが返つてきた。

「二人とも悪かつたと思います。ティアナさんはなのはさんの言うことを聞かなかつた訳だし、なのはさんも少しやりすぎだつたかと」

「でも、二人とも悪かったとは思いますが間違っていたとは思えないんです。うまく言えませんが…」

その答えを聞くと綬蛇矢は満足そうに頷き、

「わかった、ありがとな。お疲れさん。」

と言って席を立つ。

「え…ちよっ…あの…」

「……間違っていましたか？」

二人は不安げに呼び止めると彼は足を止めこう言う。

「オイオイ…俺が良いか悪いか決められるわけないだろ？人の考えは人の考えだしな。」

その答えに二人はポカーンとしてしまう。

「俺はお前らがどう思ったのか聞きたかったただけだ。要は答えなんて人それぞれで良いんじゃないか？ああでも、上官の命令と他の人の意見はちゃんと聞くんだぞ。前者は寿命（色んな意味で）を延ばすために、後者は一人称俺様にならないためにもな。」

後半早口になりながらも彼はちゃんと喋り終えて出ていく。残された二人は何だか色々腑に落ちないらしくしばらく悩んだそう。

.....

（ホント…アイツらは真っ直ぐ育ってるなあ…）

そんなこと思いながら彼はなのはの元へと向かう。

（どっちが悪いと思う…か……）

本当はそんなのは簡単だ。命令違反したティアナの方が悪い。
キツイ罰を喰らったからって文句なんか言えない。

（例えどんな理由があるにせよ……な…）

だけどなのはは、そんな所まで気にしてしまう…

自分が一度、撃墜^{おち}てるからといって教え子までそうなるとは限らない…むしろ自分の教え方が悪いんじゃないか？とか、管理すべき立場でありながら止められなかった、とか。

（そついつ自意識過剰なこと考えてんじゃねえかな）

そんなことを考えていると件のサイドポニーが見えた。やっぱりへこんでやがる……

（まあ一番悪いのは俺とヴァイスだろうけどな……）

そして彼は、彼女の隣に持ってきた差し入れ（キャラメルミルク）を置くのだった……

.....

少し遡ってスカリエッティ研究室……

「……ウーノ……まだかい？」

「もうしばらく！もうしばらくお待ちくださいドクター！……ほら、アナタ達も手を動かさない！」

「……でもさあウー姉……アタシら料理なんかしたこと無いし……それにさあ……一体これは何作ろうとしてんの……？」

ナンバーズ6、セインの突っ込みにウーノは固まる。現実引き戻された瞬間に辺り一面に広がるくずの山……元は食材だったであろう物が辺り一面にばらまかれた上に、何だかよくわからないソースの類いが飛び散りもはや地獄絵図と化している……

「こ……これは…アナ達がちゃんとやらないから…そう！…トーレは…？トーレは何処に行ったの？」

「人のせいにすんなよ。トーレ姉ならさっきジャガイモ握り潰してどっか行っちゃったよ。」

「クッ…No.3もあるものが敵前逃亡なんて…クワットロは？」

「ん？それならあそこに……」

「……ねえディエチちゃん……納豆って……実は大豆に失敗したねるねる○るねを混ぜたものなのよ!」

「……いやいや……幾らなんでもそれはないでしょ……」

「本ン当よぉ……あのおばあさん実は作るのすごい下手でえゝその成功確立、なななんと!一千万分の一!」

「なにそれ?どこの宝くじ?」

「……………」

「…………あの娘達は論外ね…………チンク！…………そうだわあの娘なら！」

「フッ…………お呼びですか姉上…………」

「おおっ！何かチンク姉すっげえ自信ありげだ！」

「今までデータを検索していたからな。単純な物なら既にマスターした！」

「さすがねチンク……やっぱりアナタは頼りになるわ!」

「姉上、その言葉は終わるまで取っておいて下さい。では、いざっ
!.....」

「な、何い!ざ、材料が宙を舞い……!」

「そ、そのまま鍋に……もしや……これが伝説の中華○番!?」

「ハッハッハッハハッ!見よ!我が包丁さば……あっ」

ブシューウウウウウッ

「すまぬ……使いなれぬ得物のせいか指ごと飛ばしてしまった（てへっ）」

「てへっ……じゃねえ！いきなりスプラッタかよ！？て言うかチンク姉なのに体型ネタじゃねえのかよ!？」

「と、とりあえず止血しないと……今度は辺り一面血の海……鍋の中まで入ってるわね……」

「それなんだが姉上、先程のデータの中に隠し味として動物の生血いきちを使う物があつた。（本当にあります）これは応用出来ないだろうか？」

「なるほど……そういえば私も聞いたことがあるわ……確か精力増強に役立つとか……はっ！？今のドクターに最適だわ！！」

「よし！では煮込んでいこう！」

（……知らない……アタシはなんにも見てない！……ゴメンドクター……あんない顔されたら止められないよ……）

「よし！完成！」

「待っていて下さいドクター！今すぐお持ちしますからね！」

走るウーノの背中を見送りながらセインは決意する。

（ドクター……今回だけは何とかして。次からは……アタシが何とかするから！）

こうしてセインは、料理の道への第一歩を踏み出すのだった……

第八話（後書き）

駄文失礼しましたm（――）mいやゝ時間かった（理由は完全に如く4と超電磁砲のせいですが……）その上、今回初登場のスカ一味とチビツコ……酷いっすねえ……スカに愛を語らせるのは幾らなんでも……。ウーノは、個人的には多分料理なんざちよいとやってしまいそうに思うのですが、あえてちよつとドジっぽくします。最後にあのスプラッタなシーンは反省してますが（指の行方は考えないでいただきたい……）、これはあえてそのまま挙げました。いや素晴らしきかなキャラ崩壊とフリーダム展開……何かホントすいませんでしたm（――）m

第九話（前書き）

第九話です。大分時間がかかってしまい大変申し訳ないですm（
|）mそのうえ説明文ばかりで展開的にも少しアレですが（涙）
よろしければお付き合い下さい。

第九話

「おい！？何で逃げるんだよティアナ？」

またあの夢…兄さんの夢…死んだ筈の兄さんが私に会いに来てくれる夢……

「だから……待て……」

じゃあ何で私は逃げるの？あんなに会いたかった筈なのに……

「……………」

これは夢だってわかっている…兄さんはもういないのだから…夢の中でくらい甘えたって…

ワタシハニヤンニナニヲシタンダツケ？

そう思った瞬間… 目の前に幼い少女が現れた…… あれは…

「わ……た……し……？」

ワタシハニヤンニナニヲシタンダツケ？

目の前の少女がボソボソと何か言っている…何を言っているのか
聞こえはしない……だが、ティアナの頭の中では頻りに繰り返され
ている…

「来ないで……」

アノトキ…ワタシガナニモシナケレバ…ニイサンハシナナカッ
タ…

「…やめて…！」

ソシテ…ワタシハニイサンノイシヲツグタメニヒツシデドリヨ
クシタ…

「…そ…そうよ…だから私は…兄さんの為に…」

デモ…ソナノハタテマエ…アナタハタダソウスルシカナカッタ
…ジブンガドウスレバイイカワカラナカッタカラ…

「違うわ！？私は今までずっと……」

ソレハ…ウソ…アナタハタダソウスルコトデツグナイタカッタ
ダケ…アヤマリタカッタダケ…

「！？………」

ホラ…ニイサンガキタワヨ……

その声と共に私の肩に手がかった……

「…ハハッ…足…速くなったな……」

そしてティアナは、後ろを振り向いた…

.....

「.....あれ?.....」

確か自分は振り向いたはず.....なのに気付いてみれば見知らぬ
天井.....しかも寝かされている.....

「あら、ティアナ。起きた？」

「……シャルル…先生…？」

身体を起こすのと同時に、六課の専属医であるシャルルがやってきた。どうやらここは医務室らしい…

「あんまり目を覚まさなかったから死んでるんじゃないかって心配しちゃったわ……昼間の模擬戦でのこと…覚えてる？」

そこでティアナの脳裏に浮かび上がるのは白いあか…もとい女性。彼女の瞳から感じられる失望と後悔…

「……ええ…まあ……」

今のティアナにはそう答えるだけで精一杯だった…

.....

六課・屋外…

「こんなトコに居ると思ったら…もう一人いたんだね…」

「ああ…フェイトちゃん…」

「旦那は借りてるぞ。」

フェイトは綬蛇矢の冗談？、に苦笑いを浮かべるとなのはの方に
向き直る。表情から察するに昼の模擬戦絡みだろう……

「さっきティアナが目を覚まして、スバルと一緒に謝りに来てたよ
…なのははまだ訓練場だから、明日の朝一でって言っちゃったんだ
けど…」

「そう…二人の様子は？」

「まだちょっと…ご機嫌斜めだった…かな？」

それを聞いてなのはは一層落ち込んでしまう。覚悟はしていた
のだろうがいざ聞くととなるとやはりキツいらしい…

「……ゴメンね…監督不行き届きなうえに…フェイトちゃんやライ
トニングの二人まで巻き込んだじゃって…」

「ううん…私は全然…」

「…そう…明日の朝ちゃんと話すね…フォワードの皆と………」

その時、辺りに警報が鳴り響く…

（（敵襲！？）（）

聞きつけるやいなや二人は駆け出していく…後に残るのはもはや
空気とかしていた馬鹿が一匹……

「……………（俺の扱い酷くなつてないか？）」

「ハア……………一応、俺も待機しといた方がいいのか、はやてに聞いとくか……………」

……………今日の空は快晴……………星の綺麗な夜だ。こんな日はのんびりしたいもんだな……………」

そんなこと思いながら隊舎に帰る綾蛇矢……………何処までもマイペースな彼だが、これから降りかかる災厄にはまだ気づけてはいなかったのだ……………」

.....

「.....で...これがその災厄なのか...?」

目の前には頬を腫らしたティアナが、その隣にスバル、次いでエリオ、キャラと続いている。

対してこつち側にはシグナム、シャマル、シャーリーと続く...
なのはら三人が出撃して他は待機... 大方あれはシグナムの仕業だろうな...

(何をブツブツ言っている?)

(ああいや... 何でもない... それより、厳しいのは良いんだが、直球すぎないかなシグナム?)

（私ではない、やったのは高町だ。）

（へー……ってウソオ！？）

（嘘だ、私がやった。（フッ））

（本人は冗談を言ったつもりなんだろうが全然そついう風に聞こえねーから困るんだよ……）

今のツッコミはややこしくなりそうだから胸にしまい、実際、なのはならやりかねんな、とか思いながらも本題に持っていく……が、まず……

「状況がわからん。」

「ちょうど良い機会だからなのはさん達の過去と教導の意味と、ついでに謎の食堂長について知ってもらおうと……」

「で、俺に昔話をしろと？というよりは何故に俺？」

何故、という言葉を強調して言うては見たものの大体の理由はわかってる……

「私に語り聞かせなど無理だ。」

「わ……私は何か記憶があやふやだし……」

かたや偉そうでかたや白々しく面倒な部分は人に押し付けやがる…使えん巨乳共め…

「私は実際に見たわけでは無いですし…当事者の方がいいでしょうから…（ニヤリ）」

一番腹立つのがこの眼鏡だ…絶対楽しんでやがる…

「…というか…いいのか？俺も含むが個人のプライベートを勝手に…」

「だって緩蛇矢さんティアナに言ってたじゃないですか、ちゃんと全部話すって…（クス）」

その瞬間、彼の頭はテーブルに激突した……今のはあの場に居たものしか知らない筈……なのに知っているという事は……

「……お前……普段からそんなことやってんの……？」

「たまたまですよ……たまたまあ（ニヤニヤ）」

……今後、迂闊な行動は控えよう……プライベートなんざあったもんじゃない……

「ったくしょうがねえ、良い機会だから全部話してやるよ。最近の状況からするに、前線に出る機会も増えそうだしな……」

「え！？じゃあこないだのデバイスとか云々は？」

「全部嘘だ。」

それを聞いたスバルは、さっきまで不機嫌面だったのに、いつの間にか呆気にとられた顔に変わっている。というかホントに信じてたのか……

……

「さて……どこから話したもんか……とりあえず俺が前線メンバー扱いされてない理由からいくか……」

さっきまでの軽くなりつつあった空気とは違い、逆に重さを増していく。息苦しい…そう感じられる。

「まず簡単に説明しておく俺は純粹な人間じゃない。半分位は魔族…そうだな…悪魔みたいなもんだ。」

「……………は？」

あまりにも信憑性の薄い話にスターズの二人は固まってしまふ。それはそうだろう…いきなり私悪魔です何て言われて、信じる方がおかしい（因みにチビ2人は知ってた）

「まあ普通のリアクションだな…でまあこれが一応証拠なんだが…」

そこで彼がおもむろに左手をつきだす。すると、見る見るうちに変化していく。異形のそれになる頃には新人フォワード陣はドン引きだった…

「まあこんなもんがついててな…今は封印してあるから見た目だけだが、こいつ自身、人間に怨みがあつて無差別に呪うちまう。まあ死ぬとかそういうたもんじゃないんだが、場合によっちゃ死ぬより辛い。」

ティアナの背筋に冷たいものが流れる…他の三人も似たような感覚らしい。

「危なっかしくて連携なんか出来ないだろ？俺なら近寄りたくもない。」

そこで彼はシャーリーに目配せし、画像を出して貰う。

モニターにこの間のユングとの戦闘の光景が映し出された…

「これだけみると区別しづらいかもしれないけど、俺の攻撃には非殺傷がきかない、つまり確実に傷つけてしまう…その上広範囲だ。後は…わかるな？」

「……………」

画面に釘付けになる新人達…目の前で跡形もなく焼き付くされたユングと森林に皆言葉が出てこなかった…もし一緒に戦っていて巻き込まれたら…そう思うと震えが止まらない……

そして今度こそ悟る…目の前の男は人間ではないのだ、と……………

「…あー無理だとは思つがあんまりビビらないでくれ…話が出来ん。」

頭のなかではわかってても身体は正直だ。皆、目の前の男に恐怖し、自分達とは全く別の存在を奇異の目で見てしまふ…やめようと思つて出来ることではない…付き合ひの長い彼女達とは違ふ…彼にもそれがわかつていた。

（まあ…わかつてたことだな…慣れっこだろ…）

（今までの人生…よってくる人間もいたが大抵は離れてつた…真実を知つてもつきあつてくれてんのはアイツらだけだしなあ…）

自然と自嘲気味に笑みが浮かぶ…今の生活は彼にとって幸福そのものだったが、どうしたってケチがつき始めてしまふ…それを笑っているのだ…

「あ…あのっ!？」

だから、そんな折に叫ばれた言葉は、彼にも予想外だった…。

「ま…魔族って何ですか!？」

「そ…それに…綬蛇矢さん普通の魔法も使えます!あれは何故…?」

チビ達がなけなしの勇気を振り絞って聞いてくるのだ。

「……………」

幼少の頃から知っているとはいえいつも一緒だった訳ではない…
所詮自分などフェイトのおまけであつたろう…その程度の存在でしかない。そんな男の実情を目の当たりにしても、彼らはなんとか克服しようと頑張ってくれている…彼にはそれがこの上無く嬉しかった…

「あ…あの…綬蛇矢さん？」

「あ…ああ…魔族だつたな…」

不意にエリオの言葉に我に還るが発音が上手くいかない…そう思った時に隣から何かの箱が差し出される…これはティッシュ？

「まずその顔を何とかしろ……」

そう言つてシグナムは口元に笑みを浮かべた。どうやらまた俺の悪い癖が出たらしい…

「フフッ…相変わらずね…」

シャルは頭を撫でてこようとするし、シャーリーはやな笑みを浮かべてやがる。新人達も何だか毒気を抜かれたようだ…さつきまでのピリピリした雰囲気は薄れている。

（結果オーライ、というには大分高くついたな…）

大勢の目の前で赤っ恥をかいてしまい、何とも言えない表情になつてしまふ。多分、明日にはあの三人の耳にも入るだろう…そう考えると今から憂鬱になつた…

「あー…ゴホン！…で、魔族についてなんだが…実は彼らはこの世界には存在しない…」

「え…それじゃ何で…？」

間髪いれずにスバルが聞いてくるが、まだ話の途中だと手で遮る…少しせつかちだな…

「この世界でも異世界でもない…別世界ってやつだ。」

新人達「…はあ！！？」

「同じリアクションかよ…つまんねーな…まあ要するにこの次元とは全く異なる次元に存在する全く別の世界…でわかるか？」

「はあ…まあ言いたいことは……でもそんな話聞いたことが……」

「そりゃそうだろう？管理局でも掴んでないだろうから。」

その言葉に一同ポカーンである。顔はコイツ何言ってるの？みたい……

そしてしばらくすると急に冷静になる。よた話かもしれないが、もしかして自分はヤバイことを知ろうとしているのではないかと……

「まあ信じる信じないは各々に任せて…そうだ！うちの家系を語るにあたって唐突だが、俺の魔導師ランクは幾つでしょう。はい、キヤロ！」

「え！？えつと〜Sですか？」

「ブブー。ナカジマは？」

「え、じゃあ… AA！」

「違ーう。残る二人？」

「案外 B とか…」

「僕は A で…」

「オイオイお前ら過大評価しすぎだ……でもなんか照れんな。」

「……いいから続けるDランク。」

シグナムのツツコミに新人達は顔を見合わせる…幾らなんでもあれほどの力を持っていてDの筈がない…

「間違いでもなんでもねえよ。正真正銘俺はDランクだ。ただし基準はこの世界でだけ…」

「?と、いうと?」

「こっちの魔力とあっちの魔力は全く別物、ってことだ。俺は少しこっちの人間も混ざってて、こっちの魔力も使えるんだよ……下手だけど…」

「な…成る程…でもこっちの世界であつちが…あれ？」

どうもスバルの頭の中はこんがらがったらしい…軽いため息が自然に出てくる。

「ちゃんと説明してやるから、その代わりにしっかり聞けよ…ウチのバアさん達の話からだ…」

そこで皆気付く…また空気が変わり始めていることに…

「異世界…ネバーランドの混乱と統一…緋乃神の誕生と追放…か…」

そして綬蛇矢は語り出した……………

第九話（後書き）

読んで下さってありがとうございますm(_____)m いやー今回の話を書くにあたり、色々公式調べて見たら……こんな設定あったん！？ってのがありすぎて正直へこみましたね（汗）……ってかジエネレーションってなんやねん……続編だったの？ってのが一番のシヨックで……（涙）今書いてるコレは、作者がまさに中二真っ盛りの頃に書いてた物の続編になってまして、正直、世界設定に大打撃でしたね（笑）今回は二話同時に挙げますのでそちらもどうか宜しくお願いしますm(_____)m
お疲れ様でした。

第十話（前書き）

第十話です。世界設定ばかりでつまらないかもしれませんが読んで頂けたら幸いです。今回台詞の前の一文字は喋ってる人の頭文字になってます（綬蛇矢は無し）

第十話

「ネバーランド」……向こうの世界のバカでかい大陸の名前で、そこには沢山の国があったんだ……

いろんな種族がいた…人間、エルフ、ゴブリン、他にも猫やカエル（人型）なんてのも居たらしい…魔族もその一つだった……

色んな国家があったんだが、ある時急にバランスが崩れてな……釣り合いとるために天から神様「ジャネス」が降りてきたんだ。で、その神様のお陰で釣り合いはとれたんだが、勢力拡大中だった人間はそれをよく思わなかったんだよ。

ここで、彼は一度辺りを見渡した…ちゃんと話についてきてるのを確認すると、綬蛇矢は再び語り出した…

「この頃から人間が色んな所にちよつかい出すようになって、各地で戦争しまくってな……しまいにはその神様のことを”大魔王”って呼ぶようになった……」

エ「?…なんで大魔王なんですか?」

「元々の姿形が魔族に似てたし、魔族の祖先も彼だった…その上降りてきた当初、一番でかかった何とか帝国を全滅させちまってるからな……こうして大魔王、「ジャネス」は形作られてたって訳だ。以降、数百年、大陸は彼の支配下に置かれた…」

ス「でも食堂長…こんな凄い…人?が何か関係あるんですか?」

「大有りだよ……これウチのひい祖父さんだし。」

新「えええええっ!??」

テ「……………嘘でしょ？」

「魔族は人間の十倍は生きるの。それにこの人、創世記からの人物だから数えられるレベルじゃねえよ……」

キ「じゃ……じゃあ………綬蛇矢さんって……大魔王なんですか!？」

「……………まあ……間違っちゃいないだろうな……うん。大魔王なんて柄じゃねえけど……………」

テ「……………ファンタジーね……………よりもよって魔王なんて……………」

「まあ、いいだろそんなこと……先に進めるぞ……」

段々、人間の中にも勇者とか超人とか多くなっていった……ジャネスの戦いも激化していった……毎日が血で血を洗うってやつだったらしい……彼もどんどん身体に傷を負っていき、日毎に人間に対する憎しみが強くなっていったんだよ……

しかし、彼が暴走してしまっただけは一気に均衡は崩れ、あつという間に世界は魔族一色となってしまうだろう……それでは自分が下界に降りてきた意味はなくなる……

だから彼は必死に耐えた……剣で斬られようとも……槍で突かれようとも彼は耐えた……耐えて耐えてもはや限界、頭がおかしくなるといふ所で”それ”はジャネスから別れた……

そして、それは知識を備え人を形どる……闇の貴公子”ジャドウ”の誕生だ……

ジャドウは危険だった…何しろ今まで自分が封じてきた物で出来ている…人間に対する情など持つてはいない…ジャネスは結果として更なる驚異を産み出してしまった訳だ…まあ、この頃はまだ、二人の間に目立った争いは無かったけどな…

そんな傷付くばかりのジャネスにも救いがあったんだ…

ある時、ある勢力との戦時中に一人の女性が止めに入った…名をマリア…まあぶっちゃけると、この人がひいバアちゃんだ…マリアはジャネスの心情を理解しようと、魔族の側にやってきた。今思うがすげー人だよ…一人で悪名高き大魔王の所に来るんだから…ひい祖父さんもそりゃ惚れるわな…

そしてこの二人の間に出来た子供が、後の歴史に多大な影響を与える上に、俺の能力のオリジナルでもある「爆炎の申し子」…ヒロなんだ…

エ「じゃあ、その人がさっきの炎とかあの左手とか使ってたんですか？」

「そうだ……マリアは元々火を操る一族の人間だったらしいから受け継がれたんだろう……さっきの戦闘で俺が使ってた鎌、「ゲート・オブ・ヘヴン」っていうんだが……まあ、また登場するから説明は後で……これも彼女が使っていたものだな……そしてこの左手なんだが……これはちょっと曰く付きでな……」

ス「曰く付き？」

「……ああ……最初は普通の手だったんだが……彼女がまだガキで、力も巧く使えなかった頃、迫害されてた魔族の子供を庇って人間に切り落とされちゃったんだ……」

テ「そんな……小さな子供まで……」

「……小さくても魔族は魔族だ……年を重ねれば恐怖でしかない……肯定する訳じゃねーけど気持ちはわから無くはねーよ……」

エ「……緩蛇矢さん！？……駄目ですよ！これは許してはいけないことですよ！……」

「オイオイ……熱くなるなよエリオ……そんな昔話気にしても仕方ねえだろ……まあもし似たようなことがあったなら……」

エ「あつたなら？」

「……わからんが……きっと燃やすな。」

エ「……………熱くならないで下さいね……………綾蛇矢さん…」

「で、左手を無くしたわけなんだが、それを魔族の力で再生させたんだ…だが生えてきたのは異形のもので、しかも、その時の彼女の怨念は消えずにそのまま宿った……………」

エ「じゃあ、その人の周りは大変な事になってたんじゃ……………」

「どうしてたんだろうな、ホント……………まあ天下の大魔王様だ、どうとでも出来たんだろ……………」

テ「これがあの時の……………」

ス「私は何で大丈夫だったんだろ?…」

「わからん……人間に対してはスゴい怨念を発する筈なんだが……謎だな……」

テ「（もしかしてスバルの場合……人間と思われなかったからじゃ……）」

「……？……どうしたのティア？……まだ具合悪い？」

テ「！……うつん……何でもない無いわ……」

ス「……？変なの？……」

テ「（マズイ…何か話題を…そうだ！）…その「爆炎の申し子」とか「闇の貴公子」とか大層な名前よねえ…何か中二くさいし…」

ス「そうかなあ…？カッコイイじゃん。」

エ「でも、ちょっと気恥ずかしい気も…」

「まあまあ、そう言うな…エースオブエースも似たようなもんだろ？それに通り名つてのはあっちじゃガチで強さの証明…相手からの畏怖と皮肉と賛辞が詰まってるんだよ。」

テ「そりゃ…そうなんでしょうけど…」

「因みに、この人達は一人で千人とか相手に余裕で勝っちゃまうらしい……本当かどうかはわからんけどな……」

新「……………」

ス「1VS1×1000なら時間はかかるけど……………」

テ「あんたのスタミナでも無理があるわね……………」

エ「巧い具合に罠にはめたりしても全然足りないだろうしなあ……………」

キ「（ヴォルテールならきつと楽勝ね……………ちょっとやってみたいかも……………」

「……………あれ？……………」

どうも新人達の頭の中は、千人ってどんだけだよ…というより、千人からどうやったら勝てるか、という思考になるらしい…

(……さすがはなのはだ…良い教育してやがる……)

綬蛇矢も、そんな頼もし過ぎる存在になりつつある新人達に、ちよっとヒキつつも話を進める……

「まあ、千体のガジェットならあるかもな……ってことで次行くぞ？」

そして、ここでジャドウがジャネスに牙を剥くんだ……理由はわからんがやっぱり見ててイラッときたんじゃないだろうか？何しろ産み出した本人が人間とイイ仲になってんだからな…そんでまあ……お互いハンパねえ力の持ち主だ……記録では百日ほどやりあっ

たらしい……結果はジャネスが勝ち、ジャドウは力を封印されて放り出された……そしてこの時にマリアが行方不明になってる……ジャドウは後に復活するが、マリアの行方は未だにわかってないようだ……

こんなことがあったんでヒロは大分傷ついたんだが、この数年後、彼女は自分の力を引き出すためにとある塔を登るんだ。

テ「塔？」

ああ、名前をスペクトラルタワーといって、大陸のド真ん中にあるんだがこれがまたバカみたいにでかくてな、一万階とかあるらしいうえに最上階には”この世界の全て”があつたらしい……俺も実物は見たこと無いけどマジだぞ……まあ結局、ヒロはそこまで登らずに降りるんだが、そこである意味運命の男と出会うんだ……

…そいつはその時はかなりの好青年だったらしいが……次に会っ

た時には既にぶっ壊れかけていた…… 幸か不幸か運命の悪戯か…… 自分は塔に登りきってしまつて…… そして……”世界の全て”に触れたんだ…… そして人の身でありながら全てを超えてしまった…… この時の力の暴走で大陸の自然が吹っ飛んだのはあっちの世界じゃ有名でな…… 一気に4分の1は消し飛んだらしい……

この男が後に世界を震撼させ、俺達がこつちに来る理由を造つた張本人…… 人でありながら人でない人…… 全てを超えし闘神…… …… 名前はウェイブっていうんだが……

ス「4分の1かぁ…… うーん……」

「ん？どしたの？」

エ「何だか規模が大きすぎてピンとこなくて……」

「…………む…………確かにそうだな…」

テ「それに自然だけ消し飛んだつてのもちよつと…………そんな魔法がその…………あつちの世界にはあるんですか？」

「うーん…………確か魔法の方は精霊を使ったものだから死滅がどーのこーの、つて姉さんに聞いたような…………規模の方は俺もイマイチわかんないからとりあえず一発でミッドが消える…………とでも覚えとくがいいよ。」

キ「それじゃあ…………もし…………そんなことが起こつたら……………」

全員の脳裏で世界が消える瞬間が浮かぶ…………それも一瞬の出来事…………止めようにも止められない…………そんな力の前では自分達の力など何の意味があるか…………そんなことを考えてしまふのだった…………

「……そうだな……そんな奴がいたんじゃ……世界の二つや二つ……簡単に滅ぶよな……そんなのに挑んだアイツは……やっぱ俺と母さんを守る為に……」

誰に言ってもなく、
綬蛇矢の口から溢れた呟きはそこで途切れ
た……

（何を考えてんだよ俺は……）

アイツは、帰ってこなかった……母さんを置いてさっさと冥界
に行っちゃった……”あの”母さんを一人にしたんだ……そしてア
イツは……

エ「綬蛇矢さん？」

「おわっ！？…ってあれ？」

ス「確かに…そんな人が居たんじゃ絶望的ですけど…でも、何かは出来る筈ですから……」

キ「だから…今は訓練頑張ります！」

テ「……………」

何か違うんだが…まあいいか…それにしてもコイツらは前向きで良いなあ……

テ「……………」

一人…ティアナだけが表情を僅かに曇らせている…が…まあ今は俺の話から進めよう…どうせ後から話す訳だしな…

…続きだが、ここで世界を震撼させる大事件が起きる…人間の勇者グレイが例の塔・スペクトラルタワーに封印されていた兵器を持ち出してある少年に託すんだが…その兵器…天魔剣って代物で、これがまさに最強・最悪の兵器でな…例えるならウェイブがもう一人出来上がる。無論、アレとは雲泥の差があるんだが、ある程度使える奴なら簡単に世界地図を塗り替えられる…そういうものだったんだ…そして託された少年…シフォンは、正義感が強く魔族を憎む心を持ったまさに人間の勇者の鏡、という奴だった…そいつは常日頃こう考えていたらしい…魔族こそが世界の悪だと…ジャネスを討てば世界は平和になると…そんな奴が力を手に入れたんだ…彼は己の師でもあるラーデウイや…仲間他二名と共に兵を募り、魔王軍本拠地であるネウガードに攻めいったんだ…

そして、ジャネスにとっても天魔剣は最悪のものだった…何が恐ろしいか？いくら天魔剣が強力とはいえ、一介の人間が使うのであればジャネスはどうとでもあしらえる…彼は天魔剣という存在そのものを恐れていたんだ…一振りで大地を破壊し、誰が持つても脅威となる魔剣…そしてその力を求め、人間達はお互いで争いを始めるだろう…笑える話さ…今まで必死に人間達の攻撃に耐え、陰ながら人間達の均衡まで調節してきたのに、たった一本

の剣が全部ぶち壊すんだからな……しかも、人間に待っているのはあくまで争いと滅びだ……これを笑わずにいられるか？

キ「そんな……」

テ「でも……今私達がしていることだって結局は……」

エ「……確かにそうかもしれませんが……」

「……世界中の人間がお前らみたいなヤツらだったらいんだがな……」

そしてジャネスは覚悟を決める……天魔剣の膨大な力をも一度完全に封じる為に、自分の命を犠牲にし、その魔力を使って冥界

で封じる事にしたんだ…全てをヒロに託してな…

ヒロはこの時使いに出されていて城外で狩りをしていたんだが、途中で異変に気づき、すぐに城に戻った…しかし、そこで彼女が見たものはジャネスが胸を貫かれる瞬間だった…

そして、大魔王は…人間に討たれたんだ…

テ「…自分の命を使うなんて…」

「俺はこの人をスゲエ尊敬してる…だが同時に軽蔑もしてる…ウチの家系はテメー勝手な奴ばっかだな…」

エ「…？どうしてですか？人間まで助けたのに…」

「言つたる？テメー勝手だつて……人間には何も言わなくせに封印して護つてやったつて？上から目線なんだよ……所詮人間のことなんざ、救うべき対象ではあつてもまるで期待なんかしちやいなかつたんだ……」

そこで今まで空気だったシグナムとシャルルが同時に彼を見るが、すぐに目をそらした……

「話が逸れたな…続きだが…」

ヒロは目の前で父を殺され、忌々しい人間達もプラーナの存在に気付くと直ぐに逃げ出してしまつていた。しかし、ジャネスの魂は依然として天魔剣と共にさまよっている…ここで前にも少し出てきた「ゲートオブヘヴン」が使われるんだ…

この鎌について話す前に……今まで忘れていたんだがジャネスに

は神だった頃から一人娘がいてな、名をプラーナといってジャネスと一緒に地上に降りてきていた。彼女は魔王軍の將軍の筆頭で、強さは神だったわけだし言うまでもない、本来は死神で「ゲート・オブ・ヘヴン」も元々は彼女のものだったんだ。彼女はジャネスを冥界に先導するために共に死んでいるんだが、その鎌はこの時にヒロに受け継がれている…

そして「ゲートオブヘヴン」……その名の通り、これで殺されたものは強制的に冥界に送られる……冥界は天国なのか地獄なのかはわからないが、魂がそこら辺をさまようことは無い……使いこなせるものであれば冥界の門を具現化し、扉を開けられるらしいが……俺には未だ出来ないなあ……

キ「……一生出来ないまままでいてください……」

ス「でも……天魔剣といいコレといい……こんなすごい力を持ったものが、あっちの世界にはゴロゴロあったんですか？」

「いや…こういう…それ自体が魔力を持つ武器を、あつちの世界では総称して「魔剣」と呼んだんだが、数はあんまり無かったらしい。有名所は今の二本と後は聖剣「ラングート」、雌雄の魔剣「ランシユバイク」、神槍「ハーケン・メテオール」に宝刀「昇陽」、といったところか…どれもんでもねえ代物だ…」

テ「……伝説の武器…そんなものがあつたなら…私も……」

ス「ティア？どうかした？」

テ「……いや…何でもないわ……」

ス「そう？ならいいんだけど…ホントに具合悪かったら……」

テ「大丈夫よ…それに…本題はまだ何も聞いていないんだから……」

「……………」ああそうだな……」

そしてヒロは、二人を冥界に送った……

そして、当然崩れる世界の均衡……バランスが崩れるところじやない……世界は激しく混乱した……

かつて魔王の傘下にいた者達は次々に離れ、独自の勢力を作り上げていった……

そして、それに呼応するかのようには、人間達の間でも争いが起こり、急速に軍備が固められていった……

そして、この期に乗じて大陸統一という動きが各国にも現れる…

エルフは森を焼かれ、他の種族も同様に国をおわれ、その怒りは世界に火をつけた……

こうして始まるのさ…この大陸の全てを巻き込む大戦……ネバーランド大戦が……

第十話（後書き）

御読了、お疲れ様でした。今回はスヘクトラルシリーズの世界設定に大体変化の無いところで終わってます。この後の大戦中やその後に関しては全く別ものになりますので、公式ファンの方や受け入れられない方には御目汚しとなってしまうますが、何卒ご容赦下さいm(_____)mこれから過去の話がしばらく続きますがお付き合い頂きたいです。有り難うございました。

第十一話（前書き）

お久し振りですm（――）m更新まで2ヶ月半…待っていた方がいてくだされば嬉しいのですが…しかも内容がオリジナル展開も入ってかなりめんどくさい仕上がりになっています…お読みになる方がどうぞ不快になりませんように…と願わせていただきます…

第十一話

…ネバーランド大戦……数多くの国が滅び、星の数ほど命が失われた…文字通り大陸全土を巻き込んだ戦争……

これを語る前にまず大戦が始まる直前から語っていき……

まず、大魔王が倒れ、傘下の軍団も次々と離散していき、半ば崩壊しかかった魔王軍だったが、君主がヒロとなりジャンスの意志を引き継ぐ新生魔王軍と名を変え再編された。

ここで面白い話があるんだ……この軍の兵は魔族やモンスター（骸骨とかゾンビ）なんだが、將軍は人間がやってたんだ……以前話したが、ジャンスが死ぬ直前にヒロを遠ざけておく為使いに行かせた際に、プラーナが雇った人間の傭兵を付き添わせたんだが…コイツラがヒロやジャンスに共感してくれたらしくてな。周りに信頼出来る者の少ないヒロには、元は金の為とはいえど、体を張って自分を護ってくれた者が居たのは心強かっただろうよ……しかも腕も良から彼ら以上の人材はなく、人望も高かったもんだから將軍として申し分無かった。世捨て人として生きてきたもんだから魔族の連

中とも上手くやってたみたいだしな……

ス「今まで何か極端な人ばかりだったけど……こんな人達もいたんですね。」

「世界にとって理想のような国だったな。」

ここまですぐに魔王軍だ……

次に語っておくのがルネージュ公国……大陸中央よりも東よりの国で、初めの頃は大した軍事力もなく農業や宗教なんかが発達してた和かな所だったんだが、開戦直後、一人の魔族が現れたと同時に急激に血腥くなっていったんだ……

軍備増強……徴兵……城壁増築……その魔族はその国の王……公国だから大公か？まあ面倒だから王にしろといってくれ……の心を巧みに掴んで、国を一気に戦争へと引きずり込んだんだ……

そして、そいつは更なる戦力を求めて禁忌に手を出す……あつちの世界には異界の魂には強大な力が宿ってるって言い伝えがあつてな、奴はそれを利用する為、王と共に異世界から召喚の儀式を行うんだ……

ス「召喚……そういえば、召喚されたものって元々は何処から来るの？」

キ「召喚は元々が物体や生き物呼び寄せ使役する魔法ですからこの世界、或いは別次元の世界に彼らは居て、契約した召喚士の呼び出しに応じて来てもらっています……ですけど……その……誰が最初とか……原理とか……あんまりそういう所は解明されてないみたいで……それに……異世界からなんて聞いたこと無いです……」

ス「……何かよくわかんないこと多いんだね……」

テ「フムフム……そういえば前に鎖とか操ってたわね？あれはどうやってんの？」

キ「あれは物質を呼び寄せこちらで形状を変化、加工しています。」

テ「へえ〜！…器用ねえ」

眼鏡（教官と同じこと言ってるよ、コイツ……やっぱり似てくるもんだねえ……ククッ）

「……シャーリー……」

眼鏡「…何ですか？」

「……………はあ……………じゃあ続けるぞ……」

そして彼らは、異世界から一人の少女を呼び出すことに成功した……力を使い果たした王を犠牲にしてな……

その異世界つてのが……この世界の第97監理外世界「地球」……俺やなのは達の故郷だ……

彼女は伝説通り強大な力を持ち、その国の女王となって人々に崇められる……魔族はその少女に名前をやった……雪のような銀髪と儚さから”リトル・スノー”と……

そして彼は女王を利用し大陸を更なる混乱に引き込んでいく……

この魔族こそが、かつて大魔王ジャネスと争い、敗れた実の息子…
…そう…あの”ジャドウ”だ…

テ「なるほど………これがこの世界の魔力が使える理由………ってこと
ですか？」

「察しが良くて助かるよ……」

ス「？どゆこと？」

テ「最初に言ってたでしょこっちの魔力も使えるって………この世界
の人間が血族に居るってことでしょ………」

ス「な…なるほど…」

「そう…この人がウチの母さんのお母さん……母方のお祖母さんになるわけなんだが……この人の事は後回しで頼む……」

エ「どういことですか？」

「ん……まあ色々とな。」

で、次……イプシロイア……は別にいいか…詳しく知らねーし
ムロマチだな……

ムロマチは大陸の一番東にあった島国で、長いこと周りの国と交易が無かった時代があったせいか、独自の文化が発展した国だった……

面白い事にその文化なんだが…さつきも話に出た97監理外世界…俺達の故郷の大昔と酷似していて、何らかの繋がりがあるように見えるんだが…実際全然無くてなあ…人間ってのは似たような生き方をすると文化まで似るんだな（笑）

まあ話を戻して…ここは国自体は小さく、国力も弱かったんだが住人達は異様に強かったんだ…多分、長い間内戦ばかりしてたからだろうな…

中でも君主の”大蛇丸”はそこから騒がれる勇者なんかよりは遥かに強かった…レベル的かというとジャネスやジャドウと張り合えるくらいだろうな。それもそのはず、コイツの身体の中には”あの”タワーの番人をしていた龍王の魂が宿っていたんだ…ウェイブに倒され、身体を失いはしたが魂だけは蛇丸と共に生きてきたんだな…

そんな訳で…大蛇丸が睨みをきかせれば世界情勢も穏便に事は進みそうだったんだが…この人派手好きな上に戦好きでな…こ

だわりがあるのかあんまり龍の力使わないしさ……しかも酒と女が大好き……四六時中酔っ払ってて美女とみれば声かけて……跡継ぎは大分もめたらしい……

テ「…最ッ低ね……」

キ「?どついうことですか?」

ス「うーん……キャラには……まだちょっと早いかな……」

眼鏡「おやぁエリオ君……君はなんだか知ってるような顔だね……
ククッ……」

エ「…前に^{ゆだや}綬蛇矢さんに色々教えられましたから……」

「俺はその後フェイトに怒られたけどな……」

まあ性格はこんなんだが曲がったことや差別とかが嫌いで魔族にもそんなに悪い感情は持ってなかった…下っ派にも気さくで王…というよりは頼れる兄貴分だったんだな。

とりあえずこの三国が重要だったかな？他にも色々あるんだが大筋とあんまり関係無いか影薄いかだから省かせてくれ……

それでまあ……長くなっただけど開戦だ……

といっても面倒だからかなり簡単にいこう…

当時、大陸中央付近でザーフラクってやつが大陸最強と言われたフラウスター兵団つてのを率いていたんだが……これが一夜の内に壊滅するんだ……犯人はまあ位置的にジャドウだよな？それでもう周りがビビっちゃまって中央はほとんどルネージュ公国軍のものになっちゃったんだ……そりやもうあっさりとな……

ムロマチも東から順に潰して来たもんであつという間に奴らと勢力が隣り合う様になっていた……

そして一度でかい戦があつたんだが……もはやお互い簡単には潰しきれないほどでかくなってたからな……長い睨み合いになったよ……

で、我らが新生魔王軍なんだが……これまた苦戦に次ぐ苦戦でなかなか領土が広がらない……まあ大魔王の娘で実力はあるといっても戦は素人なうえに再編したばっかだったからな……他の奴らも余裕がなくて、なかなか思うように勝ち進めなかったんだが……それでもなんとか地道にだが広げていったんだ……

開戦から何年もしたところか……東にムロマチ、大陸中央にルネー

ジュ公国、北西に新生魔王軍、南西に小国群、という形が出来上がっていたんだが……これがある時急に崩れる……

南西の小国群が片っ端から滅ぼされていったんだ……ある一人の男によって……

小国群とはいっても、一応大陸に名を轟かせていた”白獅子”グリーザ率いる騎士団シリニークや、機械文明が発達し、大量の機械人達を擁するドウム戦闘国家何て強国が存在したんだが皆、どの国も瞬く間に、というか……気が付くと滅ぼされていた……というように歴史から名を消していったんだ。

こんな馬鹿げたことが出来る奴なんてネバーランド広しといえど一人だけだ……

突如として南西で破壊活動始めたウェイブに対して、新生魔王軍も注意を向けざるをえなかった……その隙をジャドウは見逃さない……

少数精鋭でヒロの居る城を急襲した……

虚をつかれたヒロは体勢も整わないまま応戦し、ジャドウに敗れることになるんだ……

……ヒロはなんとか逃れることが出来たが、重傷を負ったうえに在野に下る……

君主を失った新生魔王軍はそこから一気に瓦解……短い歴史からその名を消すことになる……

……そしてジャドウは、ルネージュ公国に見切りをつけ、その場所に新たなる勢力を打ち立てた……

元・ジャネス配下の魔將軍達を蘇らせ、自身を大魔王に置き換えた”魔王軍”を……

ややこしい名前だが魔將軍といい大魔王といい、こっちの方は新生魔王軍と違って正統派だからな……

全てが上手くいっているようなジャドウだったが、ただ一つだけ……大きな誤算……というか……何と言うべきか……うゝむ……甘さかな……甘さがあつた……

奴は、当然リトル・スノーもつれて行くつもりだったんだが……彼女と一緒に来てはくれなかったんだ……奴も強引に連れて行くことも、殺すこともしなかった……

ハッキリとした理由は正直わからん……ただこの頃既に腹の中にウチの母さんがいたらしい……それが理由なのかそれとも別にあつたのか……当人にしかわからないな……

こっからは俺の勝手な思い込みなんだが……彼女は人間だ……彼の望む世界には不要な存在で彼が王となる世界には居てはいけない存在だった……

だから彼女は身を引いた……奴もそれを理解していたから何もしなかった……利用するだけの存在だった憎い筈の人間がいつの間にか大切なものになっていた……何てのは身内最良のメルヘンだろうか……

そして、ルネージュ公国も弱体化し、最早戦争など出来なかった……魔王軍は恐らく表だって攻めてはこないだろうがムロマチはそうはいかない……この機会に必ず仕掛けてくる……

「で、この後どうしたと思う？」

ス「え……ん」と……」

テ「…さつさと降伏したに決まってんでしょ……」

キ「確かにそれなら無事に……」

「甘いなあキヤロ…甘々だ……戦争の後始末がそんな生易しいわけ無いだろ…厳しい占領下での暮らしや敗北感……戦争で失ったものの怒り…ましてや女王は現・魔王の弱み…利用しない手段はないな。」

エ「じ…じゃあ女王は……？」

「ああ……人質として辛い生活に……なるかと思いきや……実際殆ど何もされなかったらしい……国もな」

新「へ……？」

「キヤロみたいに甘々だったんだよ大蛇丸も……或いは興味がなくなっただけかな？」

テ「そんな馬鹿な！？ありえないわ！！」

「まあ普通はそうだよな…だが最初に語ったが奴は曲がったことが嫌いだった…それにムロマチにも武士道というものがあってな…
…上の奴らは下の奴らに人の道から外れることはさせなかったんだ
……」

テ「……信じられない……」

「バカが多かったんじゃないの？損得で動くよりプライドを取った

ってこつたな…」

そんなこんなで世界は三つの勢力に別れたんだが…ウェイブの進行は止まらず、遂には両国と国を挟んで隣り合うまでとなった…

ウェイブの脅威を感じつつもお互いを牽制しあって動けない両軍……

どうしたものかと悩んでいた大蛇丸だったが、そこに一人の魔族が現れた……

それは城を失い、国を追い出された、あの”ヒロ”だった……

あの襲撃の後、深手を負った彼女は部下の一人…サトーに抱えられ、城を落ち延びていた……

この時、ジャドウの捕縛から謎の男が助けに入ったらしい……

ス「な…謎の男…？」

テ「後から、そいつは実は誰々だった…みたいな感じですか？……
ウザッ……」

「ち…違っ！？本当に謎の男なんだよ！一切不明で記録無し！」

テ「じゃあなんで助けたってわかるんですか！？」

「俺もそう聞いたの！まあそんな奴がいた…位でいいよ…謎のまま
だし…続けるぞ……」

頼るべきものを持たない彼女を助ける為、サトーは故郷であるムロマチへと彼女を連れていこうとするんだ……あの国は頭が魔族に（わりと）寛容だ……彼女の能力の高さと利用価値を考えれば、仕官させ再起を計ることも出来るだろう……そう考えていた……

しかし、彼も過酷な逃亡生活で無理がたたり、

ムロマチに着く前にルネージュ公国で捕えられてしまう……

死を覚悟していたサトーだったが、リトル・スノーは何故か二人を保護し匿ってくれた……ムロマチに降伏したときもスノーはずっと、ヒロの存在を隠していたらしい……理由はこれまたわかっていない……

そして、完治したヒロは大蛇丸の前に立った……ってなってるんだが……イマイチ釈然としないよなコレ？

テ「謎の部分が多いですね……特に女王が……」

やっぱり当人じゃないとな……まあいい、続きだが……

彼女はこう進言した……魔王軍と共に攻めろと……

……

…信用出来ねえもんに背中預けらんねえ……ましてや奴らが応じると思うか？

彼の返事に彼女はこう返した……

信用する必要も馴れ合う必要もない……後ろから斬られようが
罠に嵌められようがただ一人の男を殺せればいい……どうなるにせ
よ、アレが生きている限り両国共に滅びは避けられない……それ程
までにウェイブは危険だ……

俺だけじゃサシで勝てねえってのか……？

……一度殺されたお前ならよくわかるだろ？アレとタイマン張
れる奴なんか居やしないよ……それに……戦は派手な方が良いんだろう？

ハッハア！おもしれえ……いいぜ……あの男に借りを返すだけじ
ゃねえ……ついでに奴らも片付ける良い機会じゃねえか……！！
奴らが来ようが来まいが関係ねえ……その戦……俺あ乗った！！

……

とまあ、こんな感じで大蛇丸は腹を決めた……

この時、魔王軍では同じようにスノーが説得に行っていたんだが、向こうも同じような感じだったとさ……ちなみにこの時ちょうどウチの母さんも生まれてたんだが……まだ名前すら決められずにそのまま決戦が始まっちゃうんだよ……

どうしようもないこの大戦もこれで終わりだ……

このジグロード決戦でな……

第十一話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）m大分簡単に説明していききました
が正直…何だコレ？ってのが作者の感想です（涙）この世界は、ス
ペクトラル愛しき邪悪の主人公「シンバ」の現れないIFの世界と
して書いているのですが…ご都合主義や原作レイプだらけで最早…
…しかも世界設定に大分矛盾がでてきて（もし見つけられた方はそ
れとなく報せていただければ幸いです）作者自身大混乱です…こん
な駄文を世に出すのは憚られるかもしれませんがどうか寛大な御処
置を御願ひ致しますm（――）m次話もすぐに挙げる予定ですよろ
しければそちらも。失礼しました。

第十二話（前書き）

第十二話です。独自解釈やオリキャラ、ご都合主義の矛盾だらけで
すがよろしければm（――）m

第十二話

「実は大袈裟に言っではみたものの…正直よくわかんねーんだよなあこの辺の話…」

その言葉と共に新人達は一斉にコケた……

テ「さんざん引っ張ってそれなの……」

ス「生殺しっすか……」

「しょうがねえだろ？知らねえもんは知らねえんだから…ただこの戦いは本当に洒落になんねーもんだったみてーだぜ……」

ス「と言つと？」

「まず結果だけ言っていくと……最後まで立ってたのはヒロだけだ……」

エ「ほ…他の方達は…？」

「全員死んだ……に等しい。」

キ「え…ええエー！？」

「まあある程度過程も入れて説明してくから……まず、魔王軍VSムロマチ・ルネージュ連合VSウェイブ一人というのが当初の予定だったわけだ…が……」

エ「……が？」

「ああ。ムロマチも魔王軍も辿り着いた時には目を疑ったらしい……
…何せ目の前に大軍がいるんだからな」

…何でもウェイブはドウム戦闘国家の機人兵を丸ごと引っ張ってきたきたらしくてな…勿論そいつら皆死んでるんだが……それこそ一体一体に糸でもついてるかのように手足を動かしてたらしい……

ス「で…でもなんでそんなこと？それにそんなのだったらてんで弱いんじゃない？」

「ドウム兵は少し特殊でな…一人一人に自爆用の爆弾がついてたそうだ…」

テ「…え…じゃあ…！？」

「どう使ったかまでは知らねーが…多分オマエ達の想像通りだよ…」

キ「ひどい…」

エ「……」

キ「その人…本当に人間のこと何とも思ってたんだですね……」

「…奴にはもう人としての心なんか無かったんだろうよ…気分れに
玩具おもちゃでも見つけた…位のもんだっただろ…」

「奴はひたすら、強い輝きを放つ魂を求めてたって話だ…それがどんな意味かは知らねーが、そのおかげでそこは地獄になった……」

阿鼻叫喚の地獄絵図…ついてきてくれた兵達は、一部の武将を除いてその殆どが無念の最後を迎えた…ただ…救いがあるとすれば主力の4人は皆無事だった…何故かって？皆が彼女らの盾になって死んだからだよ…本望だったかは知らないが、少なくとも後悔は無かったと思いたいな…

sonでまあ他の奴等は戦闘不能になったが……1対4の最終決戦が始まるわけだ…

新「……………（ゴクリ）」

…が、まあ大蛇丸という死者はだが、ウェイブはなんとか大地に封印されました…と…その後…

新「いやいやいやいや！？ちょっと待てよ！？簡単すぎる！？」

「…ん…？おかしかったか？」

テ「おかしいものにも…いくらなんでも適当過ぎよ！？ふざけてんの！？！！」

「え…ああ…そんなこと言われても知らねーんだから仕方ねえだろ…」

ス「何でそんな大事なところ聞いておかないんですか！？それに結果知ってんならある程度説明出来んでしょ！？」

「い…いや、だって紅葉くれはも知らねーって言ってたし…説明すんのめんどくせーし…」

エ「ハア！？前フリばっか長くて肝心の中身がコレかよ！？何でだよ！？納得いかねーぞー！？」

「お…落ち着けーエリオ…今のお前を見たらフェイトが泣くぞー…」

キ「フツ…そんなのだからあの三人にだって何も言えてないままのヘタレ友達以上恋人未満（幼馴染み補正有りで）なんですよー！！」

「んなこと関係ねえだろ！！…おまえらに冗談の一言で流される男の哀愁の一体何がわかるってんだよ！？チクシヨオオオ！！…」

キヤロの痛烈な言葉に綬蛇矢もキレて、しばしの間何とも不毛な乱闘が始まった…

………

「あゝ…ゴホッ！大変お見苦しい場面をお見せして……っておまえらそんなに睨むな！ちゃんと調べとくから！……な？…一応さっきの補足説明もしてやるから……」

見た目も精神こころもボロボロになった馬鹿がそこにはいた……

テ「当ッ・然です……！」

新「そっだそっだ！！」

新人達にボコボコにされた情けない魔王は渋々語りだす……

「顛末はこうだ……ウェイブ一人にヒロ達数名で暴行↓予想外の反撃にパーティーほぼ壊滅↓リトルスノーの自己犠牲回復魔法により

三人はほぼ完全復活、リトルスノー戦闘不能（瀕死）↓大蛇丸がウエイブに特攻、帰らぬ人になる↓その隙についてウエイブ倒され大地に封印↓ジャドウ、ヒロと最終決戦↓ヒロ、辛くも勝利…ジャドウ、リトルスノーと共に大地に封印された↓残ったヒロ世界再生を誓う……って感じた。」

テ「もうつつこむ気も起きない……」

ス「…最終決戦の内容は？」

「……すまん」

エ「うがあああー!!」

「ぐひぐひ…」

キ「封印…ですか？」

「ああ……二人とも封印のタイミングは違うがな。肉体は滅ぼせたが魂は完全に消せなかった…ってのが理由らしい。」

ス「え〜っと……どゆことですか？」

頭を掻きながら苦笑いを浮かべるスバルに、
き締め淡々と語りだす…
綬蛇^{ゆたや}矢は急に顔を引

「魂というものは大体死んだときにそれまで培った記憶や力を失う…要するに肉体に残していくことで次の転生を待てるんだが、ウエイブやジャドウはその魂にすら力や記憶が宿っていた…まあこいつらは当然なのかもな…ウエイブは世界の理を超越してるし、ジャドウもまた意志の塊…魂から肉体が生まれたから不思議はないな…問題はその魂が冥界にいつても現世に止まったとしても邪霊になっちまうってことだ…下手すると魂だけで肉体を復活させる危険性がある」

ス「????」

説明はしたもののスバルは今一得心がいかないらしい……

「ジャネスの時は死神でもあったプラーナが付き添うことで大丈夫だった……今回はその役をスノーがやった。」

テ「でも、彼女にそんなことが出来たんですか?……それとも……だ

から封印なんですか？」

「さてな……おそらくは後者だが……色々と疑問が残るよ……」

ス「ちゃんと聞いておかないから……」

「しつげえな……ちゃんと聞いとくから……」

というわけでヒロが残ったわけだが……国も持たない姫さんがいきなり天下統一……っても誰も納得しない……そうだろ？そこに現れたのが大蛇丸の右腕だった男、蓮撃……ムロマチの実質2……大蛇丸はこういう事態を予見してたんだろうな……自分の後釜にヒロを頼んでおいたんだ……なんでも蓮撃と大蛇丸は幼少の頃からの付き合いだったとか……そんな男の最後の頼みを聞かないわけにはいかなかったんだろう

う…共に闘った者達は魔族も人間も関係なくヒロを支持し、双方を受け入れると言ってくれた…同じ釜の飯効果だな…そしてヒロは、反対する者を抑えムロマチと魔王軍の実権を握り大陸を統一した…とまあこうなるんだが……

テ「何かご都合主義ねえ…」

「まあ実際はもっと複雑だったんだろうけどな」

ス「と…とりあえずこれで平和になったんですね？」

「いや、ならないよ？」

ス「え…？」

「これだけ大規模な戦争の後だ…戦後は混乱を極めただろう…ましてや人間と魔族の確執はまるで消えてない…他人に仲良くしろと言われたくらいで親の仇共と仲良く出来る奴がいたら、そいつは聖人君子を通り越してぶっ壊れてるとしか思えん。」

ス「ううう…」

「貧困問題、外交問題、人種差別に賊の鎮圧、その他いっぱいのこと…そりゃ忙しかつたろうよ…それでヒロは、国を人間と魔族の代表者に譲り、ある一つの組織を生み出した…」

…その組織はあらゆるものに属さず、独自の思想で国家に介入し、必要とあれば時には武力をもつて平定する…まあ要するにヒロの考えで自由に動く、問題解決に奔走する便利屋？…何か違うんだがまあいいや…その名は「緋乃神」…この名前は、ヒロが民衆からそう讃えられていたからなんだと…緋乃神〃火之神だとさ…

エ「そういえば綾蛇矢さんも…」

「ああ、まあ訳あつて字は違うけどな。」

この組織はヒロの行動を自由にするためと世界を監視するため…
つてのが目的だった…おかげでヒロは政治を丸投げして問題解決に走り回れたらしい…ただ普通に考えてもこれっておかしいよな？結局はヒロが気にいらなけりゃ口出しに行くんだから…見てくれもま

んま独裁だし…まあそんなでも世界が回ったのは一重に彼女の力リ
スマなんだろう？

組織の最初の構成員は主に世界各地から出てきた大蛇丸の息子（
笑）だったらしい…理由は単純に強くて賢いやつが多くいたから…
そりやそうだよな…単独で国に難癖つけんだ、弱い奴や馬鹿なんか
いたら困る…だから流石に数も少なくて…その分はヒロがカバーし
てたんだろう…そしてこの頃、ウチの親父も産まれた…

名前は俺と同じ「ゆたや綬蛇矢」…名付け方はムロマチ式に則ったらし
い…親父は双子で兄貴に「くれは紅葉」って人が居る。俺はその叔父に育
てられたんだが…しかしなぜこんな忙しい時期にそんなことやっ
てたんだろうなヒロも？ここには甚だ疑問が残る…

テ「で、相手は？」

「は？」

ス「難しい政治の話とか正直どうでもいいんですよ！…ヒロ様の御相手は？」

「え？……ああ……」

キ「まさか……」

「……スマン……」

エ「ストラーダァー！！」

その言葉と同時に綬蛇矢の鼻先にエリオの槍型デバイス「ストラ
ーダ」が突きつけられた…目は血走り殺気すら感じる……

「わっ！？ちょい待て！？これはホントにわかんなかったんだよ！
」

テ「何でよ！？アンタのお祖父ちゃんでしょうが！？」

「いやいや！？こればかりはどうしても口を割ってくれなくて
……とりあえずその物騒なものをしまってくださいないか？」

エ「……………」

黙ったままではあったがエリオも引いてくれてホッと一息……する間も無く全員の視線が彼を襲った……シグナムとシャマルだけがどっから持ってきたコーヒ―を飲んで……我関せず……ってか……

「流石にこれは気になったから俺も聞いたんだよ。だけど叔父も叔母も知らないの一点張りでな……過去の文献なんかも漁っちゃみたんだが何も出てこなかったし……」

ス「じゃあ、完全に謎……ってことですか？」

（まああの二人は何か知ってるみたいだったけど……何か事情があるんだろうし……）

「ま、そういうこと……この事は諦めてくれ。」

（何より…紅葉と俺全然似てねーしな…）

キ「残念だけど仕方ないですね…」

「まあ他人家ひとやの事だ、あんま突っ込まないでくれ…段々飽きてきたからこっからは駆け足な。」

親父達はヒロの息子として散々鍛えられたらしいな…話せるようになる頃には既に「教育」は始まってたつてよ…その甲斐あってか身長が今の俺くらい（170位）になる頃には組織でも五本の指に入るほどだったとか…で、そんなこんなで更に20年位たつて世界もようやく波風が表面化しなくなった頃、野郎は母さ…ゴホン…お袋と出逢うんだ……

ス「ちょっといいですか？」

「はい、ナカジマ君？」

ス「このとき食堂長のお父さんって何歳だったんですか？」

「んゝ…詳しくは知らんが3ゝ40ってところうけど…ああ…割り
りと年食ってからだったと言いたいわけだな？」

ス「あ…いや別にそんなつもりは…」

「いやいや…普通の人間にしてみれば当然の疑問だな…この理由と
して、魔族は寿命が長い。産まれてから成人になるまでの速度は人
間より多少早いくらいなんだが、そこから先が圧倒的に長くてな…
生きる奴なら数千年単位だ。たかが40じゃまだまだ…ってことだ
な…」

ス「はあゝ…すごいんですね…あれ…でもそれじゃあ食堂長も…？」

「…ああ…俺は大丈夫だよ人間だし。」

ス「そうなんですか？」

「ああ、正真正銘…歴とした人間だよ…」

（今のところは、な…）

ス「あゝ…そう…なんですか…」

それを聞いたスバルはどこか残念な顔をしている。もしかしたら

悠久の時を生きるかもしれない自分にとっての仲間ではなかったと
いうことが、彼女の表情に陰を落としていた…

エ（ま、まさか……ってんな訳ない…よね？…）

キ（でも何かスバルさん凄くがっかりしてるよ？）

テ（まーた何か鬱ってんわねあの子…）

事情を知るティアナはいざ知らず、スバルの身体のことなど知らない二人は、このなんか微妙な空気にもしやこれはフラグか！などと勘違いして綬蛇矢をみるが当の本人はどこか上の空…彼も周りの視線に気付いてやっと話を再開しただのだが何故かその表情は暗かった…

ジャドウとリトル・スノーの遺児であるお袋は産まれてからずっとルネージュ公国の女王として生きてきたんだが…って両親のなれそめなんざ別に適当でいいわな…まあある時二人は出会ったわけで…親父が一方的に一目惚れで…40年間かわされ続けて…やっとゴールインするわけなんだが…まあ幸せなんて長くは続かなくてな…世界はそこで再び危機に陥り…アイツは母さんを置いて死に行っ
たよ…

テ「え…死にに…って…」

「言葉通りだよ…今から説明する…」

ス「は…はい…」

エ「…綾蛇矢さん？」

「……………ん？…どした？」

キ「…大丈夫ですか？」

「…ああ…悪い悪い…えーと…何処までいったっけ？ああ死に行
った…ってとこだったな…」

エ「（キャロ……………）」

キ「（うん……………こんな綾蛇矢さん…初めて見る……………）」

自分達の知らない顔に戸惑う二人を尻目に綾蛇矢は話を続けてい
く…その顔には、今までとは違う…何処か黒い感情が見え隠れして
いた……………

あの決戦から100年…世界は安定し、形だけでも平和を築いていた…そんな世界に奴は…”闘神”は再び現れたんだ…

100年…数多くの犠牲の上に為された封印も、奴の前にはその程度の枷にしかならなかった…むしろ100年も保ったことを誇っても良いだろう…いずれにせよ…闘神”ウェイブ”は蘇った…蘇った奴は本能のままに行動したよ…魂の最後の輝きを求めて世界の破壊を、な…

奴は圧倒的だった…平和ボケした諸国は言うまでもなく…数も増え、世界最強となっていた”緋乃神”達もことごとく蹴散らされていた…

親父達も戦いを挑んだがその数は減っていく一方でまるで歯が立たない…そこで、この絶望的状况に1つの打開策が打ち出された…

…それは封印された忌まわしき兵器…”天魔剣”の解放…もはやそんなものにまで頼らなければならぬほど皆追い詰められていた…

概要はこうだ…ゲートオブヘヴンで冥界への扉を開き、天魔剣の封印を解いてくる…残りは時間稼ぎ…っていう至極単純なものだ…が…冥界にいったジャネスを説得、場合によっちゃ力ずくで持つてこなきゃならない…親父はゲートオブヘヴン（ヒロから受け継いだ）を使用する以上動けず、お袋は身重…ってことでヒロともう一人…大蛇丸の息子の一人で確か…壬生…だったかな？が取りに行くことになって、叔父とその他が足止めとして特攻していった…

足止め班は正直言ってかなり悲惨だった…周りの援護を得て、どれだけ叔父が必殺の一撃を叩き込んでも即座に再生して何人か殺された…ウェイブの力の前では防御魔法なんか意味を成さない上に奴にとつて魂は餌だ…喰うたびに回復し、尽きることのない魔力…悪循環…それでも彼らは闘わなきゃならない…なぜなら自分達が戦っていなければその瞬間から国が滅んでいくからだ…産まれた国や故郷なんて関係ない…大陸の守人として生きてきた彼らにとって、国は我が子であり、そこで暮らす人々はその子の意思と同じ…退くわけにはいかなかった…

そして皆が倒れ、戦えるのは叔父ただ一人となり、残された力を振り絞って最後の抵抗を試みようとした所であった奴らは帰ってきたんだと…その手に天魔剣を携えてな…

そしてヒロの手によって振るわれた天魔剣はウェイブの力を弱体化させる…これは、ウェイブの力は主に精霊に働き掛けるものであり、それを同種の力を持つ天魔剣で相殺し続けているからだ…しかしそこまで…天魔剣とヒロの力を持つてしても上回ることは出来ない…しかも…ヒロとウェイブでは力の出力は同じでも絶対量が違う…状態は長くは持たないだろう…そして親父と壬生は覚悟を決めた…紅葉を置いて…な…

力が封じられているといっても目の前にいるのは紛れもなく最強…それも全くの手加減無しだ…100年前とは違う……しかも二人だけ……それでも立ち向かって行っただ…己の命を懸けて…

テ「じゃあ…その二人は…」

「親父も壬生も帰ってこなかったよ……代わりに巨大な封印式とゲートオブヘヴンが残されてたってよ……」

エ「自分の命を懸けて……」

キ「凄……い……」

ス「確かにお父さんは死に行つたのかも知れませんが……なん
でそんな言い方……」

「実はもう一つあったんだよ……助かる方法……」

新「え……?」

「その前に……この後の世界……どうなったと思う？」

ス「え……？……それは……」

エ「混乱はあるかも知れないけど平和になったんじゃないんですか？」

「ああ……なったよ……とりあえず平和になった……迅速に……要らないものを切り捨ててな……」

キ「要らないもの……？」

「”緋乃神”だよ……」

テ」……………！……………まさか……」

「……世界は今回の一件を全て緋乃神の失態として扱った……緋乃神への不平・不満や嫉妬や領土拡大への野心……今まで抑えられてきたものの全てが爆発したんだ……そして感情は憎しみ……殺意に変わり……弾圧……迫害……虐殺が始まる……」

奴らは迅速なうえに狡猾だった……先の一件からまだ傷も癒えないうちに攻め込んできた……恐らく、元々計画していたことだったんだろう。世界の危機に考えていたことが……世界を救ったもの達をどうやって殺すか……とはな……ロクな抵抗も出来ずに殺られていったつてよ……

本拠地が壊滅しても逃げ延びれた奴らもいたよ……だが、そんな奴らに待っていたものは関わったもの達への制裁……自分に関わったというだけで謂れの無い罰を受ける……家族も親戚も徹底的に迫害された……同じ土地で産まれたというだけで差別の対象となった……そして皆……緋乃神だったものを怨んで死んでいく……自分達を守った……我が子らの意思”はそんな彼らを嘲笑ったんだ……

そんな中…ヒロと叔父達はルネージュ公国を目指していた…あの国は元々が緋乃神に縁の深い地である上に母さんが居る…その時の世界にとつては最も目障りなものとなっていたんだよ…ムロマチは…決戦直後のクーデターによつて最早違う国になってしまっていたんだ…だから、叔父らにとつてはここが最後の安寧の地でもあったんだ…

この時…生き残っていたのは4人…ヒロ、紅葉に魔族の魔導師…エイミーと大蛇丸の子孫で魔導戦士だった弥炉^{みろく}狗だけだった…

…この二人は、親父達とは本当の兄弟のように過ごしてきた人達でな…年こそ若いものの”あの”闘神と戦つて生き残れた実力者でもあった…

そんな屈強な4人でさえも…決戦での傷を負つたまま、口々に休養もとれずにいたためか既に限界が近かつた…それでも休まず走り続けたのは…自分達にとって大切な”家族達”の無事を一刻も早く確認したかつたからだ…

.....

そんな彼らをルネージュの民は”熱く”迎えてくれた。街は花が咲き誇ったように”赤く”彩られ、夜だというのに”渴飢”^{かつき}は絶えず、人々は”喚声”を挙げながら踊っている。ある者は全身に”真つ赤な花”を纏いながら抱擁を求めてくる……

そんな人々をかわしながら、4人は城へと駆け込んだ。城の中では派手に”Party”が行われていて、もう50も近い親衛隊隊長のバグバット三世が一番ハッスルしてたつてよ。こっちを見るなり駆け寄ってきて姫のエスコートを頼むんだ。その後すぐに”つぶれて”寝ちやっただけだね……

昔、紅葉が俺に話した時のを再現してみたんだがちゃんと通じたか？あの時の叔父の気持ちが今になって少しだけわかる気がする……
…こんな子供にはわからせないな…

………

母さんは優しい人だったと思う…少なくとも俺の前では常に明るくて優しかった…子供の頃は何時だって側に居てくれて…いつも笑顔で、暗さなんて欠片も無くて……料理は下手だったけど、手伝いながら一緒に作るのが好きだった……半分魔族だったわけだが、国民からは慕われていたという話だし、部下達も必死で護ってくれたんだ…王様としてもちゃんとやってたんだろ……

母さんは部下の人達や民の有り様を聞くと、哀しげに顔を伏せ唇を噛んで耐えていたらしい……今の状況や残った緋乃神達のことを聞いても決して泣かなかったという……唯一、親父が死んだと聞か

されてようやく一筋だけ涙をこぼしたってさ……

…母さんはとても強かった…今までも何度か、緋乃神として戦場に立ったことも知ってた…自分の危険も省みずに味方を助けに行くもんだからしょっちゅう親父を泣かせてた…敵も助けて裏切られることもあつたが大抵は感謝されて一緒に泣いたってよ…人が死んだときは皆が泣いているなかでただ一人……周りを励まして誰も居なくなつてから泣いたとき…嬉しいことがあるとわんわん泣いてた……そのくせ…本当に辛い時は絶対に泣かなかった…ウチの母さんはそんな人だったよ……

…だから俺は……この話を聞いたとき、何だかすごく謝りたくなつた…

自分を慕う民を…

信頼してくれる臣下を…

自分の育った国を…

そして…かけがえのない友と自分を愛してくれた男を………

…母さんは護りたかっただろうよ…

………

そして無事再会した5人だったが、事態は改善される訳もなく追っ手は着々と迫っていた……

満足に動けない母さんを連れては逃げきれない…ましてや…燃える城内では隠れることも籠城することも出来ず、まさに八方塞がりだった…

そしてヒロはある賭けに出たんだ……

それは…ゲートオブヘヴンの能力…”冥界への扉を開く”と、異世界からの召喚の技術を応用して、”こちら側”から直接次元を繋げる…というものだった…

当然皆反対した…安全性もわからない上に自分達だけ逃げるのか…と…

だが皆わかっていた…相変わらず怒声は響くが剣戟や爆発音は聞こえなくなっていた……足音は徐々に近付いて来ている…

叔父は尋ねた…絶対安全なのかと……

ヒロは答えた…私の息子が死ぬ前に教えてくれたと…

……ガッ……

その瞬間…叔父は二人を気絶させ、そして母さんに向き直った…

母さんは何も言わなかった…ただずっと俯いていたらしい…

…そしてヒロは”扉”を開いた…

……

次に気がついたとき、それはどこかの森の中だったか…景色は大きく変わらなと思った…ただそこに流れる空気はまるで違うということが…自分達は全く知らないところに来てしまったのだと自覚させた…

ヒロはその場には居なかった…自分だけ残ったのだろう…地面に突き刺さったゲートオブヘヴンがそれを語っていた…

辺りを静寂が支配していたのも束の間…”彼ら”はすぐにやって来た…

我らが”時空管理局”が異変を嗅ぎ付けて、な…

叔父達は彼らの気配を敏感に感じとると、すぐに自分達の武器を”倉庫”に隠し投降の意思を示す(ただし、いつでも殺れるように油断はなくな…)やって来た管理局員は善良だったそう…騎士が二人と魔導師が一人…何れも年若い者達だったそう…

…そこから先は予想通り…管理局での質問、尋問攻めだったらしいが対応は良かったらしい…まあ担当が”あの”グレアム提督だったみたいだしな……

そして叔父達は、暮らしと保護の保証…という名目で管理局入りし、それからしばらくして俺が産まれた…

………

「親父はこっちに来る方法を知ってた…なのに何で使わなかったんだ？上手く使えば奴を別の場所…例えば誰も、何もいない世界にだって閉じ込めることも出来たかもしれないのに…」

テ「それは…」

ス「何か理由があつたんじゃないんですか？この方法だつて賭けだつたわけですし……………」

「そうだな…大体行き着く先つてのはそうなるよな…でもな…ヒロ以外誰も知らなかつたつてことは他の誰にも説明してないつてことじゃないのか？…何も知らない緋乃神達が戦つて死んだんだぞ？それが出来なくなつたつて何か別の方法にもなつたんじゃないのか？！……………いや…」

そこで俺は黙ってしまった…

（違つたろ…）

…ああ、そうだな…違う

エ「ゆ…綬蛇矢さん!？」

急に黙ってしまった為、エリオが心配そうに声をかけてくれるが、今の俺には返事をする事は出来ない…

(俺が本当に言いたいののはこんなことじゃないだろ…)

キ「どうしたんですか?…」

キヤロまでが不安げな表情をしている…よく見たら新人達は全員似たような顔だった…

「……俺は……」

そして”俺”は……出かった言葉を呑み込んだ…

「……ハア……悪い……ちょっと休憩……外行ってくんわ……」

そういつて逃げだすんだ……自分の一番醜い部分を晒したくないから……

……

綬蛇矢が去った後、部屋では新人達が一斉にため息を吐いていた…

ス「何か凄い話だね…今一想像…追い付かないや…」

エ「自分達の知らない世界…思いもよらない世界…」

テ「まだ半分よ…本題は何も始まっていないし…」

キ「今度は…綬蛇矢さんとなのはさんやフェイトさん達のこと…です
すね…」

テ「……あの…シャル先生？」

シャ「え…私！？……何かしら？」

急にふられたものでシャルは急いで身なりを整える…どうやら完全に油断していたらしく、着崩れ等が直りきっていないのは可愛嬌。

テ「今の話で魂や冥界の話や死者が生き返るといっものが出ましたけど…でもそんなことが本当にあるんでしょうか…？」

シャ「…うーん…そうね…私も見たことは無いしハッキリとは言えないのだけど…冥界や魂は本当に実在するのだと思う…でなければ説明のつかない場所が今の話にはあるわ。作り話としても夢も希望もないしね……だけど死者が生き返る…これだけは絶対に無いわ…」

テ「何ですか？今の話では魂だけで復活したり…」

シャ「それは死んではない…」魂だけで生きていられる”からよ…それに死者が動いたとしても生者には見れない…仮に魂が違って記憶や容姿、挙動も思考も…何もかも再現したとしたら、確かにその人は復活したと言えるのかも知れない……だけど、その事を知る人間…”一度心の中でその人を死なせてしまった人間”は…最早その人を生者としては見れない…心のどこかで常に違いを探してしまふのよ…」

テ「そう…ですね…」

（私の認識では…既に兄さんは亡くなっている…例え生き返ってくれたとしても…もう私には、兄さんは生きているとは思えないのね……）

………

夜風が気持ち良い…柄にもないことを喋っていたせいか、熱くなつた体を程よく冷ましてくれる…

…あの時感じた申し訳無さ…母さんは俺一人護るために全部を捨てた…

俺が”そこ”にいなけりや母さんは戦えただろう…

民を、臣下を、国を、友を、親父を…助けに行くことだって出来ただろう…

護りきれるかなんか問題じゃない…ただ護りたかったんだ…何も出来なかったのは全部俺と親父のせいだ……

母さんは…全てを捨てても俺を優先してくれた…その事が俺には嬉しくて…そして…どうしようもなく悲しかった…

なぜ親父はそうしたのか…そんなのは俺にはわからない…ただ確かなこと…あのクソ野郎は母さんを置いて一人で死んじまった…それだけ変えようもない真実…ってことだ……

(ざまあねえな……)

ポケットから”ゴロ”を一本取りだし火を着ける……クセのない煙を思い切り吸い込むと気が遠くなり、やがて静かに吐き出した……辺りには白い煙が漂う……

「どうしようもねえな俺は……マザコンな上にファザコンとは……フ○ミコンか(笑)……?」

下らないジョークに一人で笑う……そのさまは明らかに怪しい……が、今の彼からは寧ろ哀れみすら感じられた……その様は、まるで迷子の子供がしきりに自分を鼓舞しているかのような……そんな寂しさと滑稽さが同居していた……

(なあ親父……世界なんてどうなってもよかったから……なんで母さ

んと逃げてくれなかったんだよ……）

彼の本当の想いは白煙と共に夜風にかき消され、そして消え失せていった……

第十二話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）mダラダラ書いたグダグダです…
（涙）個人的に長文になってしまったので誤字脱字多いかもしれま
せん（汗）はしょった部分は外伝的な書き方が出来れば良いと思っ
ています。今回の件で主人公が極度のフ○ミコン（ファミリコン
プレックス）ということは伝わって頂けたでしょうか？（笑）魂に
ついては色々思考してはみたものの、上手くかけたかと言われると
正直微妙感が否めません（汗）次回は外伝を予定していますがその
後は無印、Asと書いていく予定です。が更新速度が……何とか頑
張っていききたいと思っています。では、失礼しましたm（――）m

第十三話（前書き）

十三話で外伝です。大分好き勝手書きましたのでお見苦しい点などあると思いますが何卒御容赦下さいm（――）m後、（作者的に）今回割りと長めです。

第十三話

拝啓、騎士カリム及びシスターシャツハ…如何お過ごしでしょうか？御壮健であらせられるでしょうか？お二方と最後にお会いしたのはもう一日前のことですが、今でも昨日の事のように思い出すことが出来るのは、一重に、お二方の人柄と精神に依ることだと思います。

さて、今私は管理外世界第175番「イククスperl」に来ています。

ここはまさに辺境を絵に描いたような世界で、見渡す限りジャングルなのですが、その一瞬一瞬がとても目まぐるしいです。

実は先程、現地の住人と触れあう機会がありました！私が歩いていると、複数の住人がこちらに走り寄ってくるのです。私は驚きましたが、彼らに笑顔で応じることにしました。すると彼らも腕を振り回して歓迎してくれたのです！皆口々に

「ダーイ！マサクウル！コ・ロ・セ！ジェノサイド！ニイ・イ・チンスラ……！！」

と叫んでいました。きっとこの世界での挨拶なのでしょう。惜しむらくは、先を急ぐため足早に去ってしまったので、あまり触れあうことが出来なかったことです。今では少し後悔しています。

他にも、「ヤーンコッコ」という怪鳥に追いかけられたり、目の前でそいつが「レオリウス」という馬鹿デカイ竜に喰われたりと、驚きの連続です。あ、今…目が合いました（笑）

それでは、もう少ししたら帰りますのでお土産、楽しみに待っていてください。騎士　ゼオン・グランガイツより

PS、ウチのグータラマスターに正義の鉄槌を！切に！切にお願い致します…

ゼ「これじゃ思惑通りじゃないか……チクショウ！リシャル様のバカヤロオオオツ！！」

走る男とデカイ竜は、何とも迷惑な騒音を撒き散らし、樹海を蹴散らしながら盛大に”鬼ごっこ”を始めるのだった……

……

ゼ「遺跡調査……ですか？」

？「…ふわあ…あ……ああ、ちょっと気になる報告があつてな……
というわけで行ってこい。」

ここは聖王教会第一支部…その一室で、少年は1つ大あくびをした……その少年の目の前の男…ゼオン・グランガイツはその姿に思わず溜め息をついてしまう。今更慣れた事だったが、少年の余りのだらしなさに呆れてしまっていたからだ……更に…

ぜ「…私は現在休暇を頂いているのですが…」

…彼は日頃の激務の疲れを癒すべく、短いながらも今日から休暇に入っていたのだ……ただでさえ休みの少ない彼にとって休暇は夢のようなもの…誰にも邪魔されたくはないだろう。

まあ、とは言っても特にすることもなく、今日の予定はのんびり朝寝坊でもして、その後六課にでも暇潰しに行くか…程度の寂しいものだったか…（ちなみに現在AM4時50分……朝寝坊にしては早すぎる…）

？「当然知っているとも。何せ私が与えたものだしな（エッヘン）………って……なんでそんな不満そうな顔をする？………今回も良いところだと思うぞ？大丈夫！旅行みたいなものだ！」

その言葉に、彼はまた大きな溜め息をついた。目の前の少年は何故コイツはこんな顔をするんだ…？というように顔をしかめているが、そこに意地の悪さや悪意は無い。

彼は少年に悪意がないのは重々わかつている…ただその理不尽な命令に嫌気がさしているのだ…この”良いところツアー”…前回は眺めの良いところ…ということとで山脈の天辺に…前々回は美しい幻想の世界…ということとで永久凍土に行かされている…今度もまたロクなものではないのは確かだろう…

ゼ「…ハア…それで…今度はどこなんですかりシャルル様？」

自分のことだというのに何とも投げやり気味に目の前の少年…リシャルル・バーンシュタインに問うゼオン。その心の内を知ってか知らずか…何れにせよリシャルルは無邪気に受け答えしていた。

リ「うむ…今回は空気が旨くて緑豊かで鳥が囀るところだ。」

ぜ」「……その鳥はどんな風に鳴くんですかね？」

リ「何でも聞いた話だと「ケーツ！」とか「ギョエーツ！」っていうらしいぞ。変わってるな。」

…それを囀ずりと呼ぶのかこの方は…

リ「中には火を吐くヤツもいるらしいぞ。出来たら捕まえて来てくれ。ペットにしたいから！」

…それはもう鳥じゃないだろ……

？「現地の民は危険らしいぞ。魔法文明はあるそうだが意思の疎通が難しい上に短気なんだそうだ…問答無用で追いかけてくる。」

そこで彼は三度目の溜め息……頭の中でマツシブな男達に追いかけられる自分を想像して泣きたくなつた……もはや自分の運命と諦めよう……

というわけで、彼の行き先は危険な原住民と火を吐く怪鳥が潜むジャングルとなつたのだつた……

……

再びジャングル内

ぜ「……暑いなあ……ジメジメしてるし走りにくい……それにしても
凄いな……」

走りながら、ゼオンはうんざりしたように首を振る…しかし、それは暑さと湿度にであり後ろを走る物のことでは無い。振り向かずともわかる…先程からずっと雄叫びをあげ、ズンズンと響く足音。もう30分にもなるが、あれからずっとついてきているのだ…

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！」

一方の飛竜は困惑していた…何故自分は追いつけないのか、と…

この竜にも脳はある…記憶もするし自分の能力とて把握していた。確かに飛竜である自分は、飛べない同族に比べれば足は遅いだろう…だがそれはあくまでも同族…しかも自分とサイズを同じくするものだけだ。ならば…何故自分は、目の前の小さきモノに食らいつけない？コイツらに似た者はもう何百と食らってきた…なれば…コイツとてそうなるのは必然な筈…

だが…現にこの小さきモノは未だに走り続けていた…何故だ！

飛竜の雄叫びが一層強まる。この現状に苛立ち、遂に激昂したようだ…涎を乱れ飛ばし、周囲の樹木を捲き込みながら目の前の獲物になんとか食らいつこうと必死になっている…

「まだ速くなるの？…良いね…そうこないと…！」

この状況でも、ゼオンは心底楽しんでた…遊び心で相手してはみたものの、相手の底なしの体力と執念に正直脱帽していたのだ…追い立てられて尚、どんどんテンションは上がっていった…

ぜ（しかし…流石にこのままじゃ余裕無くなってきたね…どうするか…ん？…）

その時、彼の視界にあるものが飛び込んできた…

ぜ（あれは…）

常人には一瞬だろう…しかし彼の目はしっかりと捕らえていた…
右手に見えた奇妙な石造りの建物…恐らく自分の目的地を…

ぜ（残念だけどここまでか……）

そう思った瞬間、彼は右に跳んだ……

飛竜の目にもその姿は見えていた…いくら猛スピードで突っ走っている最中に高速で脇に跳ばれたとはいえ、影くらいは流石に見える…だがその後が良くない…

急ブレーキ…この巨体では急な方向転換など簡単にはいかない…
なんとか踏ん張って身体ごと向きを変えようと頑張るが慣性の法則
でどんどん身体は滑っていく…ただ、滑りながらも見失わないよう
顔だけは彼が跳んだ方向に向けようとした…そこに…

ぜ「お疲れ様」

という声と共に強烈な”ただの蹴り”が彼の頬に見舞われた…

ドバグオツ！！！！

「…ガッ！？……ゲアッ…」

身体こそそのままだったが振り向きざま…しかもカウンター気味
に決まった蹴りは首が千切れるのではというほど派手に伸びきらせ、
巨竜の意識を一瞬で吹き飛ばした…

ぜ「…ふう…上手くいった…かな…？」

着地して一言…何事も無かったようにゼオンは身なりを正して巨竜を見やる…動かないが死んだわけではない、恐らく頭の上ではひよこがピヨピヨ言ってるのだろう…しばらくすれば目を醒ましそ
うだ…

その状態に彼は安堵し、そして飛竜の傍まで近付いていくと…

「悪い…俺の反則負けだな…」

と、一言だけそう残し、目的地に向かってゆっくりと歩を進めて

いくのだった…

………

教会・カリムの執務室

騎士カリム・グラシアは多忙だ……

支部の運営、人事…J・S事件の調査や管理局との交渉…更には不定期にやってくる義弟の不始末と遊び相手…（最近の標的はクロノ提督に変わりつつあったが…）

…完全にオーバーワークである…いくら彼女が才女だといっても個人で出来ることなど限られていた…何故彼女だけがここまで多忙なのか？…それというのも…

リ「やあカリム！相変わらず忙しそうだな？」

騎士団長（お偉いさん）が働かないからである…

カ「…リシャル様…：珍しく起きていらしたんですね…何か御用ですか？」

目の前の金髪王子に鋭い視線とわざとらしくも丁寧な”嫌味”を言うカリム…普段から温厚な彼女が嫌味を言うなど、彼女を知るもの達にはとても信じられない光景だろう…その上、そこから感じられる負の感情は彼女には全くもって似合わない…

勿論…そんなことは彼に対してだけだった…騎士団長という立場にありながら”全く”仕事をしない…それどころか、毎晩遅くまで遊び歩き、朝になってようやく寝始めるリシャル…以前は才色兼

備かつ勤勉で、全ての騎士の憧れであり模範という話だったが、彼女が今の立場になった頃には既にこんなチャランポランだったのだ……そのくせ容姿だけは全く変わらず、今も昔も少年のようなあどけなさを残していてまるで年をとったようには見えない……（そろそろいい年のカリムはその事が少々気に入らない）

リ「いや、そろそろお茶の時間だしゼオンもいないと静かだね……たまには君の様子でも見ようかと……」

そんな嫌味をスルー……或いは他人の悪意に無頓着なのか……何とも悪びれず答えるリシャル。それも意識するところだ……おもちゃ（ゼオン）が居ないから暇潰しに来た、と……

カ「……はあ……私の心配をなさって下さるのですたら、たまには騎士団長としての勤めを果たしていただけませんか？私一人では一向に進みません……」

カリムは最早呆れ果てていた。そして、無駄だとわかっていても

言わなければならない…言わずにはいられないのだ…本当は声高に
叫びたい…「働けよ」…って…無駄だとわかっているのに…

リ「何だ？そんなに忙しいのか？」

！？…何と！？…これは…ま…まさか…？

こんな反応は初めてだ…カリムは思わず早合点しそうになる…決して
期待してはいけないとわかっているのに…

リ「すまないな、カリム…私が不甲斐ないばかりに…」

…なん…ですって…！

その言葉を聞いた瞬間、カリムは立ち上がりリシャルルの手を取る…その目は潤み、今にも雫が零れ落ちてきそうだがその顔はまるで女神の様に美しかった…

カ「では！…これからは以前の様に活動して頂けるのですね…！！」

女神の歡喜の表情にリシャルルも笑顔で力強く頷く。その顔は女神との対比…幼さも相まって天使の様にも見えてくるのだ…そして天使の口から…

リ「だが断る」

死刑宣告が言い渡された…

…ですよー…

女神がヨヨヨと崩れ落ちる…それを見下ろす天使の顔は満足感で
いっぱいだ…

「このリシャル・バーンシュタインの最も好きなことの一つに…
…いやそんなことより…ふっ…フハハハハハッ！！やった！！
やったぞ！！遂に使ってやったぞ！長年機会を待っていて遂に言え
た！！」

天使は狂ったように笑いだす…そういえば以前誰かがこんなこと
を言っていた…「狡猾な悪魔ほど天使の顔をしている」と…

カリムは泣いた…己の浅はかさを心底悔やんだ…何故一瞬でも信じてしまったのだろう…考えれば考えるほど惨めになっていく…そして芽生える憎しみ…まあ、こうして怒りのボルテージは上がっていくわけで…

カ「はいだらああっ！…！！」

リ「グエツ！？」

意味不明なかけ声とともに裁きの鉄拳は振り下ろされたのだった…

………

カ「…ん…う…ん？」

カリムは目を覚ますと、一瞬自分がどこにいるのかわからなかった。周りを見渡せば何処もかしこも馴染みのあるものばかりで、すぐにそこは自分の執務室だと気付くのだが。わからないのも無理はない、天井を見上げるなど寝るとき以外は殆どないからだ。

ここは…執務室…？どうして…私は寝ているのかしら？

シ「あ！お目覚めになりましたか騎士カリム。」

来客用ソファーから身体を起こせばそこには見慣れたぱつっんへアー…シャツハ・ヌエラが覗きこんでいる…

カ「シャツハ？何時から？…そういえば…私は…」

そこで自分の今の状況にカリムは今更気付く…体には薄手の毛布が掛けられているがそんなことをした記憶は全くなかった……というか記憶が確かならば私は”気絶させたかもしれないが気絶してはいない”…のだ…

リ「やれやれ…やっと起きたな。」

声のした方を見れば、リシャールが机の上で書類に目を通しながら紅茶を楽しんでいる。その姿は教養深く気品にあふれていて実に優雅…まあ、一言で表すならかなり”様”…になっていた…

カ「リシャール様！？……一体何をしてらっしゃ……！」

リ「勝手なヤツだな…人を殴り飛ばした上に一人で倒れておいて…それに、手伝えと言ったのはお前だろう？」

その言葉にカリムは開いた口が塞がらなかった…自分はその後どうやら倒れたようだ…そんなことよりも、今まで一度たりとて助けてはくれず、過去の栄光はどこへやら墮落しまくっていた”あの”リシャールが手伝う？…どうしても信じられない。

リ「本当に失礼なヤツだ……ほら、これで良いだろう。」

確認の為に持ってきた書類を受けとるが、そこでまた驚かされた

…

カリムは几帳面ではあるが決して仕事は遅くは無い…しかし、リシャールが持ってきたのは今日の予定した量の”全て”だった…一枚一枚確認しても適切に案が組まれミスもない…更には、自分が寝ていたのはせいぜい一、二時間程…信じると言う方が無理である。

リ「お前は悩みすぎだ…発展性や効率性もわかるが安全性を疎かにしている案件が幾つもあったな…そんなものの考慮はこちらがすることではない。端から論外だろう？それなのに…」

彼が何やら説明しているようだがカリムの耳には全く入らない…騙されたことや失望など最早掻き消えている…驚き過ぎて別の世界に行ってしまったようだ。

シ「…カリム…カリム!…」

カ「……え?…あ……」

シャツハに揺さぶられてやっと帰ってきたカリム。しかし、その真ん前では、せっかく色々良いこと言っていたリシャルが聞いて貰えなかったからいじけていた…なんかもう体育座りとか似合い過ぎてるし…

リ「……………話聞けよ……」

カ「……………すいません……」

リ「……………」

カ「……………」

シ・カ（…なんか気まずい…………）

シ「さ…さあさあ！お茶でも飲んで一息つきましよう…」（ほら、カ
リム！なんか明るい話題は！？…）（…）」

カ「え！？あ…え…っと…そ、そういえば今年の就職率は過去最高らしいですね！？」

リ「……それは遠回しに私に”働け”と言っているのか？」

………

シ（…何やってんですかカリム！？これじゃ逆効果ですよ！？）

シ（違っ…！待って！？えーと…あ！そういえば…）

カ「そ…そういえばリシャル様？…御家族は…？」

リ「…ん…？父と母と…弟がいたが…もう皆亡くなってしまったな…」

………

多分部屋の空気はかなり寒くなったが、それにもまして二人ともイイ具合に青くなっていた…どうやら地雷らしい…

シ（カツ…カカカカリム！？あんなばしちよっとね！？）

カ（せやかてそないなと言われても…ウチ…もうどうしていいかわからへん…）

（＊作者はたまにこういう意味不明なことを思いつきでやっていますかどうか寛大な心で見えていたくださいm（――）mツマラナイのは自覚してますがやらずにはいられないんです、ハイ）

リ「弟……か……」

アホなやり取りをしていた二人も、ふとリシャルがもらした一言に顔をしかめた。地雷を踏んで雰囲気が悪いのは確かだが、そう呟く彼は何故かもっと別の物を見ているような……そんな気がしたからだ……少なくとも、自分達が知る”少年”の顔ではなかった……

カ「リシャル……様？」

そう声を掛けられた瞬間、リシャルはハツとしたように振り向くと「何でもない……」とだけ答えて首を振る……

……普通、手練れと言うのはどんなときでも自分の意識は手放さないものだ……目の前で何が起こったとしても、その都度対処出来る

ように身体に染み込んでいる…しかし、目の前の紛れもない最高峰は今、本当に別の世界に行っていたらしい…どうやら彼にとってこの件は”それほど”のことなようだ…

シ（…聞いていい話では…無かったようですね…）

カ（…そうね…このことにはもう触れないように…って…ああ何か話題は…）

カリムとシャッハがウンウン唸っているのを見て、リシャルは一つ溜め息をつく…この二人の気遣いに悪い気はしなかったのだが、ここまであからさまな上にモロバレだと正直疲れるだけだった。

リ「…ゼオンは今頃どうしてるだろうな？」

その言葉に二人が飛び付くのはいうまでもなかった…なんとも救われたような表情をしている…まさか相手の方から振ってくるとは思っていなかったらしい…というか、これではどっちが氣を使っているのかわからないな…

シ「そういえば、今回は何処に？出発前に会いましたけど…かなり憂鬱そうでしたよ。」

リ「む…自然が豊富な世界なんだが…まあアイツは素直ではないからな…俗に言う「つんでれ」とかいうヤツだな。」

シ・カ（いや、ジャングルに一人で行けって言われて喜ぶ奴いないよ（二人ともリシャル語は大体理解しています））

.....

その頃、ジャングルにて…

ゼ「……何か今一瞬脳内でリシャル様のどや顔が…」

さっき迄の鬼ごっこで汗をかいたわけでも疲れたわけでもない…
それなのにそんな”不吉なモノ”が浮かぶとは…ちよつとヤバイの
かな、ここ…

遺跡は外観こそ巨大ではあったが、既に廃墟となっており最早得
体の知れないモノ達の住み処となっているようだ…そこら中にモン
スターが蔓延っているのだろう…

ゼ「面倒だし結界張って行こうか…」

誰に言うでもなくそう呟くと、彼を中心にして周囲に一瞬だけ「キーン…」という耳鳴りに似た音が駆け巡った…しかし、ただそれだけ…他には何も変わった様子はない…無いのだが…

ゼ「…右に6…左に17…正面は…多すぎ…数える気にもならないや…でも…何かあるね…」

まるでその場をずっと観察していた…もしくは、”全てが透けて見えている”ような物言い…事実、彼には自分を中心とした半径100M程の周囲の情報の全てを把握していた…大型は勿論…指先ほどの虫の動きや風の流れですら掴んでいる…当然、その隠れ方まで…

そして彼は真っ直ぐ歩き始める…彼に気づいたモノの中には襲い掛かって来たものもいたようだが、どこから来るのかわかっているのだから難なく撃退されていく…まるでサトリのように…

そして、彼はその途中、一度も足を止めることはなかった…

.....

…場面は変わり再び執務室…

力「超音波結界？」

リ「ああ…奴は少しばかり特殊でな…魔力を振動として放ち、周囲のモノに同調させることによってその場の状況なんかを読み取れらしい…有効範囲はせいぜい200Mが限界でそれ以上は頭がついていけないんだと……」

結界…この系統の魔法は主に探知や封鎖…守護に使われる…ゼオンの結界は、これの探知に特化しているのだ…

というか何故こんな話題になったのかというと、カリムのこんな疑問からだっただけ…

………

カ「…いつも思うのですが…一人で大丈夫なのですか？」

リ「ん…何が？」

お茶請けのクッキーをかじりながらリシャルは答える。どうやらシャルハのお手製らしい…なかなかの逸品だ…

カ「ゼオンのことです！確かに色々…その…強いとは聞きますが…
なにも一人で行かせることは無いのでは？数人で行けば探索は楽で

しょうじ、もしもの時だって……」

リ「何を言つかと思えば……それは心配するだけ無駄な物事だぞ。」

リシャルは更に一つクッキーをかじる……彼は元々上流階級のお坊ちゃまだった為か、やたらと舌が肥えているのだがどうやらこれは気に入ったらしい……後ろでシャッハがガッツポーズを決めている……

カ「無駄とは言いますが彼だって人間です……やれることには限りがある……」

リ「ふむ……お前はアイツの事をよく知らないんだな……あ、これまだあるか？」

かしこまりました……と一言言って下がるシャッハ……何やら廊下

で騒いでいるが気にしないでおう…

カ「まあ…実力はインペリアルナイト並みだとは聞いていますが…」

リ「奴の二つ名については？」

カ「…知っているだけです…」

リ「うん…奴の前では言わないでやってくれ…と、なると…まずは能力からか…」

………

そして現在に至る……

リ「と、言うわけで…凄まじい戦闘力と360°に触覚を持っているんだよ奴は。例えるなら…フル改造のヤルダ○オトだな…」

カ「…？なんですかそれは？」

リ「知らないのか…？じゃあシユラム装備の見切り持ち、パラMA Xのヴェガでも可だ…ちなみにサムソンにドルハーケンでも…」

シ「ティ○リングサーガなんて…そんなマイナータイトルをカリムが知ってるわけ無いじゃないですか…」

シャツハが帰ってくるなりツツコミを入れてくれる…また、その手の御盆にはクッキーが山盛りになっていた…

リ「そうか…私はもう5周はしているというのに…パチもんだと馬鹿にしていたあの頃が懐かしい…」

何か不思議な哀愁が漂ってはいるが、クッキーに伸びる手は一向に休まないリシャルだった…

カ「ああ…とりあえず強く強いんだろうというのは良くわかりました…ですがそんな能力なら周りに誰かが居た所で問題無いのでは？危険にはいち早く察知出来ますし…」

リ「…」だろう”じゃない！強いんだ。…シャツハはまだアイツに一度も又力せ…もとい…抜かせたことはないだろう？」

シ「…色んな意味でツツコミに困るイントネーションでしたが……恥ずかしながら、まだ一度も剣を抜いてもらえませんか…」

リ「…そんな男に…」我々”ならいざ知らず、普通の奴らが共をし
たとて足手纏いになるだけだ…」

カ「はあ…信じがたい話ですが…」

リ「…まあそう思うのも無理は無いな…アイツがあのだ剣を使うと
なれば私も正直怖い…と言っても負けは無いけどな…」

そう言ってまた何やらエッヘンと胸を反らすリシャル…そして
カリムは思う…

カ（この人は偉そうにしてるけど…本当に強いのかしら？）

そう思っても無理の無い場面だった…

.....

…遺跡内部…

（ナンデ……）

男達は今…前から歩いてくる一人の青年に恐怖を隠せなかった…

「シネッ！シネエ！」

皆が口々に叫び、その言葉と同時に矢をいるのだが、目の前の青年はまるでそれをすり抜けるかのように真っ直ぐこちらに歩いてくる…端から見ると身体を素通りさせているようなそんな感覚…

（ドオシテ…）

矢には毒が塗ってあり当たれば死ぬ…しかし、いくら撃つても当たらない…

（ナンデシナインダ…！？）

わからなかった…何故目の前の青年が死なないのか…自分は今まで、何人もコレで葬ってきたというのに…

「……………！？」

男は新しい矢をつがえようとして気付く…もう矢は残っていない…
…撃ち尽くしたのだ…それは周りの仲間達も同じだった…そうこう
してる間にも、奴はこちらに向かってきているというのに…

「ア…アアアアアッ！！！！」

仲間の一人が手にナイフを持ち、青年に向かっていった……しかし、そこで奇妙な現象が起こる…彼は青年に辿り着く直前で、まるで眠りにでもついたかのように崩れ落ちたのだ…

「ウ…ウォアアアアアッ！！！！」

他の者達も皆が後に続いていったが、それでも誰一人として青年に辿り着くことすら出来ずに倒れていく……周りを見渡せば、残っていたのはいつの間にか自分ただ一人だけだった…そして…

ぜ「後は君だけだ……」

「ヒイツー!!」

いつの間にか奴が消えていて、自分の後ろから肩を掴んでいた……

……

「ヤメツ……ヤメロ……タスケ……」

ぜ「安心してくれ……誰も死んじやいない……」

見れば、皆白目をむいて気絶しているだけで、死にかけてる奴なんか一人もいない。

彼がやったことは、向かって来た相手の顎を打ち抜いただけ…他にはなにもしていないしそれほど強く殴ってもいない……もつとも、相手は何をされたかはわからないだろうし、この男にとって今はもっと重要なことがあった…

「ヤメテクダサイイイ！！コロサナイデエエ！！ウワアアア！！イキテルンナラサツサトテクズドモ！！ハヤクタスケロ！！イ…ダイダイ！？ヤベテエエエ！！コロサナイデエエ！！」

絶体絶命のこの状況では、仲間の安否など男には正直どうでもいらしい…寧ろ生きてるのなら助けると言うような”とんだ”ゲス野郎である…

ぜ「……生かしておくとならないかな？」

「ヒイツ!？」

ただの脅しでも気が気ではないのだろう…みつともない悲鳴を拳
げながら涙と涎を撒き散らす…軽い錯乱状態になったようだ…

……喰わせる…

その時、不意にゼオンの頭の中に語りかけるものがいた。

…私達にそいつの魂を喰わせる…

再び響くその声は、妖艶で蛇のように絡み付き、そうすることを強いるかのように決して離れない…まるで人を虜にする…いや…人を堕とす魔性の声だった…

だが実際それが聞こえている当人は、軽く溜め息を吐くと鼻で笑ってやる…

ぜ「いつからこんな小物まで欲しがるようになったんだおまえらは？何？欲求不満だと？おまえらにはそれくらいが丁度いいよ…わかったら黙ってな。」

そうして、いきなり”それ”と会話を始めだす…周り（と言っても情けない男が一人だけだが）からすればそれはかなり奇妙な光景かも知れない…しかし、彼にとっては日常茶飯事…これは”いつものこと”なのだ…

「ナニ？ナニヲスルノ？イヤダ！コワイイ！タスケテ…タスケテエ！？」

ま…突然理解不能な行動をとり始めた彼を、この男は当然怖がるわけで…

…ほら…何か良い具合に仕上がってきたじゃん…さっさと喰わせ
てよお…お願いだよお…

頭の声の方もなんかもうノリが軽い…かなりフランクな感じで
さっきよりも随分親しみやすい。素はこんな感じなんだろう…

しかし、ゼオンももうこの状態がめんどくさくなってきたのだろ
う、男の肩から手を放してしまっていた…

「…ウギヤ…エ…？ハナシタ？タスケテ…クレルノ？」

…うおい！？あたしらの飯！？なんで！？逃げちゃうじゃ
ん！？？

「ゼー、そ…助けんの。ゲスだけど死なす必要はないだろ…」

…ざけんな！？俺らの飯は！？そいつ喰わせろよ！！…

ゼ「ヤダよ…殺さなくていいなら殺したくない。ほら…君もさっさと行きな…じゃないと」コイツらは無理にでも実体化して君を喰いに行くから……」

「ヒッ……マァアァアァー マァアァアァッ！！！！！」

そして男は脱兎の如く逃げ出した……もう何が何だかわからない……死んでいく仲間達と死なない青年……死にたくない……怖い……怖い怖い……怖い怖い怖い……

もはや危険は去ったというのに忙しいことだ……

ぜ「余裕の無い生き方はしたくないなあ……」

男の後ろ姿に一人呟くゼオン…頭の声は今尚響いている…どうやらあの獲物は十分お気に入りだったようで、文句もくどくどと大分やかましい…

ぜ「まあそう怒るなつて……それよりも……後ろの人？いつになったら出てくるのかな？」

そう言った瞬間……彼の背後から”何か”が襲いかかってくる……

予め察知していたため、ゼオンはそれを身体をずらしただけでかわせたが、彼の目の前にあった壁には”それ”が勢いよく突き刺さっていた…

ゼ（何だこれ…木…？…根…か？）

視線の先には槍のような樹木が伸びている…そして、それを辿った先…その発生源には、遺跡内だというのに突如発生した樹木と、坊主頭に白のスーツに眉無し強面という”いかにも”な大男が佇んでいた…

ゼ「…あの…もしかして…」そっち系”の方ですか？…」

？「…失礼…手荒だとは思いますが…貴方を試させていただきます…」

ゼ「ちょっと待ってくれ！こんな所まで取り立てにくる意気込みは凄くでは参ります…」…聞けよ！そもそも俺借金なんて無いし！」

有無を言わず大男は飛び込んでくる。ゼオンも迎撃しようと手足に力を込めるが、そこで彼は驚愕した…

……遅い！？

男のスピードなど先程飛んできた木の根や矢に比べれば欠伸びが出るほど遅かったのだ…だが…だからこそおかしい…

ゼ「ってことは…」

そう思い背後に意識をやると案の定…先程飛んできた根が再びこちらに向かってきていた…それを身体を反らしてかわす…

ゼ「やっぱり陽ど…わっ！？」と…」

かわして向き直るも今度は発射地点から根が迫ってくる…しかもその数は先程の比ではない…

ゼ「チィッ…」

着弾寸前を跳ぶことでやり過ごせはしたが、いつの間にか背後には例の男が待ち構えている…

ゼ（げ…やられたねこれは…）

？「オラアアッ！！」

…ドガンッ！！！！！！！！！！

待つてましたというようにゼオンにハンマー（よくドラ○ンボ
ールでやってる腕を組んで叩き付けるアレのこと）をぶちかました…

効果音までキーンとか聞こえそうな程の速度でゼオンは落下
していくが、何とか態勢を立て直すとギリギリで着地した…衝撃で
地面が軽く吹っ飛んでいくが何とかダメージは抑えられたようだ…

ゼ「あー痛え…」

？「安心するにはまだ早いですね…」

ゼ「チッ…」

間髪入れずに蹴りが飛んできた…

何とかガードするも、そのまま壁まで吹っ飛ばされてしまう…が
…流石にこの男もやられてばかりではない…

ゼ（吹っ飛ばされたんじゃない…跳んだんだよ！）

そのまま一回転して壁に着地…そして反動を使って一気に飛び出す…だが相手も既に迎え撃つ態勢は整っていた…蹴りの感触で読まれていたらしい…

？「又ウン！」

ぜ「せやあつ！」

両者が激しくぶつかり合った…その反動で周囲に衝撃波が巻き起こり辺り一面を綺麗に吹き飛ばしていく…後には塵一つ無くなっていた…

ぜ「…ヤク〇って皆こんな強いんですか？」

お互い密着した中でギリギリと拮抗しあう、相手に押し勝とうという反面、裏をかこうとして相手のつぎの動きを殺しあう…先の先…後の後…どちらにせよ読みきったものが勝つ

??「…私はそのようなものではありません……！」

そして、ガツという音と共にお互いを弾きあい、二人は一旦間合いをとる…どちらも息切れなどした様子はなく、寧ろ相手の実力を体験して益々やる気になったように見えるのは気のせいではない…

それを象徴するかのようにゼオンの口元には薄くではあるが笑みが浮かんでいた…

ゼ「（本当強いね…強くて巧い…）…名前聞いても良いですか？」

ヤ「これは失礼…ヤクマルと申します…ベンジャミン・D・ヤクマル…」

先程からそうだったが、どうやらこの大男…ヤクマルはかなり紳士らしい…因みに、見た目にあってるんだかあってないんだかよく

わからない男だというのがゼオンの印象だった…

ゼ「…名は体を表す…ですかね…？」

ヤ「…よく言われますね…」

その一言でゼオンは堪えきれなくなったのか声を出して笑いだした……かなりツボらしく額に手をあてて完全に隙だらけ…だがヤツさんは眉一つ動かさずそれをジツと見守っている…一人が爆笑して一人が見守る光景は、よく考えるとかなり不気味だった…

ゼ「…ハツハハ…ハア…いや…ギャグセンスまで卓逸とは…ハハツ…
…ついでにもう一つ聞いても良いですか？」

しかし、このゼオンの提案にヤツさんは首をふる…

ヤ「…もう余り時間を無駄にしたくありません…再開致しましょう…」

何とも冷たく、ぴしゃりと言つてのけ、再び戦闘態勢になるヤッさん…もしかしたらこの男、顔には出ないだけで内心、かなりムカついていたのかもしれない…しかし…そんな彼もこの後の言葉には衝撃を受けるのだつた…

ぜ「前にも一度、俺のこと見てたよね？」

ヤ「!？」

相手の明らかな動揺にゼオンは口元を吊り上げる…自分の勘が正しかった証拠だ…彼は更に続けた…

ゼ「あの時は何を見ていたんですかね？途中参入だったから俺は無
いとして…綬蛇矢もイレギュラーだった…ということはあの白いヤ
ツ？」

ヤ「……………」

ゼ「…リシャルル様は何も教えちゃくれませんが、ヤツらは15
年前にも出てきたんでしょ？」

ヤ「……………」

ゼ「…貴方の背後…もしくは貴方個人が何を嗅ぎ廻っているのか知
りませんが…っと…！？」

ガキイ

そこで二人は再び交差した…

ヤッさんの蹴りをガードするも、またもや弾き跳ばされてしま
うゼオン…しかし今度はそれだけでは終わらない…

ゼ「！？これは…」

吹っ飛んでいく彼の身体に蔓が絡み付いてきたのだ…蔓がブレ
ーキとなり、予想外の反動がゼオンを襲った…

ゼ「ぐあっ…！」

身体を引きちぎられるような感覚…今まで味わったことの無い痛みに、ゼオンも流石に堪えたようで身体が思うように動かせない…

また、ヤッさんもこれで終わらせるつもりはなかった…

ヤ「オラアッ！」

身体が地面に落ちようという所で、ヤッさんのニードロップが叩き込まれる…

ゼ「ガハッ…！」

ゼオンの口からは勢いよく血が吐き出された…常人ならば即死するほどの一撃で、どうやら内臓が”イッた”らしい…しかし、ヤッさんの追撃はまだ終わらない…

ヤ「ハアッ！」

踏みつけた反動で後方に飛び退く（ご丁寧に回転までいれて）…そして片手を着きながら着地すると、その態勢のまま呪文の詠唱を開始した…

ゼ（マズイねこれは…）

相手に収束していく魔力にゼオンも焦る…しかし、いかんせん身体が動かない…逃げようにも逃げられないので相手の攻撃を正面から防ぐしかない訳だがこの身体ではそれも難しいだろう…

ゼ（あんなに強いとは…世の中は広いなあ…）

そんなことを思うゼオンだが、そこには諦めや悲観的なものは一切無く…相手に対しての素直な称賛だけが締めている…

ゼ（やっぱり失礼だよな…命懸けで探りに来てるのに手を抜くのは…）

そしてゼオンはおもむろに何か口走る…すると、彼の両手には黒い二本の剣が握られていた…

ゼ（そして認めよう…使うに値する”強敵”^{てき}なのだと…）

そして彼は立ち上がり、双剣を構えた……

ヤ「…抜いたか…」

相手の様相にヤッさんも気を引き締める…詠唱はもう終わりに近い…

ヤ「”死兆星”のお手並み…見せてもらいましょう…」

そしてヤッさんの足下に魔方陣が現れる…

ヤ「目覚めよ！大いなる息吹！古の地を解放放ち、汝の敵を討ちなさい！！」

地面から幾千幾万といえる樹木が生い茂り、まるで意思を持つかのようにぐにやぐにやと揺れ動く…その様はまるで槍を突き上げる兵士達のように猛り狂う！…

ヤ「トリフィード・ウィップー！」

呪文の発動と共に樹木はその身体を鞭と化し、視界にある全てのものを瞬く間に蹂躪していく…壁も、柱も、全てが粉々に破壊される…後には何も残らない…

そうなる筈だった…

ヤ「…やはり…」

ヤッさんは薄く笑みを浮かべる…額からは冷や汗が流れ落ちた…

土煙や粉塵が晴れていくと、その場には先程と同じくゼオンが立っていた…それどころか、さっきまで瀕死だった筈がピンピンしているのだ……という訳か傷がなくなっている！？

ゼ「……褒めてやるよ…アンタは強い…」

ゼオンはコツコツと歩いて来る…何の警戒もなく…ただ普通に、真っ直ぐにこちらに向けて…

ゼ「アンタがどんな目的で動いているか…俺のことを試すってことは…とりあえず何かしら交渉でもあるんだろう？」

ヤッさんの足下から根がのび、再びゼオンに襲いかかっていくのだが、彼の目の前でそれは突然消滅した…そう…”消滅”した

ゼ「アンタみたいな人間は信用出来る…俺を試すのに殺す気で来てくれたのは、少なくとも俺を評価してくれてるからだろう？但し…ちよつとやり過ぎたな…」

先程から何度も攻撃してみるが、全て彼の目の前で消滅してしまっていた…しかも何故か身体を酷い倦怠感が襲うのだ…まるで何かを吸いとられるような…そんな不思議な感覚…彼は以前として、ゆつくりこちらに向けて歩いて来ているだけというのに…

ゼ「見るよ…こいつらがこんなに歡喜よろこんでいるんだ……さあ、餌の時間としよう…」

彼は歩きながら剣を掲げ、両手を広げる…そこから噴き出すのは、
どうしようもない、逃れることの出来ない、まさに死の気配…だが、
それでもヤッさんは笑うことが出来た…何故ならば、覚悟などとう
の昔に出来ている！

ヤ「名は体を表すとは…まさに貴方のことではありませんか…!!」

そして彼に向けて跳躍し、蹴りを放つ…その一撃に迷いはなかつ
た。

ヤ「オオオオオオッ!!!!!!」

そんな相手をゼオンはただ愉しそうに見てとると、彼に向けてこ
う呟く…

ぜ「コイツらに見せてやってくれ…貴様の醜い心…邪悪な魂ってヤ
ツをな…」

その瞬間…ヤクマルの心臓は二振りの剣…雌雄一対の魔剣”ラン
シュバイク”によって貫かれていた…

………

第十三話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）m今回は聖王教会での話だったわけですが…あの組織って一体どうなってるんですかね？イマイチ組織図がわからないもので独自設定になりましたけど…詳細を知っている方がいれば是非教えて頂きたいです（汗）ヤッさんとゼオンは置いておくとして、リシャル様！自宅警備員でホント申し訳ない…カリム色々すいません（涙）カリムは作者個人の嫁にしたいランクの二位に入るほど愛してるんですがね…（因みに一位はフェイト、三位ははやてです。え、なのは？彼女は嫁と言うよりはだんn…おっと誰か来たようだ…）まあ何より今回の目的は…出してしまったオリキャラがこのまま過去編突入したら確実に忘れ去られるな…という理由だったのですが（汗）次回は今回の続きになります。出来ることならば次回も読んでいただけると有難いです。それでは失礼致します、お疲れ様でしたm（――）m

第十四話（前書き）

お久しぶりですm（――）m三ヶ月以上かかってやっと一話分の駄文を書いた亀作者です…なんかもう色々スイマセン…

第十四話

ヤ「……ガハッ……！！……ハッ……ハハッ……」

己の身体に突き刺さった二本の剣……胸には激痛が走り、呼吸が出来ないうえに身体は指一本動かすのもままならない……しかし、今確実に自分の命が喪われつつあるというのに、ヤクマルはそれを見て何故だか笑ってしまった……

ヤ（まさか……ここまで差があるとは……）

試すなどおこがましかったのだ……私が何をしたところで彼にはまるで意味を為さなかった……例え全ての能力を解放したところで同じ結果だっただろう……

ヤ（……死の間際とはこんなにも穏やかなものなのだな……）

目的は達成した…これ程の猛者ならばあの方もお許し下さるだろう…惜しむらくは、彼と共に戦うことが出来ないのが心残りだが…

ゼ「…おい…？」

…フツ…彼ならばきっと理解してくれるだろう…この世界の為に力を…

ゼ「…おい…聞こえてるんだろう？」

…？何だ？…そうか…そういえば何も説明していなかったからな…大丈夫…後程我が主から

ゼ「…悟ったような顔してるのに悪いんだが…アンタ死ねないからな……」

そうか私は死なないのか…まあそんなことはどうでもいい…それよりも今は…

ヤ「……………何？」

ゼ「だから…死なないんだよ…アンタ」

……………

……………

………何でさ？

ヤ「…ちよつと待ってくれ？私は心臓を…」

ゼ「痛いかな？」

ヤ「…ん？…そういえば…」

今更ながらに私は気付いた…刺された痛みも、襲ってきた苦痛もなくなっていて、何より呼吸が出来る！？…そんな馬鹿なと思うがやっぱり身体は動かせなかった…どういうことだ？

ヤ（…何だか急に死が遠くなってしまったな…）

現状についてイマイチ理解は出来ないが、ヤッさんはなんとなく
そう思ってしまう…まあ、無理も無いだろう…

ゼ「オイオイ、安心するなよ？」

そこで彼は更に剣を押し込んできた…

ヤ「……ガッ……！！………？」

流石に挟まれた瞬間は痛みを感じるようだが、それもすぐに治まっていくな……

ヤ（なるほど……傷が驚異的な速度で治癒されていくのが見える……恐らく身体の機能も補助されているのだろう……あの剣の能力だろうか？ なかなか興味深い……）

この時……彼は命を握られているというのにこんなことを考えていた。それが今までの経験によって培われた洞察力なのか、死を間近にしている開き直りなのか……何れにせよ豪胆なことだ。

まあもつとも……そんな風に呑気に観察していたことをすぐに後悔するハメになるんだが……

ヤ「……………！！！！！！？」

…な…んだこれは…何かが抜けていく…私の身体から…

直後、彼の身体を激しい喪失感が襲う…先程の戦闘中とは比べ物にならない程強く、荒々しく…まるで魂が抜かれていくかのように、彼の全身から力という力が吸い奪られていく…

ヤ「な……に…が……？」

一気に老けこんだかのような覇気の抜けた顔でゼオンを見上げるヤッさん…どうやら顔を動かすのも辛いようで、プルプル震えている。視線など定まっていない。

ゼ「ん？ああ…何って…アンタのリンカーコアを喰ってんだよ。」

ヤ「な……ん……だと……？」

しれっと言われた一言だった。が思わず耳を疑ってしまった。何せ自分は今“喰われて”いるのだ。バツチリ現在進行形……身体を齧られるわけでもなければ皮を剥かれるわけでもない……しかしだからこそ、まったく予想がつかない。自分はこれからどうなるか分からない恐怖……それは歴戦の猛者であっても拭い切れやしない。だってそうだろう？人間と戦うのに死ぬ覚悟は出来ても喰われる覚悟なんてするやつはまずいない……ましてや踊り食いである（笑）幾らヤツさんだってそりゃビビるわ……

ゼ「……こいつらは人の魔力が食い物でな……」

ヤ「……ア……アウ……ア……オ……ウア……」

ゼ「アンタの味はかなり気に入ったみたいだ…ちなみに魂は高力ロリーだからあんまり喰いたく無いんだと……さすが不思議アイテム（ロストロギア）と言っべきか…」

「ヤア……ア……ア——ツ！！！！！！！！！」

そして、白目を剥き出しにし、口から泡を吹き、激しい痙攣とこの世ならざる悲鳴を挙げつつ微妙にアレな表情を浮かべながら……ヤクマルはその意識を絶った……

ゼ（…どうやら喰い終わっ たらしいな…）

身体から剣を引き抜く……それに呼応して剣も輝きを放つのを止めた。胸の傷は引き抜く時にすでに直したので、もう痕すらない……

…久しぶりの上玉だったねえ…

…またヨロシク頼むぜ…

何処からかそんな声が聴こえたかと思うと、ゼオンの両手から剣も消えていく

そしてあたりが静寂に包まれると、ゼオンはヤクマルを見下ろして深い溜め息を吐いた…

ゼ「次に喰うとしたら可愛い女の娘にしよう………」

そう呟く彼の表情は、まさしく憂鬱そのものだったという…

.....

ぜ「……しまったなあ……」

調子にのって吸い付くしたのはいいがこれではしばらく起きないだろう……

目の前のゴツい物体に視線を落としながら、彼は今更ながら後悔していた……

放置していても良いのだがこの状態で襲われればひとたまりもないだろうし、何の用だったのかも正直気になる……しかし持つていくにしても明らかに邪魔だ……さてどうしたものか……

や「……せめて人間として扱っては頂けませんか？」

ゼ「うおっ！？ああ…起きました？というか読心術まで使えたんですか！？」

ヤ「…ッ…口から漏れて…いましたよ…」

ふらつきながらも何とか立ち上がり、ヤッさんは頭を軽く振る…当然だが顔面蒼白で見るからに危なっかしい…ガタイと顔付きのおかげで死人に見えないだけマシ、といったところか…

ゼ「ホント驚かされますね…こんなに速く目を覚めたのはアナタが初めてですよ…しかも立ち上がるなんて…」

ヤ「コチラから仕掛けた上に…更なる重荷となつては…ッ…いられませんからね…フウ…」

そこでゼオンは苦笑いを浮かべる…まさか自分が倒された後のことにまで気を廻す人間がいたとは……これは最早性格なのだろう…

そんなことを考えていたら、ヤツさんはいきなり深く頭を下げてきた…

ヤ「完敗でした…それと数々の非礼を御詫びします…貴方を試すなど私ごときには過ぎたる行いでした。」

まさに微動だにせず…斜め45°にビシッと決めてきた。そこから感じられるものには、全てにツ！誠意がツ！感じられるウ！…のだが……正直ここまでされると相手は困るもので…彼もその例外ではなかった訳で…

ゼ「あ…いや…頭を上げてください…正直アレを使われたのは久しぶりで…ちょっと加減きなくて…やり過ぎたかなーとか思ってます…アハハハハ……」

空気がグダるのに時間はかからなかった……

……

聖王教会・執務室

リ「彼の双剣……名前をランシュバイクと言っただが……」

カ「ら……乱酒バイク……!？」

シ「最近の交通法なら一発アウトですね……」

リ「……ツツコンで欲しいのか？……」

シ「すみません……」カ「え……？何が？」

リ「……」

軽い頭痛を感じ、リシャルは額に手をやった……どうやら彼女にしては随分高度な攻撃を繰り出してきたらしい……もっとも、本人にその自覚は無かったが……

リ「……」とりあえず黙って聞いている……あー……その二本は一応ロストログアに分類されるんだが……どうもこの世界の物じゃないようだな……我々でいう「別世界」……ではなく、全く異なる世界……「異世界」の物らしいんだが……」

シ「異世界…？」

カ「…リ…リシャル様…それはもしや…と…特秘事項にあたるのでは！？…というか何でそんなものをゼオンが！？」

頭に？が浮かんでいるシャッハに対してひどく慌てだすカリム…
それも仕方無いことだろう…管理局の特秘事項にあたることをペラペラ喋りだした上に、それを自分の部下が所持しているというのだ…
インパクトとしてはレリック関連以上だろう…

リ「気にする必要は無い。その為のロストログア扱いだ…それに漏れたからとてどうこう出来るものでもなかるう？」

カ「確かにそうなのですが…」

カリムは肯定しつつも、非難めいた視線をリシャルに送る…

だが彼は、そんなことは全く意に介してくれない…

リ「まあ今重要なのはそこではないな…シャツハも興味があれば後からでも教えてもらおうといい。今はその特性についてだ。」

そこでリシャルは一旦二人の様子を窺い、意識が此方に向いているのを確認すると話し出した…

リ「まず、その二本は雄と雌の二本に別れていてそれぞれ意思を持つてる…まあこの辺はデバイスと同じなんだが…その二本は魔力を”喰う”んだ…」

シ「”喰う”？消費消耗が激しくなるとかそういう意味ですか？」

リ「使ってる本人に対してはそうだ。（まあ最近はもう気にならな

くなつたとは言っていたが……)しかしこの”喰う”は主に相手に対してを指している……斬れば相手は知らぬ内に魔力を奪われ、守りに使えば並みの豆鉄砲なぞ何もせずとも消え失せ、仮に大砲を撃たれたとしても自身の障壁と併用すれば容易に受けきれぬだろう……まあ例外はあるだろうがな。」

カ「そ……それならば対魔導師戦ではほぼ敵無しじゃありませんか？」

リ「うむ、無類の強さを発揮する。まあ一対一なら負けはしないだろうな。」

それを聞いたシャツハは、何か考えるように口許に手をやると目を閉じる……どうやら脳内でシミュレーションしているらしい……

シ「……対策としては、多人数で囲むなり奇襲で不意をつく位しか思いつかないですね……」

リ「…おい…考えてそれか？…遠距離から魔法と実弾混ぜるとかあるだろ？」

シ「実弾兵器の所持、及び使用は管理局法で禁止されてるじゃないですか。」

リ「違うな…間違っているぞシャツハ！お前は罪を犯すのではない！罪を理解した上で敵を倒すのだ！倒すべき敵を仕留める為には確実性を重視しろ。奴一人殺すのに躊躇していればそれだけ損害が増えることになるぞ。」

シ「！？イエス…マイロード…！」

カ「……何ですかそれ？今の理論ツツコミどころ満載なんですけど…というかシャツハ？アナタのマイロードはどちらかと言えば私では？」

リ「気にするな、お遊びだ…しかしまあシャツハよ…お前ならよくわかるだろう？ 奴を捉える困難さが。」

そう言うと、シャツハも諦めたように深いため息をついた…

シ「正直…困んだ程度でどうにかなるとは思えませんね…」

……げんなりした表情から察するにお手上げなんだろうね…

しかしリシャルは、追い討ちをかけるように勿体つけながら更に続けた…

リ「…更に恐ろしい話になるが、その二本にはまだ厄介な能力…身体変化というものがあってな…」

力「？変化ですか？」

リ「…強化と呼んだ方が良さかもしれん…殆どそれにしか使わないし…まあ要するにパワーアップだ…うん…パワーアップ。」

シ「パ…パワーアップ…」

カ「分かりやすくはなりましたが…何だか一気に頭が悪くなりましたね…」

リ「よいのだ！間違っていない…分かりやすいのは美德だろうか？」

…分かりやすすぎる例えに二人は正直理解を通り越して呆れ気味だが、そんな二人にリシャルも少し不満気で機嫌が斜めに傾く…まあもつとも…彼の場合唐突に閃いた”パワーアップ”を共感して貰えなかったからというのが理由なのだが…

リ（そういえば知性が強化出来るかは知らんなあ）

…そんな理由だし思考の切り替えも早いのか、さつさと別の事を考え始める我らが騎士団長…そしてその向かいには先程のようにため息を吐くシスターと、それを横目に何だか置いていかれた気分の女騎士が居る…端から見てもこの三人に今一つ良い適用句が浮かばないのは、恐らくこの纏まりの無さが原因だろうか……

そんな状態がしばらく続いてゐたが、唐突にシャツハが立ち上がった…

シ「……私はまだまだ精進が足りない様です……」

彼女は唐突に呟くとそのまま部屋を出て行くとする。恐らくは自分を無力と嘆き、自分を鍛え直すとか特訓とか修行とかそんな方向に走ろうとしているのだろう…

…そんな彼女にリシャルは声をかける。

リ「おいシャツハよ？…誤解しているようだと言っておくが…奴は多分お前相手にそんなに余裕はないぞ？…」

シ「リシャル様…お気持ちは嬉しいのですが今のままでは騎士ゼオンの練習相手にもなれていません…私は今のままではいられません！」

シャツハの目には固い決意があった…そう、今のままで自分は終わらない、てな感じの熱い決意だ…リシャルもそれ以上は何も言わず彼女をただ見送った…

そして、その後二人の間で交わされた会話はこんなのである…

リ「いやいや…アイツはズルいだけなんだって…感知されないのを良いことに格闘だけとか言っても平気で結界使ってるんだぞ？ シャツハはそりゃもう凄い勢いで強くなってるが…真正面から糞真面目に戦ってたんじゃ百年経っても勝てないだろうな…」

カ「…た…確かにちよつと卑怯…ですが……まあ個人の能力ですし…シャツハだって今より強くなるんだから良いのではありませんか？」

リ「だって……それに合わせてゼオンも強くなるだろ…」

どこかビビリ気味なりシャルルに対して、カリムは満面の笑みで答えた…

カ「だったら尚更良いじゃないですか！」

あくまでも邪気の無いその笑顔…その笑顔は彼にまた頭痛を運んでくるのだった…

.....

再び遺跡…

ゼ「で？世界が混乱に陥る…と？」

ヤ「ええ…貴方は既に騎士カリム・グラシアによって知らされていたでしょうが…」

騎士、カリム・グラシアの特殊能力…プロフェーリン・シェリフテンは近い未来の予言を詩文形式で書き出されるもので、難解な古代ベルカ文字であるうえに、的中率もよく当たる占い程度である…が、方針の決定などに重宝されるので信頼率はかなり高い…

ゼ「確かに彼女の予言にはそういった内容がありましたね…内容は記憶していませんが…確か管理局の崩壊を示唆するものだったかと…」

ヤ「ええ…そしてそれに呼応するかのように最近になって発見されだしたロストログア（レリック）…そして、それを狙う次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの活動……」

ゼ「確かに危険な存在だとは思いますが…しかし、対策は既に打ち出されていますよ？」

ヤ「機動六課…ですね？」

ヤ「ええ…明らかに異常すぎる部隊編成ですが、それだけこの件に
対して”上”は入れ込んでます。まだ経験不足の感は否めませんが
対策班としては十分では？」

ヤ「…確かにあの部隊であれば多方面に顔が利く上に人員も優秀で
す…しかし、彼女達の標的はあくまでレリック…ひいてはスカリ
エッティです。想定外の事態には対応仕切れないでしょう…そう…
想定外の…ね。」

そこでゼオンの口から笑みがこぼれた…どうやら目の前の人物は
自分と似た目的で此处に来ている…そして、それは相手も同じよ
うだ…

ゼ「想定外ねえ…それは第三者の介入…と、受けとって構いませんかね？」

ヤ「フツ…腹の探り合いは止しましょう…貴方も同じ目的で此処に來ている筈です…あの白い異形…ユングを追ってね…」

その言葉にゼオンが軽く肩を竦めてみせると、ヤッさんもそれに答えるかのように不敵に笑うのだった…

.....

遺跡・地下

女「フン…ネズミが入り込んで入るようだな…」

地下だというのに明るく、小型戦艦ならば裕に入るほど開けた部屋…しかし周り一面には血管が浮き出したような球体が所せましと置かれており、それは時折大きく脈打つとそのおぞましさを一層際立たせている…そんな不気味な光景のその中心には少し小高い祭壇があり、その祭壇の上には一人の少女…

女「…フン…まあいい…起きろキサマら！」

少女が合図するように指を勢いよく弾くと、周りにあつた球体が一斉に弾け飛び…

「ゲッゲゲビョアアアアッ!!」×100

という何とも言えない叫びをあげながら、”あの”白い異形…ユニ

グが這い出して来た。

女「フッ……」

少女は腕を組み、その薄青く長い髪を揺らしながら眼下で起きて
いる異様な光景に満足そうに微笑む…少女らしく愛らしいその容姿
とは裏腹に、顔には妖艶で残酷な笑みを浮かべて……

ところが、何を思ったか急に明後日の方向を向くと…

女「……貴様が…何の用だ？」

柱に向かって話しかけた…

？「……………」。

すると、少女が言葉を発すると同時にちょうど柱の影になる部分から”それ”は音も無く現れたのだ………

？「……こっちだ……」

…但し逆側からだったが……

女「………」

男「………」

女「……なあに…少々茶目っ気を出してみただけだ」

それでも少女はそつちを向いたまま余裕たつぷりといった感じで自慢の髪を指でサラサラやっているが、微妙に動作がぎこちないうえに体は小刻みに震えているのを見るに、どうやらこつちを向けない顔になっているのだろう…

？「ここを放棄する…お前は目覚めている者だけ連れて先に脱出しろ…」

しかし、そんな微妙ではあるが微笑ましく一応の萌えとも言える彼女の仕草は”それ”にとっては心底どうでもいいらしい…一方的にただ要求だけを述べていくその様はむしろ憎しみや怒りといった負の感情が後ろに見えるのは気のせいだろうか…？

そもそも”それ”というのもそいつは全身に白い鎧…声も中性的な響きをしているのも相まってか男か女が見分けをつけるのは正直体つきだけ（まあしつかり男だが）……ただその姿はあの白い異形「ユング」に酷似しており、異様な雰囲気を漂わせていた…

そして、そいつの言葉を聞いた少女は思い切り顔をしかめたのだ…

女「戦わずして逃げろというのか？……確かに強い魔力は感じるが……」

少女は不安や恐怖というよりは腑に落ちないといった感じだ…自分と彼と”こいつら”がいれば戦力としては申し分ない筈…相手はどんな輩なのか…？

？「…今来ている奴は…奴の前では数なんて役には立たないだろう…やり合っリスクを考えればプラント一つなんて安いものだ…」

なん…だと…
女

それを聞き、少女は驚愕する…どうやらとんでもない奴が来ているようだ…しかし一方、今の一言には聞き逃せない部分があった。

女「待て…奴？奴らではなく奴？一人だというのか？」

途端に少女の形相がみるみる変わっていった…ただし、今度は確実に怒りのせいだが…

？「ああ…さっきまでは二人だったが今は一人になっ「戯れ言を！」…」

男の言葉を強引に遮る。一人でも二人でも同じようなものだろう？問題はたった一人に対して何故逃げ出さねばならないのか？

戦闘とは地理や作戦…土気にも依存するものだが、普通は数が多いほうが圧倒的に有利だ…確かに個人の能力というのは侮れない。仮に一人のレスラーと百人の幼稚園児が戦ったら…まあ恐らくレスラーが勝つだろう…が、しかし！我らは断じてそのような脆弱な存在ではない。

女「ここににいる者達は皆、紛い物とはいえ我が遺伝子を受け継いでいる…強固な鎧と変幻自在の爪…並の魔導師では歯が立たん！…そして、貴様と私！…それでも足りんというのか！！」

少女は噛みつかんばかりの視線と獣の様な咆哮を挙げながらギャーギャーと男に喰ってかかる。その様はまるで番犬…イトコの血統書付きなのに放し飼い…と、言ったところか。

？「足りない。コイツらじゃ話にならないし俺ではせいぜい足止めが限界…奴の前では数なんて何の意味ない…そして何より、お前は

最初から戦力に含まれちゃいない。」

しかし、返ってきた答えは少女を更に混乱させる。男の口振りでは相手についての情報が少なすぎて全く見えてこないうえに自分は戦力外通告…色んな意味で状況が理解出来ない。

女「な……！？どっいうつもりだ！？何故私は…」

男「ふざけるな！…その身体は一体誰のものだと思っている？」

そして、男の感情が爆発した…

女「くっ……………」

男「前にも言った筈だ…俺がお前に手を貸すのは彼女の為だ…」

男「断じてキサマの為なんかじゃない!!」

女「ぐ…うつ…」

男の剣幕に少女は齒痒そうに唇を噛み締めた…お互いに憎悪を込めて相手を見つめる…世間でいう修羅場だね…

女「…おのれ…下僕に分際で……」

男「お前がどうなろうと知らんが彼女の魂と身体を危険にさらすわけにはいかない…今彼女が死ねばお前も消える…違うかゲーヴァス!?!」

そして、男の言葉にゲーヴァスと呼ばれた少女は口惜しそうに視線を逸らした……

ゲ「……わかった……確かにこの脆弱な身体では万が一があるやもしれん……今回は折れてやろう。」

洪々といった感じではあるが了承するゲーヴァス。男も安堵した様でいくらか緊張を解いたようだ。と、思っていたら、いつの間にか男の手には金の大鎌が握られている……大きさはゲートオブヘヴンと同程度だろうか？

男「すぐにテレポートを始めろ……あまり時間はないぞ。」

女「わかつている…しかし大鎌そんなものを出して何をする気だ、ウェイン？」

男…ウェインは鎌を二、三回振るとクルクルと回している。どうやら準備体操の様なものらしい…

ウ「可能な限りここを破壊していく…僅かな情報でも奴らは嗅ぎ付けてくるかもしれないしな…」

そう言つて彼は大鎌を構えると魔力を解放していく…それはみるみるうちに鎌に集まっていき、収束し、全体が光に包まれたように輝く…恐らく、刃に触れただけで粉々になりそうだ…

しかし、そんな危険物を彼が振りかぶろうとした瞬間…

？「ん…ウェイン？…もしかしてウェイン・クルーズ？…」

間の抜けた声がした…

ウ「チィッ…!!」

そしてその一撃は声のした方向…入り口目掛けて放たれることになった…

「ゲギヤッ?ゲ…」

閃光の一撃がまだ転送前だったユングを飲み込み、一直線に入り口までを破壊していく…

ゲ「おい！？今のは？」

ウ「今すぐ詠唱を開始してお前は逃げろ！！」

ゲ「しかし、お前「早くしろッ！！」……」

ウ（……甘く見ていたつもりはなかったんだがな……）

瓦礫の粉塵が晴れていくと、そこから現れたのは金髪に深紅のコート……両手には漆黒の魔剣……

ゼ「ウェイン・クルーズ……インペリアルナイトであるオスカー・リ
ーヴスに師事し、数々の武功を挙げ自身もインペリアルナイトの候
補になっていた……が、十五年前のゲヴェル討伐に参加し行方不明に
……つてのがウチのデータに残っていたんですが……ご本人で間違いあ
りませんか？」

ウ「ハアッ！」

ウエインは先程の一撃をもう一度、
”奴”に対して放った…し
かし…

ゲ「!？」

奴の目の前でまるで吸い込まれるように霧散してしまっ…奴のし
たことといえばただ剣を一振りしただけ…

ウ「……………」

そして二人は、初めて顔を向かい合わせた……

ゼ「初めまして、ウェイン・クルーズ…お噂は予々（かねがね）聞いておりました…私はゼオン・グランガイツ…御会いできて光栄です…」

それはただ純粹に相手に対しての敬意を表して行われた行為だった…だが、そこから発せられる気配は紛れもなく、見るもの全てを凍てつかせる暗く冷たい死の気配…

ゼ「残念ながら話をする気は無いようですけどね…」

そうしてゼオンは肩を落とし本気で残念がっている…がその身に纏った気配はまるで弛む様子は無い。隙について逃げる…という考えは無意味だろう…

ウェインはチラリとゲーヴアスを見る…彼女もまた”奴”から目を離せないようだがなんとか詠唱は続けている…しかし動揺や焦りの為かまだまだ時間はかかりそうだ…

話し合いなんて選択肢は最初から無い…捕まれば彼女は確実に殺されるだろう…

ウ（護って…見せるさ）

大鎌を持つ手に力を込める…共に戦い抜いてきた相棒はそれに答えるかのように鈍く輝いた…

ウ「初めまして…ゼオン…と言ったか？お察しの通り…俺はウェイン…ウェイン・クルーズ…かつては騎士団の一員であり、今は”こちら”側についた裏切者…そして…」

瞬間、ウェインの姿が消えた…

ウ「今からお前を殺す者だ!!」

激しい打撃音と共に二人はぶつかり合う…ゼオンもまた、ウェインの一撃に反応して受けきっていた…絡み合う視線…

ゼ「…本気で相手をしていただけたとは…嬉しいですよ…!」

ウ「…お前はそのまま死んでくれると嬉しいな…!」

ガキッ!という音と共に両者は距離をとる…しかし、二人の表

情は全くといっていいほど違う…片や憤怒…片や愉悦…どっちがど
っちなんて言うまでもない…

ウ「ユング共よ！！この男を始末するぞ！分かっているな？殺らな
ければ死ぬのはキサマらだ！！」

「ゲ…ゲゲ…ゲアアアアアッ！！！！！！」×100

ウェインの号令にユング達も動き出す…奴らにも恐怖はあるだろ
うが今の一喝で麻痺したらしい…

ウ「…護って見せるさ絶対に！アリエータには指一本触れさせるも
のか！！」

アリエータ…あの身体の真の所有者…そして自分にとって何よ
りも大切なもの…

ウ「さあ…行くぞゼオン!!」

ウェインは一度溜めを作ると、再び一気に突っ込んでくる…しかも、今度は大量のおまけ付きだ…

ゼ「…手厚い歓迎有り難うございます。なればここからは……」無礼講とさせて貰うぞ…ウェイン……」

斯くして、死兆星は妖しく輝き…

ゼ「何一つ護らせなどしないがな…」

等しく皆に死を振り撒くのだった……

第十四話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）m…話全く進んでませんね…しかも全く書けなかったし……なんか致命的矛盾とか見つかったて練り直していたらこんな遅くなって…もし御待ち下さっていた方がいたとしたらこの場を借りて謝らせて戴きますm（――）mそれと、ラッシュバイクの能力については完全に作者の個人設定になっておりますので原作の物とは全くの別物としてご覧下さい。相変わらずの亀更新ですがこれからも続けますのでたまにでも覗いてもらえたら幸いです。

第十五話（前書き）

いつからだろう？こんなどシリアスになったのは…

お久しぶりですm（――）m 駄文ですが読んで頂けると嬉しいです。

第十五話

ゲ（何…だ…これは…）

今、目の前で起きている光景…彼女は遠い昔、日常的にこれを見ていた…

ゲ（目の前にいる”アレ”は何だ…？）

立ち向かってくる人間達を薙ぎ払い、喰らい、犯し、蹂躪して
いたかつての自分…その時見ていた光景によく似ている…

ゲ（一体私は何を見ているのだ…？）

…かつては地を裂き、天を震わせた自分が、目の前のか弱い”筈”の人間から目を離せないでいる…

ゲ（私の知っている人間はこんなヤツではない…）

かつては日常だと感じた風景…いや、規模を考えればこの光景は本当に些末な出来事と言えるだろう…だが今、彼女は二つのことに激しい憤りを感じていた…

ゲ（…アイツは一体…）

1つは…そこにいる男に”恐怖”という感情を抱いていること…

ゲ「…アイツは一体何なのだ…」

…そしてもう一つは…彼にとって自分達など路傍の石に過ぎないだろう…ということ…

激しくぶつかり合う二人とその巻き添えを喰らった雑魚の断末魔が響く中、彼女は一人怒りに身を焦がすのだった…

………

ドンッ！という激しい衝突音が辺りに響く…

彼らが交錯するたびに”それ”は響き渡り、辺りは破壊の嵐が吹き荒れた…

戦闘の余波で壊れていく世界はまるでガラス細工の様に脆く崩れていく…

ウ「セイヤアアツ！」

ゼ「ハアツ！」

幾度目かの衝突…ギリギリという罅迫り合いの中でウェインは己の敵を見据えた…

ウ「…何がそんなに可笑しい？」

相手の口元にはいまだに笑み…それが自分への侮蔑に依るものなのかただ単に戦闘狂なのかはわからない…わからないが非常に勘にさわるのは確かだった…

ウ「…貴様もただの戦闘狂（マニアク）か…」

「

戦闘に愉悦を求める人種…その手の手合いは、彼がもっとも嫌いな者の一つだった…

ウ「…己の愉悦に生き、護るべき者も持たぬ騎士などが今の騎士団には溢れているのか…!？」

一旦距離をとり、すかさず魔力を絡めた衝撃波を放つ…

だが、

やはりゼオンは障壁を張るまでもなく剣を一振りするだけで掻き消してしまった…

ウ（やはり…”喰われて”いるな…）

ウェインは舌打ちする…どうやら相手は魔力を無効化、ないし吸収しているらしい…この手の相手は初めてで、しかも一瞬の油断すら出来ない相手…

何より相手の能力に対して対抗策は全く無く、状況は絶望的だった…

唯一状況を打開する方法としてゲーヴァスが転送魔法を詠唱中ではあるが奴に感付かれれば真っ先に殺されるだろう…

チラッと横目で彼女を見れば、詠唱は何とか継続は出来ているよ
うだ…

しかし…

ウ「!？」…そこにいる彼女は何やらものすごい形相でめちやく
ちや怒っていた…それはもう言葉に出来ない位…

ウ「……………」

ウ「…見なかったことにしよう…」

…現実から目を背けたくなるのも仕方がない…それは百年の恋も

冷める恐ろしさだった…

ゼ「護るべきもの…ねえ…」

そんな時、唐突に返事が返って来たのでウェインは相手に視線を戻す…ゼオンは先程と変わらぬ笑みのままだ…

ゼ「逆に聞くけど…アンタにとって護りたいものってのはその娘なのか？」

ウ「……だとしたら何だ…彼女には指一本触れさせんぞ！」

ウェインは冷蔑の目でゼオンを睨む…

ウ（…この男、まさか俺の目の前で彼女を…）

戦争、戦場は綺麗事ではない…人質や強姦、虐殺などの非道は日常茶飯事…そんな輩は必ずいる…どうやらゼオンに対しても同じ存在だと認識したようだ…

そんなウェインにゼオンは溜め息を吐く…

ゼ「…誤解しないでくれ。俺はアンタ程の男が騎士を棄てた理由に興味があっただけだ…」

ウ「何？」

予想外の答えにウェインは怪訝な表情で聞き返してしまう…今一

つ相手の真意が読めない彼に対してゼオンは続ける…

ゼ「アンタは強さもさることながらその人柄から騎士の鏡とも呼ばれていたそうじゃないか？」

ウ「…周りが勝手に言っていただけだ…俺はそんな手本になれるような人間じゃない…」

ウェインは思い出したいのか顔を逸らす…どうやら触れられたくないらしい…

ゼ「本人はそう思っていたとしても周りは周りだ…そんな奴が突然行方不明になった…当然周りは混乱しただろう……周りの想像通りだったにしてもお前の言う通りだったにしてもそんな男がそこに気が回らない筈はない…」

ウ「それがどうした？周りに嫌気が差していたんだ！もうどうでも良かったんだよ…！」

苛ついた様に語気を荒げだすウェイン…顔には焦りにも似た感情が浮かんでくる…

ゼ「そうか…だが、俺にはそいつが周りの信頼も、期待も、責任も、全部裏切つていかなきゃならない程の決意をした理由が…嫌気が差しただけとは思えなくてね…」

ウ「……何だ？…一体お前は何が言いたい！？」

明らかに狼狽し最早動揺を隠せない……そして、この後のゼオンの一言は彼の心を激しく決る…

ぜ「あの娘か？アンの理由って？」

ウ「…ッ！？」

ウェインは軽い目眩を感じた。目の前の男は全てを見透かしているのか？そんな気さえしてきた…

ぜ「…栄光、誇り、地位、名誉、信頼、期待、尊敬、仲間…全て棄てて愛情をとった…ってことか…」

ウ「……………」

ぜ「…まさか騎士の鏡とまで呼ばれた男が…女の為に全てを捨てる
とはね…」

ウ「だっ たら…」

ウ「だっ たら何だと言っ んだ！！」

半ば逆ギレ気味ではあるがウエインは叫んだ…まるで自分の心を
吐き出すように…自分の思いを表すように…

ウ「俺だっ て裏切りたくはなかつ た！！でも…彼女を救うためには
こうするしかなかったんだ！！その為だっ たら俺は何だっ てしてや
る！！悪魔の手先にだっ てなっ てやる！！それにッ！！」

ウェインは武器を振りかぶり、魔力波を放つとそれと同時にゼオンに特攻していく…ゼオンもそれに呼応するかのように構え直した…

ウ「俺はその事を一度だって悔いたことは無いッ！！！！」

そして二人は再び衝突する…激しい激突が繰り返され幾度かの打ち合いで鏝迫り合う…そして…

ゼ「なるほど……アンタが強いわけだ……」

ウ「……………！？」

ウェインの耳にもハッキリ聞こえたその声は、こんな戦場には似つかわしくない程優しかった…

ウ「…ッ戯れ言は終わりだ…」

ウェインは歯を食い縛り、切り捨てる様にそう言い放つ…そして、いつの間にかゼオンの顔からも笑みが消えていた…

………

「ゲギャッ!？」

「ギャギャギエ…ガ…」

「ギョエブバァ!？」

一匹…また一匹…いや、そんな数え方では遅いだろう…

二人の戦闘の余波を受け、次々と物言わぬ肉塊となるユング達…

打ち合えば衝撃で吹き飛び、片方が避ければ波動で切り刻まれる…彼らは最早障害物でしかなかった…

いや…

ゼ「じっとしている…！」

ユ「ゲッ！？」

ゼ「そおい！」

ゼオンは近くに”あつた” ユングを踏みつけると、ウェインに向かって思い切り蹴り飛ばした…

…どうやら武器にはなるらしい…

ウ「子供騙しを！」

無論、そんなことには動じず飛んできたユングを難なく弾き返すウェイン。

だが、

ウ（……………なっ！？）

今度は弾き返したユングの裏側からその身体ごと切り裂いてゼオ

ンの斬撃が飛んできた…

ウ「チッ」

すかさず両手で構えて防御するが、威力を殺しきるにはコンマ数秒動けなくなってしまう…

…勿論、奴はそんな隙を逃さない…

ゼ「もらった…」

一瞬で距離を詰め、ゼオンは背後にまわる…この後起こす行動にはいちいち説明はいらないだろう…

しかし、そんな予定も相手の行動によって大きく変わっていった…

ゼ「！……」

ゼオンを待っていたのは飛び上がったウェインによる一撃だった…

ウェインは衝撃に逆らわずに自分から吹き飛び、なんと空中で一回転しながら反撃してきたのだ。

元々線の細いウェインは、力で攻めるのではなくこういった変則的動きや身軽さを武器に戦ってきた騎士だ。

こういった曲芸的動きはお手の物だったし、力を受け流すという点では最早天才と呼べるだろう…

…しかし…

ゼ「まるでピエロだな…」

ウ「……ッ！」

そんな反撃にも動じることなくゼオンはその攻撃を双剣で受けきった。

意表を突く、スピード、窮地からの反撃、その三点を意識したこの攻撃…通常の魔導師では対処どころか反応すら出来はしない（まあ、そもそもこんな状況にもならないけど…）

だが、この男には周囲の挙動を把握する”結界”がある。

相手の筋肉の動きや呼吸の仕方、それこそ心臓の鼓動まで…その
気になれば目に見える範囲の”全て”に対して同じことが出来るの
だ…

まあ、つまりは

ぜ「全部筒抜け…ってことだ」

そしてゼオンは、がら空きになった脇腹に間髪入れず蹴りを叩き込
んだ…

ゲ「ウェイーンッ!」

ウ「ぐうっ……」

ウェインは派手にふっ飛ばされたが、逆側の壁に叩きつけられ
そんな処で何とか体勢を変えそのまま壁に着地した…

しかし、脇腹を押さえているのを見るに、どうやら今の一撃であ
ばらを痛めたらしい…

無理もない…飛竜すら昏倒する一撃を鎧の上からとはいえまとも
に喰らったのだ…というか形が残っていることに正直驚きだろう。
吹き飛んだ時に外れたのか仮面の下の素顔には苦悶の表情がありあ
りと浮かんでいる…

そこでふと、

ゼオンは違和感を感じた…

ゼ（若い…いや”若すぎる”な）

仮面の下の童顔は黒髪にサラサラショートヘア…とても30過ぎのオッサンには見えないその若々しさ…まだあどけなさが残る瞳…どうみても10代、少なくとも自分より若いのは確かだ…だからこそ違和感…

ゼ「そういえば…」

ゼ（…すごい身近にも外見と年齢の合わない奴がいたな…）

自身の上司が頭に浮かんできたが、すぐに気を取り直して首を振る…

ぜ（……アレはただの童顔だな）

内面（主に精神年齢）を想像した途端、概念の定着は不可能だと悟ったようだ…

ぜ「おっと」

他「ゲギッ!？」

そんな「戦闘中に余所見してる奴があるかよ!」とツッコミたくなる所にその他大勢達ユングがわらわら襲いかかっていく…

…
が

他「ゲギョエ!？」

他「ギョワアッ!？」

攻撃はまるであたらない…というか攻撃するたびに殺られるのでむしろ減っていく一方だった…

ウ「足止めにすらならないとはな…」

その光景をウェインは齒噛みをしてながら見ていた…

奴らに愛情など欠片も注ぎはしなかったが自分達が管理してきたのだ…目の前で何の役にもたたないというのは流石に頭にくるらしい。

ゲ「大丈夫か？」

ウ「…あ…ああ…動けない程じゃない…」

隣からゲーヴァスが声をかけてくる…幸い近くに飛ばされたおかげで彼女に手は出せなかったようだ…

ゲ「ならば今すぐ立ち上がってあと暫く時を稼げ。今最終段階に入った…」

ウ「…そうか…」

彼女の報せにウェインは僅かではあるが安堵する。ゲーヴァスは一人着々と作業を進ませ、この状況を打破するための唯一の手段…
テレポート
転送魔法の詠唱をあと少しまで終えていたのだ…この際言い方には目を瞑ろう…

ゲ「…奴を残して逃げるのは忌々しいが今は引くしかあるまい…」

彼女にとって敵を前にして逃げるなどかつてない程の屈辱なのだろう…ゼオンを睨む視線には激しい怒りが込められていた…

ゲ「…貴様も分かっているな？間に合わなければ…」

彼女はウェインに視線で促す…今のこの状況では置いてきぼり〃
死となるからか、その表情は緊迫の塊だ…が…

ウ「ああ…わかってる…」

彼の返事はまるで初めから用意されていたかのようにすんなりと
出てきた…

ウ「…もしもの時は気にするな…優先すべきはその身体だ…」

彼はとつくの昔に覚悟している…いざとなれば切り捨てられても
かまわないと…

それに彼女の冷静さは彼にとっては寧ろ嬉しかった…

彼女の頭に血が昇っていれば、下手をすると自分で突っ込んで周りを巻き込んだの玉碎…なんて笑えない展開もあったかもしれない。まあこれで最悪、彼女だけになっても逃げる事は可能だろう…

だが彼には見えていなかった…

ゲ「…愚か者が…何もわかっておらんではないか…」

哀しげに呟く少女の姿が…

そして、絶望は鎌首をもち上げた…

ゼ「…さてと…」

先程まではギャアギャアと五月蠅（うるさ）かったのが今ではシン…と静まり返り、あれだけ居たユング達も今やその全てが物言わぬ肉片と化していた…

そしてその惨状の中央から、”それ”は全身が紅に染まっているのも気にせずこちらに向けて歩き出していた…

ゼ「……………」

彼の足取りは軽く、真っ直ぐこちらに向かってくる…まるで緊張感の無い軽率な行動…だが、その表情を目にしたウェインは思わず息を呑んだ…

ゼ「そろそろ終わりにしよう…小鳥の囀（さえず）りももう終わったみたいだしな…」

…愉悦や興奮…怒り…あれだけの惨状を造り出しておきながら
もこの男からは全くと言っていいほどそれらが感じられない。

その顔には最初の頃の笑みや穏やかさ、戦闘中の気迫や精悍さなど皆無であり表情が無い…まるで感情が死に絶えたような目をしている…

そして何故か…その目を見ていると全てを諦めなくなった…

ウェインは知らずに武器を握る力を強めていた…まるで自分を鼓舞するように…

…明らかに相手の何かが変わった…いや、”削ぎ落とされた”のか…

ウ「……………え？」

そこで不意に、彼の意識下で何かが警告を発した…

普段であればとるに足りないことだっただろう…今だってよくはわかっていない…

しかし、決して拭い去ることは出来なかった…

それはまるで”目覚めるまで続く悪夢”の様に…

そして彼は閃いてしまう…

その先に待つのは絶望と知らずに…

奴ハサツキコウ言ッタ…

「小鳥ノ囀リモモウ終ッタ」ト…

…気付いた時には叫んでいた…

ウ「ゲーヴァスッ！！今すぐ転送を……！？」

ゲ「……あ………あ………」

…しかし、もう何もかもが遅かった…

奴は身体が一瞬ぶれたかと思うといつの間にか目の前から消えていた…

そして振り返った先には奴の背中があった…

彼女は突如現れた眼前の男に

身動き一つとれはしないだろう…

…そして…その時になって漸（ようや）く…

ウェインは自身から血液（たましい）が抜け落ちていくのを感じたのだった…

………

ゲ「ウェ…イン？」

我の目の前で、奴は全身から血を噴き出して崩れ落ちた…

ゲ「ウェイン？」

我は元々、こいつの事が気に食わなかった…

顔を合わせればやれ「彼女を解放しろ！」だの「彼女を汚すよ
うな真似は許さん！」だのと彼女彼女とやかましかったからだ…

正直、自分にとってこの身体は枷でしかなかった…

確かに魔力は強大だったが脆弱で容易く死ねる…我を封じた者
がこんなものだと屈辱だった…

娘の魂は今もなおこの身の内ですり、たまに起きては「彼に会
わせて欲しい」とこれまたやかましかった…気まぐれで身体を返し
てやれば四六時中引っ付いては猿共らしく腰ばかり振りおって…

本当に人間とは理解に苦しむ生き物だった…

しかし、同じ位の興味も湧いた…

何故こ奴等は互いを求めるのか…何故力あるものが皆を統べないのか…気づけば考えるようになっていた…

ある日私は、大嫌いだった筈のあの男を見ていると自然と体が熱くなってくるのを感じた…

急に声をかけられると言葉に詰まるつえに何でだか吐きそうになったが不思議と不快では無かった…

だから…いつの頃からだったろうか…

”私”がこの身体でいる間は人間の真似事をしてみようと思ったのは…

だからそのせいだろうか…

彼が崩れ落ちた後…私の口から彼の名前が叫ばれたのは…

………

ゲ「ウエエエエエーインッ！！！！！！！！」

ゲーヴァスの叫びが辺りに響き渡る…

何の為の叫びか…そんなことは彼女にはわからない…そう、本当にわからなかった…

流れる涙もそのままに彼の側に駆け寄ろうとするが、そんな彼女の前にゼオンは立ちほだかる…

ゼ「悪いが質問に」どけえっ！！！！！」

一瞬の後、爆発…

ただの魔力弾ではあるが渾身の力を込めて彼女はゼオンに向けて叩きつけた…しかし…

ゼ「…質問に答えてもらっぞ」

たとえ不意を突いたとしてもこの男には全くの無意味…ましてや感情まかせの衝動的攻撃など兎戯に等しい…

ゲ「キィイサアアマアッ!？」

ゼ「…あまりでかいのを使うと後ろも巻き込むぞ？」

魔力を吸収し彼はそのまま彼女の片腕を掴むとそのまま上に吊し上げた…

彼女はじたばたと暴れて罵声を浴びせ続けているがゼオンは全く気にしていない…

ゲ「放せ！ウェインが！ウェインが！！！！」

ゼ「大丈夫だ…ほつといてもすぐには死なない…それよりもアンタ達…」

そこまで言うてから彼は何か気付いたように一度頭を振る。そして…

「……………あー…ゴホン！……………貴方達の目的は何ですか？」

という風に言い直した…どうも言い方が気に入らなかったらしい…

それどころか先程までの死んだ目をした彼とは違い、いつの間にか最初の頃のような穏やかな表情に戻っている…

ウ「…う…く……………ゲ…アス？」

その時、彼女の耳に彼のか細い声が届いた…

ゲ「ウェイーン！？待ってる今すぐ…」

生きていた！！

彼女の目に安堵が浮かぶ…

しかし、詠唱する暇の無い彼女にとって今の状況は完璧に詰んでいた…

ゼオンの強化された筋力が相手では彼女は振りほどくことはおろか動かすことすら出来ないのだ…

ゲ「クッ…放せ！！放せ！！！！」

生きていたとはいえ間違はなく瀕死の重症…今すぐ駆け寄って治療したい…が、しかし、それは許されない…

ゼ「先に質問に答えてくれませんか？時間が経つと貴方の仲間が来るかもしれませんが…それに結構キツいんですよ…この体勢。」

そればかりか飄々とそんなことをぬかしてくる敵に彼女の感情は狂おしいほど燃え上がることになる…

ゲ「馬鹿かキサマは！？答えるとも思っているのか？そんなことより放せ！ッ放さんか！！！」

怒りに震える彼女の瞳はもはや憎悪一色に染まりつつある…

ゼ「…どうしても言ってくれませんか？」

対してゼオンは別に凄むわけでもなければ下手に出るわけでもない…しいて例えるなら”行儀良く”…

端から見てこの男が自白を促しているなどと誰が信じられるだろ

う？ただ相手に要求するだけなら人間以外にだって可能だ。相手だってナメられてるとしか思えない…

ゲ（何故この男はこうもへらへらと……ッ）

この2人の間には温度差がありすぎた…例えるなら地球と太陽程の…

ゲ「……ふざけるなあ！！早く放さんかあ！！！！」

…そして…

ゼ「やれやれ…」

ぜ「やっぱりこうするしかないのか…」

彼は剣を呼び寄せた…

ゲ「…ッ…!!」

彼女の顔に一瞬動揺の色が浮かぶ…だが、こうなることはある程度予想していたのか怯んだ様子は無い…

ぜ「悪いね…」

例え全てを話したとしても解放される保証は無い…寧ろ全てを聞いた後に殺される確率のほうが確実に高いだろう…ならば少しでも時間を稼ぎ救援を待つしかない…少なくとも自分が話さなければ殺されはしない…

現状では睨み返すことしか出来ない自分を呪いつつも、静かに一度目を閉じるとゲーヴァスはこれから襲いくるであろう苦痛に対して覚悟を決めた…

ゼ「今回の任務が調査じゃなければ良かったんだけどね…」

そこで彼に漸く少しだけ…本当に少しだけだが穏やかではあるがどこか寂しく哀しげな表情が浮かび上がる…

そしてゼオンは逆手に剣を持つと振りかぶった…

そこで彼女は何かがおかしいことに気づく…

逆手に持った刃…この密着状態では相手を殺すのであればそのまま突き立てるだけで問題無いだろうが痛めつけるのであればどう考えても無理だ、刺すのであれ斬るのであれ”行き過ぎ”てしまう…

ゲ「……ま…さか…？」

彼女の瞳孔が開いていく…急に呼吸が出来なくなり心臓が激しく鳴り響く。

彼女は失念していたのだ…

この世で最も残酷な生き物が何であつたかを…

その残酷さは自然、獣、魑魅魍魎など比ではない…

ゲ「待て!!!!!!!!!!!!!!」

少女の叫びにゼオンもまたピタリと動きを止める…

彼の刃の先には少年が居た…

ゲ「……全てを話す…だから…」

ゲ「だからもう…やめてくれ…」

その言葉を聞くや否や、ゼオンもあっさりと彼女を解放する…

彼女の瞳は最早反抗の意思など宿してはいない…

それどころか、いつの間にか蔑んでいた筈の者を愛し、それによって打ちのめされ涙を流している自分自身を…彼女はもう既にわからなくなっているようだ…

なににせよ…

彼女の心をここまで破壊したのは”人間”という存在そのものだ
った…

第十五話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）m

実は今回の話は一ヶ月前には書き終えていたのですがラストをどうするかで結局今まで悩みました…ホントいつからだろう？こんな血生臭くなったのは…

まあそれは置いといて…

ウェインとゲーヴァス（アリエータ）はグローランサー2の主人公とヒロインなんですが…これまた何かもう厨二道全壊ですいません…

気づけば書き始めて一年が経ちました…これからもう少しづつですが活動していきますので、もし視界の隅にでも名前を見つけて頂いたならば「こいつまだやってんのかよw」とでも嘲笑ってやって下さい。

それではお疲れ様でした…

第十六話（前書き）

お久しぶりですm（――）m大分遅れましたが十六話です。一時期
ゲー○センター○Xにハマった形跡があります…

第十六話

リ「時空制御塔…？」

暗い室内の真ん中で画面に向き合つりシャルルは顔を訝しげに曇らせた…

ゼ「ええ、どうも奴らの目的はそれの発見…及び占拠のようですね…」

ゼオンもまた緊張した面持ちで彼の問いに応える…その額には汗が浮かび、リシャルルの一挙一動に対して細心の注意を払っていた…

リ「確か…古代ベルカの伝説にあつたな…その名の通り時間、空間、次元を御する塔とか……なっ！？」

急にリシャルは右手で頭を抑える…彼の表情は変わらず険しい…

リ「くっ…なんということだ…こんなことがあっていいのか…!？」

ゼ「?どうかしました……な!?!…こ…これは…!」

リ（抜かった…私としたことが完全に虚を突かれたッ）

悔しげに見つめるリシャルには最早普段の聡明さや冷静さなど見る影もない…まるで哀れにも己の無力さを知った少年のようだ。

リ「敵襲だ…あの赤い悪魔だ…!」

ゼ「…まさか…4体…だと…!？」

突然の敵襲…今、彼らに危機が迫っていた…

赤い悪魔…かつてゼオンとリシャールが二人がかりで戦い、辛くも葬った最悪の敵…

その爪は鎧など容易く剥ぎ取り、強靱な肉体は多少の攻撃ではびくともしない…何より恐ろしいのはその機動性…上空からの攻撃には予測などまるで意味がない…まさに悪魔…

そんな奴らが今4体もいるというのだ…

ゼ（…あの一体だけじゃなかったのかッ…!）

ゼオンは歯をギリギリ言わせたまま敵を睨む…既に戦闘に入っている状態では最早手遅れだ…

リ「くっ！？我が鎧ですら一撃で剥ぎ取るとは…！」

ゼ「リシャル様！ここは一旦引いて態勢を…」

リ「ならんッ！！」

ゼ「！？」

状況を判断しゼオンは一時撤退を促すもリシャルはそれを良しとしない…

リ「…私はナイトマスターだ…敵に背を向けることなどできん！」

そう…彼は騎士の頂きに立つ男…逃げることなど出来はしない…

ゼ「しかしッ！」

なおも食い下がるゼオン…しかしリシャールは一つ微笑むと…

リ「ゼオンよ…我が生き様をとくと見よ！……………後は頼むぞ…」

そう言い残し敵に立ち向かっていった…

リ「行くぞ悪魔共！我が槍を受けてみよオ！」

ゼ「リシャル様アアアツ！！！！！！」

「まあだあまだあ！！！！！」

ぜ「リシャル様アアアツ!!!!!!?」

「ウオオオオオオオオオオ！！！」

ぜ「ウアアアアッ!!?!!!アアアアアアア!!!!!!」

その時、廊下からバタバタと足音がしたと思ったら…

バーンッ!!!!!!!!!!

…と、突然ドアが開き…

カ「夜なんですから静かにして下さいッ!」

バン！！！！！

ゼ・リ」……………」

と、まあ現れたカリムが一喝…固まる二人…

画面の中ではパンツ一丁のオッサンが赤い悪魔（レッド○リーマー）によって一瞬にして骨にされている所だった…

……………

リ「ハア…それで？どこまで聞いたんだったか？」

軽くため息をつきながらリシャルは画面に目をやる…今は彼に変わってゼオンが続行中のようだ。

ゼ「え〜っと確か……奴らが時空制御塔を探してる…って所でしたかね？」

画面の中では鎧を着たオッサンがその手から数多の槍を延々と投げ捨てていく…攻撃を喰らうといきなり下着一枚の姿になるのは経済的にも正義の味方的にも正直どうよ？と誰もが思ってしまうだろう…

リ「うむ、そこだな…で？何故奴らはそんな有るか無いかもわからんものを探しておるのだ？」

呆れたように呟くりシャル…スナック菓子を片手に画面を見つ

めるその姿はマジでやる気ねえー……

ゼ「何でもそこに自分の身体があるとか何とか。自分は魂だけの存在でこの身体に封印されてたが乗っ取った……とか、名はゲーヴァス……とか言っていましたね。」

しかし、そこでリシャルの動きがピタリと止まった……

ゼ「そういえば変わった娘でしたね。なんというか……魔力の質が違ったのかな？誰かと（魔力が）似てた様な気もするし……何より名前………？どうしました？」

ふと、気づけばリシャルが固まっていた……

ゼ「あの……リシャル様？」

リ「……………」。

反応が無い…

普段見せない様子にゼオンも少し訝しむ。もしや今の話の中で何か思う所があったのか？

リ「……………」（カクン）…んあ…？」

ゼ「…寝てただけですか！？」

リ「ふわぁ…っ…スマンスマン。歳をとるとどうも集中できんな。」

ゼ「…アンタに歳の話程似合わないものは無いな…」

特に悪びれる様子もないリシャルに、ゼオンもツツコミに少々素が出てしまうが…まあ仕方ないことだろう…

リ「駄目だ…細かい話は明日にしよう…もう寝る…」

一つ大欠伸をすると彼はベッドへ向かっていく…きっと今から幸せな夢を見て明日の昼過ぎに目を醒ますのだろう…なんと素晴らしい（憎たらしい）墮落ライフ…

ゼ「あ、そういえば…伝え忘れてたことが一つありました。」

だが、世界はそんなに甘く出来てはいない…

唐突だが実はこの状況、たった今帰ってきて報告に来たゼオンが魔○村を見て「一機やらしてもらってもよかですか？」となって二人ともテンションMAXのバーニング！という経緯を経て今に到っており…

リ「何だ？私は眠いんだ…簡潔にまとめろ。」

本題はまだ何も喋って無いわけで…

ゼ「あ、じゃあ簡単に。」

言っ
てしまえば結果報告すらまだだった…

ぜ「~~~~~ました（てへっ）」

り「……………何？」

…世界は働き者にも怠け者にも厳しいのだ…

……………

時は遡り遺跡内にて…

ゲ「これで全てだ…」

ゲーヴァスは跪き全身の力を抜いた。

その姿には最早生氣は無く、その最後の一時を噛み締めるかのよう
にウェインの髪を愛おしげに撫で続けている。

彼の意識は失われてはいたが、治癒魔法をかけられた今となって
は直に目を醒ますだろう…

しかし彼女は、このままでいいと感じていた…

彼が目を醒ませば必ずこの悪魔に立ち向かっていくだろう…敵わないと知りつつも決して諦めはしない…

もう彼が傷つくのを見たくはなかった…

ぜ「すまない…酷なことをさせたな。」

気休めどころか逆上してもおかしくないこのセリフにも、感情は何も湧きあがってはこない…

…私はもう諦めたのだから…

ぜ「…そろそろいいかな?…」

悪魔は確認するように一言言つと刃を構える。

戯言をほざく暇があるならさっさと殺して欲しかった。

…今は彼が目を醒ましてしまう事だけが恐ろしい…彼は私を許さないだろう…

…死ぬその時まで彼に罵倒などされたくはない…

…早く…早く…さあ早く……私達を冥府に連れて行ってくれ…

そして刃は振り下ろされる…

だが、個人の想いなどまるで無視して世界は廻るものだ…

彼女の願いなど嘲笑うかのように歯車は回り続けていく…

ギン…という音が響いた後、少女は自分が死ねなかったことに
気付いた…

………

ぜ「……………」

振り下ろされた刃…その行く手を遮るように銀髪の男が防いでい
る…

…何と言っか…妙にワシャワシャした感じの服なのだが…コイツ
の趣味だろうか？

その手には装飾の施された大剣：黒を基調とした”それ”を軽々と支える姿は華奢な見た目よりずっと膂力に優れているのは理解できる…

しかし…

？「…あんまり動揺しちゃいねえな…」

…この男はいつたい”何処”から現れたのか？

動揺はしていた…しかしそれは彼が突然そこに現れたからであつて、彼女を助けたことではない。何故なら自分は待っていたのだから…

戦闘が始まるすぐ前には微弱ながらも気配を感じていた…ヤツサ
ンには別ルートから地上に脱出してもらい、奴らは下まで誘き出し
て一網打尽…彼女とのやり取り事態は時間調整の”釣り”…という
予定だった…のだが…

結界は正常に作動している…だというのに、突如自分の目の前に
この男は現れたのだ…

そして…

？2「……………」

もう一人、空（うえ）に…目の前の男と”同時”に気配が現れた
のだ…

ぜ「…随分変わったことが出来るんだな？」

一人は上に、一人は目の前に…どうやって現れたのかわからない…
あまり無い経験だった…

ぜ（こんなことが出来るのはウチの金髪ボーヤだけだと思っていたが…）

確かに、絶えず超高速で移動したり音波と肉体が一体になったりすればこの結界の回避は可能だ…実際リシャルと組み手をやるとたまに「速さが足りない！！」とかふざけたことを抜かしながら超高速戦闘という名の嫌がらせを仕掛けられる…

しかし、そんなことが出来るのは彼が”異常”だからであって一般Peopleにはまず不可能なのだ…ということは…

ぜ（2人共そういうレベル、か…？）

過信しているわけではないが、あんな馬鹿げた真似が出来る奴が世界に何人もいられては今まで自分は生きてこれなかっただろう…

まあ何にせよ、

？「へっ…テメエのスカしたその面をとんだマヌケ面にしてやりたかったんだがなあ…」

目の前のこの男…こいつに至っては何一つ感じとることが出来なかった…しかしこの男、品のある顔立ちをしているのだがその口調から感じ取れる荒々しさは高貴という言葉からは程遠い…チンピラという表現がかなり似合いそうでどこことなく小物っぽい男だ。

だが見かけで判断するのはどんな場面においても確実に死亡フラグとなる…

正直、余裕ぶって背中から一突き…なんて情けない死に方はゴメ

ンだ…

ということはこう考えればいい…

敵は皆”異常”なのだ…この際どちらが一番とかはどうでもいい、ただ二人の異常者を相手にすればいいのだ。

彼の思考がそう切り替わるまで時間はかからなかった…

？「どうしたあ？ビッてんじゃねえぞオラァ！！」

ゼ（前に一人…上に一人……それなら…）

ゼ「目の前の奴から相手すればいいか」

？「！？……ハッ！！イイねえイーねえ！！！！そうこねえとな
ああッ！！！！！」

そこから二人の力が跳ね上がった…先程までとは比べ物にならない
その圧力…ブレスチャー辺りがミシミシと軋み、地面がどんどんひび割れてい
く…大気は震えてゴゴゴ…という音まで聞こえてくる…

ゼ「…ROUND 1…！」

？「…へッ…READY…！！！！！」

二人「死ね（やあ）ッ！！！！」

二人は勢いよく相手と剣を弾き合い、そのまま乱撃戦へと移行していった…

.....

その斬撃の応酬はある意味で単純…殆ど無意識に繰り出される連撃を片や防いで片や攻める、その繰り返し。

しかし、繰り出される一撃は常人の目に止まる様なものでは無く、例え無意識であっても相手の隙は逃さず突いていく…そのくせ、互いにそこを理解しているからか一度も身体に傷を負わせることは無い。

まるであらかじめ打ち合わせ済みの小芝居を見ているようだ…

そして、それをゲーヴァスはただぼうつと見ていた…

立ち上がる気力も、何かしようという意思も、さっきまで抱いていた夢も希望も野望さえも失った…今の彼女はただひたすら、その瞳から涙を流していた…勿論、その涙は歡喜から来るものではない…

幸か不幸か…普通に考えれば幸だろう。自分の命も”彼”の命も助かるかも知れないのだから…

しかし…

”カレハワタシヲユルサナイ”

ゲ「あ…ああっ……………」

彼女にたった一つ残った物…皮肉にも、それが彼女を最も苦しめることになる…

そしてそれは…もうすぐ傍まで来ている…

.....

？「ハッ…やるなあ！あんだよ！？今の騎士団にも骨のある奴は居るんじゃないか！」

銀髪はその顔を禍々しく歪めると愉しげに笑う…

…もしかしたら残念なイケメンってのはこういう奴の事を言うのかも知れない…

しかし、そんなのもつかの間、銀髪はふと思い出したように…

？「おい姫さんよお！さっさと隠れな！出来れば寝てる奴もつれて
…」

彼はゲーヴアスに怒鳴るように呼び掛ける…単純に邪魔になるから
出た言葉なのだろう。だが…

ゲ「… 그레이…？何故…どうして…今……？」

ゲ「…おい？……オーイ？……姫さん？」

彼女の様子がおかしい…ここにきて銀髪の男…” 그레이”や他の
二人もそれに気づいたようだ…

今の彼女はもはや生ける屍…いや、死に損なった殉教者の方が近
いか…

グ「アニキ!! 姫さん何かトんじまってるみてえだぞ! どうすんだこの女!？」

そんな展開に微妙に困惑するグレイ…

?2「…問題無い…というよりやることに変わりはない…」

?2「無いのですよ」

それに対して、返事は上から降ってきた…

遺跡内の天井部に先程から浮かんでいる一人の男。

視線を動かしてみればグレイと同じ銀髪にイケメン…よくみれば

その姿は瓜二つ…っていうか…

ゼ「…双子…か…！？」

これには流石に驚いたのか、ゼオンも両者を交互に見比べてしま
う…（勿論この間も手を休めはしない）

黒の大剣からワシャワシャした服までそっくりそのままである…
違いがあるとすればこちらの方がどことなく落ち着いた雰囲気であ
ることと、彼の周りを小さな人間…妖精の様なものが忙しげに飛
んでいることだろうか。何にせよ、敵には変わり無いのだが…

？2「ラミィ…どうだ？」

ラ「この空間内はとっても良い子達ばかりですう！フルで15分は
いけますよー！」

向こうは向こうで何やらよくわからん話をしている。

ラミイと呼ばれた小人はクルクルと回ったあとに満足そうに微笑むと、その口調のままにのんびり何かを唱えだした…

先の折れたとんがり帽子…黒地の服とミニスカート…ピンクの緩くカールしたロングヘアーに悪魔の羽…更につるぺたロリータでボケボケ…萌えの詰め合わせみたいなヤツだ…

ゼ（…リイン…じゃ勝てないかもなあ…（色んな意味で））

初めのうちはそんな何処からか「リインは負けてないですー！」とか「ウチの子が一番に決まってるやろー！！？」とか聴こえてきそうなことをゼオンも考えていたのだが…

ラ「では皆さん！お願いしますう〜。」

…その後起こった出来事には目を疑い戦慄した…

ゼ「……………！？」

この空間内から突如、夥しい数の光の球体が出現し、彼等を中心に集まっていくではないか…

ゼ（収束法…！？）

収束法…戦闘等で霧散した魔力を再び束ねて放つ高等技術…

これを得意とする魔導師の顔とその威力の余りの凄まじさを思い出し、ゼオンは身震いすると同時にイメージしてみる…

ぜ（……アレは喰いきれないだろうなあ……）

…別名”白い悪魔”が「全力全壊！！」とか言いながら自分を塵の如く消し飛ばすシーンしか浮かんでこなかった…

…まあ、チャージの時間から察するにこれはそこまで大規模ではないようだ…が、しかし…

ぜ（…何だアレ？生きてる…のか？）

目の前で光の球は踊るように蠢く…触れようとすれば逃げるように避け、吸収しようとしても微々たる物だ…魔力自体に耐性があるとしてもいっただろうか！？

……クスクス……

その時、確かに聞こえた…見るものに安息と恐怖を与える深い闇色の光球群…そこから発せられた自分を嘲笑う声が…

ぜ「…まさか…これが”精霊魔法”…なのか？」

精霊魔法…文字通り世界に存在するといわれる精霊達に直接働き掛け、行使する魔法。彼らは魔力の上位存在であり、魔力を行使する者でもある…故に彼らは運び手であり、誘い手であり、作り手であるという…

ぜ（要するに（魔力を）持ってくる、呼び寄せる、生み出す…ってことか…伝説の”古代魔法”の一つつてのは伊達じゃないな…）

しかし、これが使えた人物なんてそうはいないのだ…

そこまで考えたところでふと、ゼオンの頭の中にある人物達の名前が浮かびあがった…

おそらく…だが多分…間違いない

…彼らも自分の”先輩”だ…

.....

グ「そろそろやべえな…」

グレイも一度距離をとるといきなり”消えた”…影も形も…結果に引っ掛からないことも考えれば下手をするとその存在でさえも…

目をやった先のゲーヴァスも次の瞬間には消えていた…恐らく、これがグレイの能力なのだろう…

その姿を完全に消す能力。多分他人にも使えるのだろう…最初に現れたときもこれを使用したのだと思われる…しかし、消えている間に攻撃してこないことや自分とゲーヴァスを同時に消せない所を見るに制限のある能力のようだ…

もう一人の銀髪…彼は両手を広げるとその周囲に今度は大きな…一人は裕に呑み込めそうな程の球体が多数出現した。その黒い表面はボコボコと荒れ狂うように隆起し、解放の瞬間を今か今かと待ちかねている…

数から見て恐らく広域…それも無差別だろう…グレイが身を隠し

たのがそれを裏付けている。

辺りを見渡してみても隠れる場所など何処にも無い…というより、逃げるにせよ隠れるにせよ時間が無かった…

ゼ「…やれやれ…」

しかしゼオンは、そう言って一度溜め息を吐くとそのまま目を閉じてしまった…

ゼオンの実力ならば完全回避は無理でも防御障壁で耐えきるなり弾幕を掻い潜って出口までなら辿り着くなり出来るかもしれない（もっとも、だからこそ時間差で一発残しておくし、出口も 그레이 が張ってる）

勿論、そこまで読んだ上での行動なら納得もいく…しかし、目の前の男がそんなに諦めのいい奴には見えなかった…

？（…そうしないうことは…）

？「ラミィ」

ラ「？何ですマスター？」

？「ユニゾン」だ…」

”彼”の表情にも緊張が走った…少なくとも、自分の全力をさらけ出すほどには…

………

地上・遺跡入口

ヤ「フウ…」

ヤ（漸く外に出られたか…他のルートには敵がいなくて助かったな…）

ヤクマルは自身の右手を握ったり開いたりしながら感触を確かめる…

彼と別れる際に殆どの魔力は返して貰えたが、一度彼の魔力に変換された為かまたはリンカーコアが損傷している為か身体にうまく馴染まないうえに自然に流出までしている…

まだ余裕はあるが空になれば再び倒れることになるだろう…

ヤ（動けるだけ感謝せねばなるまい…）

自分がしたこと非礼に比べれば寛大な処置といえる。

しかし…

ヤ（本当に一人で残ってきて良かったのだろうか？）

今の自分では足を引く張るだけだというのはよく理解しているし、あれ程の実力者なら心配ないとは思う、が多勢に無勢…更にその内の一人でも彼に拮抗…ないし一歩手前の手練れが居たとしたら…

ヤ（…彼は貴重な人材だ…この件の裏に潜む”闇”に対抗する為に、無くてはならない存在となる…ここで失う訳にはいかない…）

だが、今自分に出来ることなどこの場で帰りを待つことしか出来ないのが現状…全て自分が蒔いた種とはいえ齒痒かった…

ヤ「嫌なものだな…待つしかないというのは…」

その時、左手に持っていた”モノ”が微かに揺れた…

ヤ「!？」

先刻偶然見つけたものだがちゃんと生きている…ほのかに温かく、弱い胎動を繰り返すソレはいい土産になると思って持ってきたのだ…だが…

ヤ「まだ魔力は注いでいないのに何故？……ハッ！？」

ヤ（もしや…今身体から流れている魔力に反応して…か？）

とすれば、寧ろこの反応は…

ヤ「お前も気になるのか？彼のことか？」

…ブルブル…

…思わず話しかけてしまったもののしっかりと反応が返って来た
…間違いない自分の…いや、”彼”の魔力に反応して確実に孵化は
始まっているのだ…

…ブルブル…

まだ生まれる前だというのに既に主の魔力の揺らぎを感じ取ったか…先程から不安そうに震えている…

ヤ（きつと優しい子なのだな…）

ヤッさんはそれを優しく撫でる…まるで不安がる幼子をあやすように…彼の表情も普段の強面と違い、穏やかで見る人によっては誰だかわからないものとなっていた…

ぜ（ヤッさん？聞こえますかヤッさん？）

そこに、件の男くだんから念話が入った… 声音から察するにどうやら余り余裕は無さそうだ……

ヤ（はい… どうしました？）

既に表情はいつも通りの精悍な強面に戻っている… 負傷のせいもあって若干顔色は悪いが。

ゼ（今どこです？ 場所によってはちょっとヤバイことになりそうなんです…）

… 歯切れが悪い… 恐らく遺跡そのものを破壊しかねない物を使うつもりなのだろう…

ヤ（それでしたらご心配無く、既に地上に脱出しました、現在入口付近です。）

だが彼の返答はこちらの予想を上回るものだった…

ゼ（いや、駄目だ！今すぐその場を離れてください…出来るだけ遠く…転移できるならした方がいい…）

その言葉を聞いた瞬間…私は弾かれるように飛び出した…向かう先は、自身がやって来た転移魔方陣…

ゼ（有り難う御座います。これで心置き無く使うことが出来る…）

そこで、彼との念話は終わった…

その直後…大地が振動を始める…鳥達は一斉に飛び立ち、雲一つ無い青空を黒く染め上げる…

そして、次に彼が目にしたのは…

ヤ「…馬鹿な…」

大地を吹き飛ばす閃光と…

ヤ「あの場にいるのは”人間”なのだぞ…」

崩壊していく世界だった…

第十六話（後書き）

御読了お疲れ様でしたm（――）mまた引つ張ってしまった…銀髪
の二人については性格など人それぞれだったと思いますが自分の時
はこんなんでした（グレイは少々個人の印象が入っていますが）m
（――）m

後半大分駆け足だったため、確認はしましたが乱文や誤字脱字な
ど多いかもしれませんのでご指摘頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5781j/>

魔王は六課の食堂長

2011年10月1日15時40分発行